

書評

第119号



【特集】

千里市民講座

- 宇井 純
総論・〈公害〉をどう把えるのか
- 小田 実
わが〈朝鮮〉との出会い

連載

本のいろいろ ① 関大図書館―田辺聖子―

仲井 徳

図書館には大量の情報をストックされているが、それらを取り出し利用するにはチョットしたコツが必要で、探す（検索という）やり方を工夫することで、「こんなものまで！」といった発見があり、結構楽しめる。

関西大学図書館は国宝級のものはないけれど、いろんな資料が所蔵されているので、一利用者の立場から検索方法を考えながらいくつかを紹介してみたい。

第一回は田辺聖子さんの本を取り上げてみる。図書館で本を探す最初は、端末機でKOAALAを検索することから始まる。「田辺聖子」と入力して所蔵を検索すると、三三三件ヒットした。文芸作家の場合、単行本、個人全集、文学全集、合集及び初出掲載雑誌などに収録されるのでこの数字が全著作というわけではない。関

大の場合は上下冊でも二件にカウントしている。田辺聖子さんのプロフィールについては、『近代文学事典』などを調べてもらう必要があるが、昭和三十八年（一九六三）に『感傷旅行』で芥川賞を受けておられるので、それを探すと、単行本で十件ヒットした。翌年に文芸春秋新社から発行した本が初版であろう。請求番号がL

O2*T8*12、登録番号が204066433である。厳密に初出の書誌を調べるには初めに発表した雑誌『航路』、次いで芥川賞発表の『文芸春秋』に当る必要があるが……（関大図書館には所蔵しているようですので探してみてください）。

この「L02」は別置記号といって一般図書と別の場所に置いてある本の意味だ。図書館では「L02」は準貴重書の扱いだが、申請すれば見せて（閲覧）もらうことができる。ところで、「L02」は大阪文芸資料のコレクションで大阪の作家、芸能人、画家等の著作を初版本で集めており、冊子（本の形をした）目録が発行されていて便利であると同時にページを繰っていると何かと発見がある。

ちなみに、Yahoo!で「田辺聖子」を検索してみるとcafe KYOKOという人が二三タイトルについて解説をしている。世の中にはマニヤックな方がいるものだと感心、あきれたりすることである。

（なかい いさお神戸女子大学・元関西大学図書館員）



（関大図書館所蔵）



特集 ● 千里市民講座

千里市民講座「活字化と「書評」誌収録について……………	吉田 永宏	2
宇井純さんの講演について……………	小田 康徳	4
総論・〈公害〉をどう把握するのか……………	宇井 純	6
図書館にある宇井純さんの書籍……………		27
小田実さんの講演について……………	吉田 永宏	28
わが〈朝鮮〉との出会い……………	小田 実	30
図書館にある小田実さんの書籍……………		71

連載

本のいろいろ……………	仲井 徳	表2
近代日本文学史を考える(一)……………	吉田 永宏	74

読んで

うちのお父さんは優しい 鳥越俊太郎・後藤和夫著……………	94
ニユースの職人 鳥越俊太郎著……………	96
あのくさ、こればい 鳥越俊太郎著……………	98
シネマ90S ジャーガン・ミューラー著……………	100

編集後記……………

題字 ■ 網干善教 (文学部名誉教授)

〈千里市民講座〉活字化と『書評』誌収録について

吉田 永宏

かつて、〈千里市民講座〉という名の素晴らしい市民講座が開かれていた。一九七四年六月～七七年三月（以後はゼミナール形式によって九六年まで継続）の期間のものである。市民を対象とした開かれた講座で、企画運営に当たったのは千里山生協に関わった、女性を中心とした複数の市民であり、その中心部門を荷っていたのは関西大学生協の活動に関わっていた関西大学教員のメンバーや生協のメンバーであった。

この講座の一流講師陣による講義のテープ起こしをしたものが見つかったことを聞き、それを見せて貰ったわたしは驚くと共に、即座に折角のこれを活字にしない手はないと考えた。

嬉しいことに、その願望は叶えられた。関西大学生協同組合の四十周年を記念して刊行された『小さな志 大いなる問いかけ―千里市民講座の軌跡』がそれである。古在由重「母を語る」、尾崎秀樹「ゾ

ルゲ事件の人々」など十三編に上る講義録をそこに収録することができた。この「小さな志 大いなる問いかけ」を一人でも多くの人に読んで欲しいと改めて強く願う。

しかし、分量上の制約があつて同書に十三編しか収められなかつたということは、矢張り残念なことではあつた。積み残さざるを得なかつた講義録の中にも、現在でも意味を失っていないものが数編ある。二十余年を距てもなお歴史的証言としての価値を毫も失っていないと言ひ得るものが数編ある。これらを是非、休刊状態にある『書評』誌で活字化して欲しいものだというのが、わたしの切なる願いでもあつた。

繰り返すが、千里市民講座は二十余年も以前のものである。現在の学生諸君の殆どは未だ生まれてもいない時間のものである。この時の推移の中での国際情勢、国内情勢の変化は、その本質的問題は兎も角として、激しいものであることは確かであつた。当時の講座での発言が、そのままの形で現在の社会状況の中で十分に理解されようとは矢張り思えない。中味そのものもつ歴史的証言としての大きな意味合いが今日の状況下で十二分に發揮されるためには、理解を促すそれなりの所作を必要としよう。

敢えて言うが、七〇年代に為された発言の歴史的証言の重さは毫も減じておらず、現在の世に呼吸するわれわれはそれを正面から受け止めねばならないと考える。現実を、われわれの置かれている社会的条件を、よりよいものに変革するためにそれは必須のものであろう。若い世代により理解可能なものにするための解説的なものを付すなどの努力を加えながらも、敢えてこれらの講義録を活字化する所以である。是非のご一読を願いたい。

〔小さな志・大いなる問いかけ―千里市民講座の軌跡〕編纂委員長・文学部教授

宇井純さんの講演について

小田康徳

この講演は、昭和五十一年（一九七六）千里で開催されました。いささか年数がたっており、今となつてはよく分からなくなつた事情もいくつかあるようです。講演の中に出てくる政党のありようも変わつていきます。当時大きな存在であつた社会党も民主党も消えました。自民党も公明党も内実は大きく変わつているものと思ひます。しかし、そうしたこともありすが、この講演の行われた一九七六年というのがどんな時期であつたかといふのを知つておくことがもつと重要でしょう。公害反対の世論、住民運動の力というものは、その七、八年前から爆発的にもりあがりしましたが、その成果の獲得とともに

少しずつ落ち着いてくる中、すなわち、一九七三年公害健康被害保障法の制定あたりから政府・財界方面からの巻き返しを受け始めていました。七八年には国民世論の強い反対の中二酸化窒素の環境基準を二、三倍に緩和しています。やがて、公害という言葉自体意識的に使うことをやめ、公害問題の終結を印象付けようとしていました。この講演が行われたのは、こうした時期であるといふことを知つておきたいと思ひます。

宇井純さんが、わが国の公害問題についてもつともすぐれた研究者であり、住民運動のリーダーであつたことは周知のことと思ひます。東京大学の助手時代、同大学



で開いた自主講座はその大きな拠点となっておりまして。宇井さんに励まされて公害反対に参加した人もたくさんおります。このように大きな功績をあげた宇井さんですが、東京大学ではついに彼を昇進させることがありませんでした。この講演のときも肩書きは東京大学助手のままであることに注目しておいてください。宇井さんはその後沖縄大学に招かれ、同大学において沖縄の環境破壊問題と対決することとなります。今年三月、御定年を迎えられたと聞いております。

宇井さんの話は、公害問題の生じてくる社会的・思想的背景を鋭くえぐるもので、科学技術のあり方、暮らし

のあり方を考える上で多大の示唆に富んでいます。また、今日の環境問題を解決する上でも大きな力となるものです。

今回、ここに翻刻するにあたっては、理解しやすいように小見出しを適宜の位置につけました。ぜひ、若い方にこの講演記録を読んでもいただきたいと希望します。そして、ひと昔前になりましたが、そのころの雰囲気を感じるとともに、今も続く公害や環境問題について考えをめぐらしていただきたいと思います。

(おだ やすのり・大阪電気通信大学教授)

総論・〈公害〉をどう把握するのか

宇井 純

御紹介いただきました宇井です。今、私の作った映画を見ていただいたんですが、この映画でおわかりいただけるように、日本の公害は明治以来の長い歴史をもっており、その中で一進一退を続けている。被害者の運動によって公害に対する考え方が前進した時期もあれば、今度はまた元の木阿彌になった時期もある。

特に第二次大戦によって、人間の命がタダ同然にみられたことによる公害被害者の苦しみは、まだ決して完全に立ち直ったとはいえない長い空白期を残しました。昭和三十年代の末に至るまで、実質上は日本の公害反対運動はほとんど進まなかったことを、水俣病などの経験を

通じて感じます。

日本の自然条件は公害をおこしにくい

ところが、日本がこんなに公害がひどくなつたにもかかわらず、よく考えてみますと日本には公害の起りにくい自然条件があるということを映画『公害原論』の最初でちよつと申しました。

つまり、まわりが海で囲まれていて、何でも海に吐き出してくることができた。これがもし海なし国だったらどうだろう。たとえば、ヨーロッパでは海なし工業国がいくつもあります。チェコスロバキアとかスイス、オー

ストリアだとかは全然海を持たない国であり、そういうところで工業廃棄物をどうするかというのは、結局、陸へ積んでおくとかあるいは川へ流すとか、どうやってもうまい手段がない。そうしますと、日本のようにまわりが全部海で、吐き出してこられた国は、実に楽だったといえます。

それから、その海に潮の干満があり、夜中に流したものは朝までにどっかに持っていくてくれます。潮の干満のないレーニングラード（現在サンクトペテルブルク）だとカストックホルム、ヘルシンキという町を訪ねてみますと、町の下水でさえいつまでたつても海に流したものが目の前にすわっていることを経験しまして、仮に大阪湾に潮の干満がなかったらどうだろうと考えると、それだけでゾツとします。

恐らく、大阪湾で潮の干満がなかったら、夏になりまずとヘド口（ヘド）の海からメタンガスがわき、同時に猛毒の硫化水素、卵の腐った時の臭いがわいてしまいますから、まずこの千里ニュータウンぐらゐまでは夏の大气汚染で住めなくなっているだろう。実際に田子の浦ではそういう現象がおこり、ヘド口を浚渫（しゅんせつ）しようとする船の船員がガスにまかれて目をまわしたとか、あるいは国鉄の貨車の入れ替えをやっていた機関士がやつぱりガスで失神し

て事故一歩手前までいった、なんていうことが現に起っております。

大阪湾でそういうことが起つたら、大阪という都市は全然住めなくなつて、恐らくどこか別の山奥にみんなバラバラに住まざるを得なかつただろう。潮の干満という昔からある自然条件のおかげで、実はこんな巨大都市が工場と共存できるということもいえます。

それから、日本は雨が多くて急勾配である。川が急ですから、いつべん流しても、すぐにきれいな水で押し流される。これが揚子江とかライン川、ドナウ川という大きな世界の河川になりますと、上流で変なものを流したら何ヶ月もかかって海へ流れつく。その間、ずっとその川は汚される。この実例はいくつもあります。たとえば、私がちよどヨーロッパを歩いておりました一九六九年の六月に、ライン川のローレイの近くで、農薬をドラム缶二本ぐらゐ、船から落したのか間違つて流したのか、とにかく川へ流してしまいました、そのためにそこから下流の魚が全部浮き、オランダの水道が二週間ほど全部止まったことがあります。こういうことがありますと、下流の国はどうしても上流を恨みますから、国際的な緊張がだんだん増えてきて、時々まとめてそれを戦争で解消することになってしまいます。

あるいは揚子江を例にとつてみましても、四川盆地、重慶、青島を含みます、あの揚子江の上流だけで一億一千万の人間が住んでおります。日本の人口とほぼ同じぐらいが、中国のあの奥地に住んでいますから、もしあんなところで日本並の工業開発をやったら下流は全部アウトということになります。ちょうど大阪が滋賀県に引越したみたいなもんだと考えたらわかかと思ひます。滋賀県で大阪みたいなことをやったら、恐らくこの千里あたりは水も飲めない、淀川の水は一滴も使えないということになります。今、それを滋賀県は一生懸命やろうとしています、これはやっぱりするべきではないということがでてまいります。

それからもうひとつ、私の住んでおります関東には「カカア天下とからつ風」ということわざがございます、冬になると強い風がシベリアの方から吹いてくるおかげで大気汚染が助かっています。もし、この季節風がないとすると、燃量を大量に使う冬の方がどこでも大気汚染はひどいのでして、今、夏に我々は光化学スモッグで苦労しますが、この倍ぐらいのものが冬に出てくるだろう。この風のおかげで日本の大気汚染は半分以下に下がっていると判断します。

なぜ公害がひどくなったか

そういう非常に恵まれた条件があるにもかかわらず、ここまでひどくなったというのは何といつても、企業の横暴とそれから行政の怠慢なんです。これも実例をあげるときりがないので、ひとつだけ水俣病で経験した例をあげておきますと、被害者が押しかけていっても全然相手にしない。それだけじゃなくて工員が出てきて被害者を袋叩きにするということが堂々と通つた時期すらありますし、あるいは政府が一丸となつて原因をもみ消そうとしたこともある。そういうことが日本ではごく当り前に続いた。それを許してきた人権思想の弱さというものも、また我々自身の問題として反省してみる必要があると思ひます。

それから、私の仕事である科学の側面では公害を生み出すような科学技術、それを止めようとしなかつた科学技術の責任が有りました、私のいる東京大学が一番いい例ですけれども、公害の長い百年の歴史、東大も今年百年祭をやるそうですが、この百年の歴史の中で被害者の側に立つた東大教授が、これは公害だとはつきり言つたのは実に一回しかないんです。それは明治二十三年（一八九〇）の足尾の鉍毒事件で、被害者の農民が土や作物

をおそるおそる東京農科大学に持っていった時に、それを分析したら銅とヒ素がたくさん入っているから、これは上流の銅山の鉱毒であると言ったのがたった一回であり、加害者の側に立ってもみ消した実例は水俣病をはじめいくつもございます。今日でさえ、公害問題について発言をし行動するのは、被害者の側に立つとすれば東大全部で助手が三人程度でありまして、あと、せいぜいあの人もやっているかなというのが助教教授にひとりおります。教授にはひとりもおりません。逆に会社や政府の側についている教授、これはもう何十人もおりますから、東大の中だけ考えても衆寡敵せずということになります。

五つの危険物質のうち三つが日本に本籍

それにしても、日本の公害が世界一ひどくなったということは、これは疑うことのない事実です。どの程度ひどくなったかということについて、世界の他の国からみた日本の公害の様子をふり返ってみますと、もう五年ほど前、環境問題を研究している科学者の会議で何が一番物騒かという議論をいろいろしまして、この五つ、水銀、鉛、カドミウム、DDT、PCBが一番危いから早急に調査する必要があると結論が出まして、いわば危険物質の指名手配がされました。この指名手配の結果、各地で

いろいろと問題がわかってきたんです。この中で水銀がなぜ指名手配されたかというと、言うまでもなく日本の水俣病が水俣に出て、新潟に出てから世界のあちこちに出てきた。そういうわけで日本が水銀については絶対に先輩であります。それからカドミウムが国際会議で問題になったのはイタイイタイ病の報告からであり、これも富山と長崎県の対馬と二ヶ所でおこっています。世界で最初の二ヶ所です。また、最後のPCBですが、これは昭和四十三年（一九六八）にカネミ油症という非常に大きな中毒事件が起り、大体十万人ぐらいの人がPCBを大なり小なり飲んでしまいました。一人人ぐらいの人に症状が出て保健所に届け、そのうち千人ぐらいが、間違いなくPCBの中毒だと認定されたことで認定患者になりました。だいたい、認定患者が千人出たらその十倍は目に見えぬ症状があつて、その十倍はそれをとりにこんでいる人というのが常識でして、水銀の場合もだいたいそんな結果になっています。

この昭和四十三年にカネミ油症が起つてから世界中で大騒ぎになりました。PCBを計ってみましたところ、ヨーロッパの魚の中に〇・〇一〇・一PPMぐらいのPCBが入っている。それで、それを食べた水鳥が中毒して死ぬということでニュースになり、学会でも発表さ

れました。それを聞いておりまして、ヨーロッパにあるものが日本にないはずはない。今までの経験から、必ず先進国の日本にあるだろうというので、帰ってきてそれを話したところ、大阪、京都の学者たちが先頭に立つて調べてくれました、特に京都の藤原先生の調査で、日本では一〇〇PPMというのがザラだということで、ここでまた世界一PCBで汚れた国という実績が沿岸の魚で出てまいりました。

こういうわけで、五人の凶悪犯人の指名手配を国際的にやったら、三人まで日本に本籍があったということですから、日本というのは絶対に先進国であります。冗談ではなくて真面目な話で、ヨーロッパの学者の間では公害問題、環境問題でヨーロッパで名をあげたかったなら、日本人の留学生をとるのがいいというのが相場になっております。日本から留学生をとったら、日本の論文、雑誌、ニュースをジャンジャン英語に翻訳させる。他の仕事はさせなくていいからそういうものを翻訳させるとヨーロッパ一詳しい文献がとれる。それを握って研究すれば、まず一流になるといのがほぼ常識になっています。ですから、これからヨーロッパ、アメリカへの公害問題での留学はかなり楽になるかもしれません。つまり、こっちが教えるにいくのでありまして、勉強にいくんじゃない。

いんですね。そういう点では大いに日本人学生の価値を認めてくれることはまず確かです。

ここで、ヨーロッパに比べて約百倍、二桁日本が汚れているという結果が出たんですが、その二桁というのは他にもありまして、例えば、水銀は有吉佐和子さんが『複合汚染』に引用したのでだいぶ知られるようになりましたが、水銀農薬をこれまでに水田に十何年がかかりで撒いた量が一ヘクタールに五〇〇〜七〇〇gです。欧米ではどれぐらいまいいたのかをいろんな人と文献から調べてみますと、だいたい五〜一〇gです。ここでも二桁、日本が余計にまいているということです。

化学物質に汚染される日本人の身体

ついでに、縁起でもない話ですけどもつけ加えておきますと、BHCという臭い農薬、これが日本人の体内の脂肪の中にだいたい五〜八PPM、普通あるそうです。これは西日本の方で稲のニカメムシとかウンカの駆除に使ったものですから、概して西日本の方が高くて、日本で恐らく一番高いのは佐賀県だろうといわれています。東日本でも五PPM、西の方は一〇PPM近く。これを欧米に行つて計ってみますと、だいたい〇・一ぐらいです。ですからここでも二桁近く日本は多い。

この他に、世界中で日本だけが大量に使ったA F 12という食品添加物があります。また関西地方を中心に発生しましたヒ素ミルク事件。あれはかなり広く森永のM Fという以外に別の番号のミルクにもヒ素が検出されましたし、ちょうどその頃、これも県庁関係の人から聞いたんですが、離乳食なんかでもヒ素がいっぱい出てきてたまげたということです。メーカー名はついに全然発表されなかったということを書きますから、気がつかない間に私たちは相当いろんなものを取り込んでいます。まずこの点では世界一、いろんなものを我々は身体の中に持っているということが言えると思います。

こんなことを続けていったらどうなるだろうか。幸いにして、どうやら高度成長というのはもう終わった。もうあんな具合にはいかないんだということが常識になりました。けれども、そうならなかったらどうだろうかということを考えますと、恐らく一九九〇年から二〇〇〇年ぐらいは、本当に骨が折れるんではなからうか。ちょうど皆さんのお子さんたちが一人前になって、働きざかりというあたりが一番骨が折れるんではないかと思われる根拠がいくつかございます。ちょっと今日は時間がないので細かいことを飛ばしてしましますが、いくつかの根拠があるということは、また機会がありましたらもう

少し詳しく申しあげることとして、また後の討論でもお話しするとして、先に進みます。

「公平な」行政はありえない

まず、これではつきり言えるのは日本は公害においては世界の先進国である以上、いままら後進国のアメリカやヨーロッパの対策や理屈をもつてきても絶対に間に合わない。だいたい日本というのはアメリカやヨーロッパで勉強して、問題に対する答えを教わってくれば、何とかやり抜けてこれたわけですが、こと公害に関しては日本で答えを出すしかない。逆にアメリカやヨーロッパの対策・理論が出てきたら眉にツバをつけろ、カタカナ・横文字が出てきたら眉にツバをつけろというのが公害問題の第一の原則であります。これを知ってますと、だいぶ欺されないで済むということが言えます。

それでは、公害の本質というのはどういうものだろうかといえますと、これは非常に簡単な絵で表現できまして、決してわかりにくいもんじゃありません。要するに、日本の公害問題というのは、強い加害者と弱い被害者という形になります。社会の中の力関係で加害者と被害者どっちが強いかということで公害が増えたり減ったりする一種の社会問題である。加害者が強いと公害が増える、

被害者が強いと公害が減る。それだけでありまして第三者というものはない。

私どもが何をしましても、それが結果として被害者を応援するようになれば公害が減るし、加害者を応援すれば公害が増える。何もしなかったらどうなるか。全然関係ないということでも何もしなければ、結局、日本では今のところまだ発生源の方が強いですから、それを黙認することになって公害は増える。何もしなくても第三者ではないということが言えます。

ところがお役人なんかはこういうことを言いますと反論しまして、行政というのは公平でなくてはならない、加害者、被害者のどっちに片寄ってもいけないから第三者として公平な行政をやるのが公害をなくする道だというようなことを言います。これは本質的に間違っているのであります、公害の被害者は被害を身体全体でとらえています、その中で言葉や数字で表現できることと違うのはごく一部でしかない。ところが公害を出す側はなるべくそれを小さく評価しようとする。公害のつかみ方はどうしても部分でありまして、そこで被害者が感じている全体的な公害の内容と、出す側がつかんでいるP.M.でしか表現できない部分を足して二で割って「公平な」解決を出せば、全体と部分を足して二で割るわけで

すから必ず部分的な解決しかできない。

そこで、公害に対する行政も公平を前提としたものはダメなんです。初めから不公平な行政をやるぐらいでなければダメだということが出てまいります。大阪の革新府政のもとで、どうして公害問題が解決しないんだろかということや常に関われます。それは行政を実際に担当している第一線の行政官が不公平な行政をやるというところまで踏みきれないからでありまして、これは後の方で触れますように日本の中にわずかではありますけれども、行政なんていうのはそんな法律に従ってどうこうと言っていたんでは公害は止められない、むしろ公害課なんていうのは住民運動の事務局であるべきだ、というように割りきって不公平な行政を徹底してやっているところすらあります。そこまで割りきれば公害というのは減らしていきます。皆さん方の運動で突き上げて、公平な行政なんていうものはもうおしまいだ、こんなものやっていたんではもうダメだということを実現していくことを期待します。

歴史と足による研究

そういうわけで、公害を少なくするためには被害者の運動しかないということは映画の中でずっと触れてきた

通りですが、公害反対運動の歴史を映画でご覧になった時に、戦前の方に学ぶもののがかなりあるということにお気付きになったと思います。戦後はむしろ、戦前考えていた技術的対策なんてのをやっとなんていうのは大正時代に日立鉱山で考えていたもの中途半端なマネであります。あるいは汚水処理なんかにしまして大正から昭和のはじめに荒田川で地元の人々が工夫したものの精神はまだ充分生かされていない。

そうしますと、そういう歴史を勉強すること、もうひとつは日本の全国でどういう運動があるか、その運動が今どうやって苦労して公害を減らし、止めているかというのを足で訪ね歩く。足による研究。一言で言えば、公害を止めるための努力というのは歴史の勉強と足ということになります。この歴史と足というものが無い公害に対する研究というのは全然役に立たない。

私は仕事ですから、新聞の切り抜きから始まってちゃんとした学界誌の論文から本に至るまで公害に関するものを恐らく千を超えて読んでおりますが、その中で本当に勉強になったと思うのは一割か二割しかない。その一割か二割をどうやって見分けるかというと、読み始めれば一ページ目でわかるのです。書き出しが「一九七〇年

代に入って急激に激化した日本の公害は」という論文なり、文章なりは読んでもちつとも得るところがない。

それはなぜかというところ、歴史を全然勉強していないからです。一九七〇年に入ってひどくなったかのようにみえるのは、実は光化学スモッグが起りました、東京でいますと杉並・練馬・世田谷という今まで自分は公害の被害者なんかには絶対ならんと思っていた人達が被害を目のあたりに、身の回りに感じるようになったんで、急に一九七〇年代から新聞・雑誌に公害の記事が増えたのであります。例えば、大阪でいえば、千里は確かに緑が多そうですが、こういうところで光化学スモッグが出るというようなことになると、みなさん真剣になる。例えば、新聞の編集をする人、記事を書く人も、南の方の泉佐野あたりではなあといっていたのが、千里の話になればやっぱりムキになって公害のことを書くということが積み重なりました、七〇年から急に増えてきたようにみえるのであります、実はその前からひどい問題は進行しております。

問題は高度成長

そこで、映画でご覧になったように全国各地でやむにやまれず公害にぶつかって、このもととは一体何であろう

かと掘り下げた結果、結局、高度成長がいかなのだ、こんなようにおだてられて無駄遣いをジャンジャンやっていたらいくらあつても足らんし、いくらでも公害が出るということに考えたところがぼちぼち出てきました。

最後の松下竜一りゅういちさんは恐らく覚えておられる方もあると思いますが、今から十年ぐらい前に『豆腐屋の四季』というベストセラーの小説で非常に有名だったんです。テレビドラマにもなりまして、本当に田舎の小さな町の青年の慎しい労働と恋の物語で有名だったわけですが、その人が自分のささやかな幸福を追っていくことすらもできない公害というものと、身体をはって対決しなければできないということにここ数年前から直面しまして、今では最も激しい運動の先頭に立って機動隊に体当たりもすれば、無一文で弁護士もつけずに裁判をやるというようなことで、火力発電所の建設に反対して運動をやっています。

そのたどりついた考え方は、電気はもうこれ以上つくらなくてもいいのではないか。これ以上アラブから石油を持ってきてあつちこちで発電所をつくって、焚いて売つたら、アラブにも公害が起る、こっちでも公害が起る。ささやかな庶民の生活の楽しみすらなくなってしまうのではないか。だからもうこれ以上ものはいらんのだ、とい

うところにたどりついた。

これは実は世界でも非常に進んだ状況でありまして、鹿児島県の志布志湾の開発に反対する農民・漁民が言い出した「スモッグの下の子ピフテキよりも、青空のもの」梅干の生活を我々は選ぶ」という言葉が、世界に拡がりました、ロンドン・タイムスから新聞記者が取材にきて、志布志の運動がなぜそういうことを言い出したのか聞きたいといった時に、志布志の人々は仰天しまして、なぜロンドン・タイムスがここに来るのかと聞いたら、世界中でぶつかっている最も深刻な問題の先端を切った言い分なので、それを掘り下げたいのだという話が出たのがおとしぐらいであります。また、この映画には間にあいませんでしたが、高知県で生コン事件というのがありまして、いくら交渉しても相手にしてくれないパルプ工場の排水口へ生コンをトラック一杯ぶちこんで止めたという事件です。その主役の人たちが言ったのは、自然保護運動というのは階級問題である。自然を壊していくと先に損するのは貧乏人だということを言いました。これはやはり二、三年前から、イギリスなどの労働党内閣の中で、自然保護に税金を使うのはばかばかしいという政治家の言い分と、学者の方の、いやそうではない、自然をどんどん喰い荒らしてダメにしていったら、労働者の

方が先に損する、自然保護というのは実は労働者の福祉の一部だという言い分が対立して論争になっている。

それが実は高知では十年以上も前に議論になっていたということを考えますと、日本は環境問題、公害問題では民衆の議論が世界で一番進んでいるということを感じます。

自分の力で切りひらく

私も今度の日曜ぐらいいからカナダで開かれるハビタツトⅡ人間居住環境会議に出かけるんですけど、そこで日本の民衆の議論はこういうことをやっているんだという紹介をすることになるだろうと思いますが、皆さんを含めて日本の住民運動の中で議論されていることは世界で最も進んだ内容だということをまず承知しておいて下さい。

ということとは、大変辛いことでありまして教科書がないんですね。一番先に進んでおりますと全部自分の力で切り開いていかなければならない。誰かに頼って後をついていけばいいというのではないということが、実は大変我々者には辛いところで、今までだいたい横文字・カタカナを縦になおしてふりまわしていれば飯が食えたのが、この範囲では絶対自分で考えたことしか通用しな

いということでお困るのであります。皆さんも他人の真似ができないという辛さだけは承知しておいた方がよろしいかと思えます。

特に日本の公害反対運動・住民運動の進んでいる面というのは、運動の中心になっている人たちの階層といえますか、出身・仕事が外国とは違うわけです。ヨーロッパですと、自然保護運動とか工場の排水たれ流し反対運動というのは、だいたいかなり暮しが楽な人で、別荘地にせっかく自分が別荘を建てたらコンピナートがやってきてダメになるではないかというような議論になりますと、これは別荘が建てられるぐらいの中産階級上層の運動になります。これがなかなか漁民や農民と手を結ぶというところにきません。

アメリカですと、だいたい運動が拡がってまいりまして、中心になっているのには学生も相当おります。学生というのはいわば中産階級下層に入りますから、アメリカの運動というのの中産階級下層まではひろがってきたということが言えます。

日本へ来ますと、運動の中心になっているのが、学校の先生ですとか、それからいろんな人がいますけれども、いわゆる下層中産階級、田舎の町のお役人でせいぜい十年までいって係長とかあるいは病院で働いている人、ま

あこの近くの有名な例ですとレントゲンの技師の人が非常に勉強しているなんていうのがありますけれども、だいたい中産階級の下層の人たちが中心になって、それが農民、漁民の中の貧しい階層まで含めた運動になっている。これが世界で日本の運動が一番地についた構成をもっているであります。

自分たちで根づかせる民主主義

そういう運動の中でだんだんわかかってきたことは、どうやら本当の民主主義を根づかせる仕事が公害をなくする根本ではないかということです。それが主権在民、自分のことは自分で決める、自分の住んでいる土地のことは自分たちで決める、お上やえらい人のいうことを聞いて決めるのではない、というところまでやってまいります。

実は、これが日本の戦後民主主義の一番弱かった点でありまして、皆さんもなかなか抜け切れないと思いますね。例えば、私が公害の専門家だから公害のことについて聞いてみようというのは、これは自然に出てくると思います。決してそうではないので、公害というのは当事者になった人が一番詳しくなるのです。やむをえずではありませんが、水俣病について一番詳しいのは水俣病の

患者さんであって、医者よりもよっぽどよく知っているんです。自分の身体のことですからよっぽどよく知っているが、わかっているが、世の中のしきたりで医者に水俣病だというハンコを押してもらわないと話が進まないからしょうがない。医者に頭を下げてみてもらうという状況でありまして、実は被害者が一番よく知っている、住民が一番よく知っている。

例えば関西ですと、尼崎の杭瀬の団地のように、自分たちで今日はだいぶ臭いというと、みんなで日記をつけて一四〇軒のうち何軒が臭かったかということ調べてみれば、役所で作った大気汚染のメーターよりもはるかに鋭敏な結果が出てくることを発見した例もあります。あるいは、十円玉を空気にさらしてさび具合で大気汚染を調べようとか、ウメノキゴケが最近みえなくなっただれども、どの辺までいったら墓石にコケがついているかを調べ地図の上のせてみたらやはりこれから大気汚染の拡がりがかめたとか、あるいは、イトミミズがどの辺から生えているからこのあたりの水はだいぶ汚れてきた、とかいうことを足で歩いて身近かな科学でつきとめているのは、実は日本の住民運動であります。

その中からだんだん出てきたのは、これはどうやらきれいごとではなくて本当の民主主義の根本、主権在民と

いうのは、そういう自分たちの勉強とも結びつかなければおかしい。自分の住んでいる地域を自分たちで守っていくという時に、行政を頼りにしていたんではダメで、自分たちの汗を流して守らなければダメなんではないかということが、だんだんあちこちでつかまれてまいりました。

そのひとつの例が、先ほどお話ししました高知パルプの生コン事件で、後になって調べてみますと日本一厳しい公害防止協定が実に昭和二十三年（一九四八）に結ばれています。これは住民が過半数を占める委員会です。公害問題を全部防止する。会社側は被害が出たらただちに損害賠償を支払う。その金がないと困るから、はじめから銀行に保証金を預けておいて、住民の委員会ではこれは損害だと出たら、ただちにそれを支払う。取りくずした分を会社は穴埋めし、穴埋めが遅れた時には委員会でも強制執行して会社から取り立てる。最新の学理を利用して公害が止まらない時には工場の操業停止、それでもダメなら工場を閉鎖するということが、実に昭和二十三年に協定として工場側も住民側も立ちあつて判を押しているんですが、それが一度も役に立たなかつた。結局最後に公害を止めたのは、そういった紙に書いたことではなくて、四人の市民が生コンをつめるといふ直接行動だったとい

う教訓があります。

そうしますと、公害を止めるのは決してきれいごとではない。大阪府にしても、あるいは関西のどこでも、公害防止協定、公害防止条例は山ほどあつて、なおかつ公害が進むのはきれいごとだから進むのです。いくらそういうものを作ったところで行動がなければ公害は止まらないし、減らない。やはり運動をするしかない。

政党のやりくりではどうにもならない

ところが、日本の政治は大握みに言つて、ご承知のように財界から金をもらつている中央政府がずっと続いておられますから、行政もそれにあわせてそのご機嫌をとるように長いことできてしまいました。例えば、大阪府なり大阪市なりで、知事さんがひとり革新になつたぐらいではちつともかわらない。やっぱり根本からひっくり返す仕事は住民の前にありまして、それをやらないうり限りは少しもよくならんということが出てまいります。ですから革新自治体だから公害が減ってくるかという、まあ多少よくなる面はありますけれどもそれだけではよくならないということを痛感します。

また厄介なことに、ここに公・共・自・社・民と書きましたが、これは実は公害問題に熱心な順序なんです。

何か事件がおこった時に、まっさきに駆けつけてくるのが公明党、その次が共産党。この二つはせりあいます。

三つ目にくるのがだいたい自民党だということです。大げさには来ませんけれども、地元の支持者とのつながりがありますから三番目にくる。四番目にだいぶしょぼくれてやって来るのが社会党で、それからほとんど何もこないのが民社党だというのが各地のほぼ常識になっている。で、大きく騒ぐ度合もだいたいこの順序なんです。

そうしますと、今、政界の再編成ということで話題になっています。例えば、社共か、社公民なんていう話も、社共だと二番目と四番目ですし、社公民だと、一と四と五の連合ですから、三位の自民単独に較べていいかどうかということになると、あまり見込みないわけです。一番いいのは公と共が組むわけですが、これはちよつと当分みこみはなさそうです。

やはり政党をいろいろやりくりするのは公害問題に見込みがない。特に革新政党、これは野党四党に共通し、とりわけ社会党や共産党に強いのは科学技術に対する過信でありまして、公害対策技術を振興させていけばそのうち減るだろうという楽観論をぶってくるのは大変困るんです。

科学技術の問題点

確か大阪大学あたりにも環境工学科か何かができただうですけれども、例えばそういうところで教える先生なんか、私は全然知らない人といえますか、むしろあの先生は昔会社側についたことがあるという意味で知っている人が教えるのでありまして、そういう技術をいくら教えたところで公害は減らないだろうということはだいたいい察しがつきます。

例えば、私に非常勤講師でいいから一ぺん学生に講義にこいといわないのが大阪大学であります。これはおもしろいんですが、国立大学で私を非常勤講師でもいい、とにかく学生に会わせたいのはお茶の水女子大学の児童学科だけあります。ここは児童が対象ですから非常に特色のある講義をやっております、私を呼ぶということについて、教授会に異議がなかったそうではありますが、他の日本の国立大学で私を非常勤講師でも呼んだ例は皆無なのです。大阪では、大阪市立大に二度ほど呼ばれますが、これは公立ですから勝手なことができるのであって、国立大学では学生には絶対私を会わせない、というような科学技術の講義が、今、教えられているんですから、こんなものいくら振興したつてうまくいくはずが

ありません。そういうものを過信するような政党では困るのです。

民衆による技術

どうやら公害問題の根本は、何党を何党に入れ替えるというようなことではなくて各地域で、皆さんが自分の持っている主権を最大限に使う。極端なことを言えば、千里共和国をつくりまして、ご主人たちは毎日出稼ぎに出ているんだというぐらいに割りきったら、例えば、将来、千里に大きな公害企業がわりこんでくることがあれば、皆さんが主権者で共和国である以上ここには工場は建てさせない、どうしても来るといったら本社をもって



こい。例えば、住友化学の本社ならここに持ってきてもよろしい、社長もここに住め、そこからがっばり税金をとり立てるといふようなになれば、企業というのはそう公害をたれ流すことはできないのであります。そういう地域自治が強化されていくのが実は本当に公害を止める根本なのです。

そこで、地域自治を強化していくような制度と技術はあるんではなからうか。私は下水の仕事をやっております。例えば、巨大な下水道を作って淀川兩岸の下水を全部大阪のどこかの埋立地に集めるといふようなことをやれば、国がそれに金を出す度合はますます大きくなり、大きな土建屋がそれで食う度合もますます大きくなる。



ところが、農村部、あるいはこの千里でも、一軒々、一棟々の下水を小さく簡単に皆さんが工事をして、処理をして、きれいにしてから池に流し、その池で魚を飼いましようということをしやるとすれば、恐らく、毎日、皆さんが工事に出るぐらいで下水道が出来てしまいます。そうして自分たちが作ったら、「おばあちゃんの時代にこうやって下水道を作ったんだから、変なものをいれちゃいけないよ。工場排水なんか絶対いれさせない」ということを、皆さんはお孫さんに話をするでありましょうし、お孫さんはお孫さんで、「じゃあ、おばあさんの時代に下水道を作ったんなら、私たちはもうひとつ、また別の環境をよくする仕事をやりましょう」ということになって、簡単に自分たちの住んでいるところを立ち退いて明け渡すなんてことにならないだろう。

そういう地域の自治を強化するような、民衆による技術がどうやらあるはずだということが最近わかってまいりました、例えば、家をつくるにしても、こういう高層アパートを建てるよりも、みんながレンガを積んだり木を切ったりして建てる家の方が、それだけ家を一軒建てるということで自分も豊かになる、また、家を建てるといふ技術をもつことになる。そういう技術が我々のまわりにずいぶんあるということを最近やっと気がつくよう

になりました。

そうしますと、科学とか技術とかいうものも、かなり政治的なものであつて決して中立なものではない。今、大学あたりで教えている科学技術は、実はかなり今の政治にあわせたものだということに考えがまわつてまいりました。

そこで、今、私たちがぶつかっている壁というのは、日本がこれまでずっと走り続けてきた「大きなことはいいことだ」「もつとたくさん、もつと働け」という路線の見直しというか、そこからの転換で、すべてお金が価値があるということについても疑問を持つようになった。これはすなわち、新しい価値体系であります。

第一次産業の見直し

ここで皆さんにひとつ乱暴な質問をします。いまお米は高いですね。お米の値段が今の三倍になったらどうしましょうか。皆さん、賛成ですか、反対ですか。まず賛成という人はいないと思います。しかし次に、もしお米の値段を三倍にあげるから「皆さんお米を作つてごらんになりますか」という時に、じゃあやつてみましょう、それなら儲かつておもしろそうだという人もほとんどいないと思います。あんなきついこと、とてもようやらん

というのが答えでありまして、私も自分で農業と工業と両方経験しまして、ちよつとやそつと農産物の価値が高くてたつてもう一度百姓に戻る気はない。まだ工場で働いている方が楽だとか、一番楽なのはやはり大学で学生を教えていることです。だから、もう一度百姓をやれといわれても、今の農産価格でやる気がしないというのが正直な答えであります。

しかし、よく考えてみると、農業の方がはるかにむずかしい。土は千差万別、お天気は毎年全部違います。作物があうかあわないか自分で考え、うまくいって豊作になつても、その年は豊作貧乏になるかもしれない。農業とはその点で、実に複雑でむずかしい仕事でありまして、工場のように、弁当を持つて出かけていって朝から晩まで言われた仕事をやつていけば月給をくれるというのとはだいぶ違うのです。

何事でも高級な仕事の方がむずかしいのでありまして、複雑な仕事は高級であるということでは、農業の方が高級であります。農業がもっと豊かになるのはむしろ当然であります。工場へ行つてあんな単純な仕事をして月給くれるんだつたら、農業はその三、五倍もらわなければひきあわないということも言えます。楽な仕事の方が給料が安いということでは、大学の先生なんて

いうのは今の半分ぐらいでいいはずだということを自分でも痛感いたします。

今、子どもを育てることがバカにされていきますね。子どもを育てるなんてことはバカバカしいから、もつと外へ出る、外へ出るといわれてますけれども、私なんかよく家内に言われますが「じゃあ、あなた育てられますか」と言われたらお手あげですね。ですから、銀行振込みというのはあまりいい制度ではないですけれども、自動的に全部むこうにまわつてしまつて、こつちは文句言えませんので、小遣いが欲しければ自分で稼げということになりますから、コツコツ原稿書いたりなんかして昼メシ代をつくるなんてことをやっております。それぐらいあたり前だろうと思ふんですね。あんなむずかしい仕事をやつてるんだからむこうが威張るのは当然だと感じます。

そういう考え方でいけば、農業、漁業、林業という元本に手をつけないで、いわば利子だけで喰える。うまくやればこれから永遠に収穫がある。土をダメにさえないければ毎年収穫がくるような仕事の方が、資源を外から持つてきてそれをつぶさなければ製品ができない工業よりも高級なんだということをもういっぺん考え直してみたいと思います。

私は今度の日曜ぐらいからアメリカを三ヶ月ぐらい歩かないといけませんので、正直言つてとても気分的に大阪まで出てくるゆとりはないんです。けれども、今日は生協の会合ということで、やりくりしてでも来てみようと思つたのは、そういう農業とか工業とか、あるいは皆さんの大部分が従事している第三次産業である管理業というものの値打ちをもういっぺん見直すきっかけに、私の話がなればと思つたわけです。農林漁業と、いままでバカにされていた第一次産業を見直してもらえないだろうか。集団購入、産地直送ということを通じて、農林漁業というのはどの程度むずかしいか、それから今どれくらい消費者側からの圧力で自然からはずれてしまつてゐるか。

例えば、一年中トマトを食べるなんてことは、私も百姓をやつていた経験から言つてどうしてあんなバカげたことをやるのかわらかないですね。抑制・促成のトマトなんてまずくて百姓には喰えたもんでないんです。トマトというのは夏の暑い盛りに、冷たい井戸水で冷やして塩をぶっかけて喰うのがうまいのでありまして、それを都会人はよくこんなまずいものを喰うと思つて季節はずれに作るとそれが売れる。百姓をやつてますと、明けでも暮れてもトマトとスイカ・ナス・キュウリ、それし

かなくて手をかえ品を変えて喰つてゐる。それが自然な暮しでありまして、当然都会もそうしないとうまいもの、確かなものは喰えないはずなのに、農薬漬けにしたみたいなまずいものが売れるという現実をもういっぺん皆さんに考え直してもらいたい。旬のものを食べるんなら、その時はたくさんあつて安い。ないものはないんだというように、場合によつては諦めることも必要なんではなからうか。そういう自然にもっと近い生活を送るためには何を諦め、何をのばさなければならぬかということ、ここで考えていただきたい。

生協を考える

生活協同組合を通じて、その理念を通じてそれを実践していくということの機会にでもなればと思つたんです。今、皆さんにひとつ質問してみたいんですが、森永ヒ素ミルク事件というのをご存知のかた、ちよつと手を挙げてみて下さい。これは皆さんご存知ですね。それでは、今までに森永製品の不買運動をやつたことのある人、手を挙げてみて下さい。

ここは極めて、不買運動をやつた人の比率が多いと言えますね。だいたい熱心に消費者運動をやつてるところで八〇％はヒ素ミルク事件を知つてます。不買運動を

やったことのある人は一%前後です。つまり理念と実際の行動というのは八〇%と一%というぐらいの開きがあるということですよ。ここでは今ざっと拝見しましたところ、一五%ぐらいの人がやったことがあるわけですから、一〇〇%近くの人を知っていて、一五%の人がやったことがあるといえるのは、かなり理念と実践の開きが小さい方になります。それでも八五%の開きがある。この開きを行動によってだんだんに小さくしていくべきでしょう。今の日本生協連盟の運動ですと、森永製品を安く買いたたいてコープ製品として売り、そのマージンで喰うということが全体の方針になってまして、ここには被害者の苦しみというのを真剣に考えた跡がないですね。生協



運動自体も、日本では巨大資本になってしまっていて、理念からだいぶ離れてきている。そういう現実をやっぱりみつめていただきたい。そのところを乗り超えるのは、皆さんの行動しかないと思います。

誤解の産物 大学

そこで、そういう今までの価値と、それから現在、我々がつくり出そうとしている新しい価値の矛盾が一番多く集まっているのが教育問題ではなからうかということ、今日の公害問題からちよつとはずれて、最後に教育問題で結ぼうと考えておりましたのは、実は東京大学に長いこといて、こんな仕末におえない大学はないとい



うことと、今、皆さんが感じておられる大学というものはたぶん誤解の産物であるということを痛感したからです。

というのは、皆さんも私も同年代で、一九六〇年よりも前に大学を出たか、あるいは大学へ行けなくて外から眺めていたという世代です。今の進学競争で一番苦労している世代、親として子どもの尻を叩いている世代というのは、だいたい大学を一九六〇年以前に経験したか、あるいは自分がいけなくて、大学というものを素晴らしいと思っていた世代なんです。

事実、一九六〇年から前の大学というのは一九四五年に日本が敗戦になってから後、それまで長い間止まっていた外国からの文化の流入をほぼ一手に、輸入代理店としてやっていたのが大学でしたから、実に鮮やかな活躍をしました。例えば西欧文明、サルトル、カミュ、マルクス、あるいはハイデッガーなどなんでも、技術の方でも新しいものを作る技術など、みんな大学を通じて入ってきました。

その頃は、横文字の読める人も少なかったわけですからフランス語が読めるなんて大学の先生ぐらいしかいませんでしたから、もっぱら大学を通じて文化が入ってきた。

その頃の大学というのは確かに栄光に包まれておりましたし、私たちも一冊原書を何とか読みこなしますと、先生と互角に議論ができたものであります。先生の方もだいたいあの本しか読んないんだから、先生より二、三ページ先まで読めば、授業は毎回先生より一回早くわかるんだということを東大にいた頃やった覚えがありまして、ついでに授業をちよつとひっかきまわしてやれということでも質問をしますと、それだけで授業が滅茶苦茶になった時代です。

ところが、一九六〇年を過ぎると、そろそろ横文字の読める人も増えてきましたし、翻訳も大学の先生はあまりうまくない、本職でやっている人の方が上手だということがわかってきました。輸入代理店の方も支店が本店を追い抜くような形で出てきて、たとえば、会社で直接技術をいれた方がよくわかるなんてこともでてきて、大学の地位というのはグリーンと低下したのです。

そこへもつてきて、高度成長で学生をウーンととるようになりましてから、ますます水ぶくれしまして、今では皆さんが期待している大学というのはあきらかに誤解と幻想だということが言えます。特に私のおりまして東京大学がいい例で、どの学科、どの学部をとりましても東大が日本で一番いいというものはひとつもない。日本の

どこかに、そのことだったらあそこがいいという学科なり学者が必ずあります。東大が一番いいのはほかに全然なにもない、どこにもないというもの、例えば船舶工学なんていうのは、べらぼうに大きな水槽をもつてますからこれは東大でしかできません。それぐらいだろうと思いますね。私のいる都市工学も他の大学には全然ないです。これも日本一だといえるんですが、実はひとつひとつの専門をみれば、みんな他の大学にいいのがあります。

そこで皆さんが苦勞して子どもを東大にあげて、これから出世して老後をみてもらおうとすると、恐らくそれははざるからおやめなさいと申しあげたい。というのは、今の競争の中でせつせと東大にあげていく中で、もう人間らしさをすり減らされて若年寄りみたいになつた、抜けがらみたいになつた学生を私たちは毎年教えているわけですから、これが肩書きでドンドン出世していくにしましても、恐らくこれからの激しい変転きわまりない世の中で、親の面倒なんかみるひまないですね。みる気にも恐らくならないと思います。

ですから、いい学校にあげて、この社会福祉の貧困な日本の中で、子どもを頼りに老後を送ろうと皆さんが考えておられたら、それはおやめになつた方がよらしい。

必ずしくじると申しあげておきます。今それだけのお金があつて教育費にかけるぐらいなら飲むなり、喰うなり、旅行するなり、今のうちに自分の身につくように使つた方がよらしいのです。子どもに頼つたら必ずえらいめにあいます。これは東京大学の中で苦勞している人間が申しあげることです。

劇場型大学と資格授与の大学

もう時間がなくなつてしまつたんで、一気に結論にまわりますが、私たちもせめてなんとかそこから抜け出すために、もうちょっと大学生の生活の中に潤いをつくらう、東大なんてつまらんのだよということを見るために。

マンモス化した大学ですから、一人や二人出たり入つたりしてもわかりやあしない。ひとつ「ニセ学生」というやつを大いに増やして、東大でも日大でも法政でも、まあ、日大は入口で検問をやつていて学生証をみせないと入れませんからそうはいきませんが、日大以外の大学にはどこでも自由に出入りして、いい授業があつたら先生の採点をしてそこへ集まるし、悪い授業は容赦なく逃げる、あれは全然わからないということを経験して、それを持ち寄つて学校の点をつけてみたらどうだろうか。そういうことを前提にするならば、何も無理していい大

学に入ることはない。自分で無理をしないで入れる程度で授業料の安いところを選んで入って、後は四年なり五年なりかかって自分の本当に入用な学問を身につけ、そして出ることを考えたらどうかということを、東京で自主講座をやるかたわら「二七学生同盟」を宣伝しておるところです。

今の非常に硬直したバスポート発行所になった大学を変えていくのは、親御さんたちが実際に大学に参加するしかない。「二七学生」の中にすごい人がおりまして、三十代半ばの主婦の人であつちこつち潜って歩いている人がいるんです。この人は顔をみればすぐわかりますけれども、片道二時間もかけて浦和から町田まで和光大学の講義を聞きにきているんです。先生の講義はいいということなのだし、学生も大勢いないことだし、隅の方で聞くのはかまわんではないですかと言ったら、先生の方が喜んで「どうぞ御自由に、いつでもおいで下さい」ということで、これまでこれはという先生に断わられたことがないということを言っておられました。

皆さんも、大阪・京都近辺でどんどん潜ってみられてですね、断るような先生なら講義聞く値打ちがないんですよ。それで、あんな学校へ子どもを一生懸命あげることはないだろうというのは必ず感じとしてつかめると思

います。どんな授業をやっているか、そこへどれくらい小学校以前からネジを巻いてあげようとしているのか、幻想と誤解と現実の隔差をみていただきたい。

そういう市民の参加がどんどん増えてきますと、恐らく大学というものも、これからの本当の姿は劇場型大学、つまり、行つて今日はよかつた、本当にすばらしかつたということ、そのかわり自分から金を払つて切符を買つていくわけですから、免状も資格もなんにもいらない大学と、もう片方で、お医者さんとか飛行機のパイロットとかいうのはある程度、技術の習練がいりますから、自動車の教習所みたいに合格か不合格しかない大学です。そこを出たら国家試験なり資格試験があつて免状をとるといふ、こういう二つの大学にわかれていくのではないだろうか。

そうならないと、今みたいにこんなバカなものに何百億、何十億という金をかける、東京大学なんてのは本当に何百億円かかっているんです。その中でやっているものは要するにカビの生えた学問を一生懸命丸暗記させるだけで、その中味も他の大学よりも悪いものばかりです。

私などが、例えば、学生を教えようとしてしましても助手は学生を教えちゃいかんのだということ、授業をもたしてくれないような大学へ、皆さんがせっせとお金を使い、

エネルギーを使って子どもを入れて、その子どもに老後を期待するという、とんでもない間違ったことをやっているのを見ますと、惻隱の情といえますか、皆さんがあと三十年たったらこんなはずじゃなかった、お前にはお父さん、お母さんはこんなに力を入れて教育して学校を出してやったんだよと言っても子どもはどう返事しているのかわからない、ということを考えますと、やはり惻隱の情から何とか大学問題をもういっぺん考え直していただきたい。そこから、知識なり権威なりというもの自分の外に求めるのが、実は公害のもとでもあるのだということ。それをみんな自分で考え、判断するようにになれば、こんなに物はいらんじゃないか、隣と同じところに通うのにもいつも車を二台並べていくこともないじゃないか、一台でやりくりすれば同じことだということが積み重なって、私たちはもう少しきれいな、豊かな、本当に内面的に豊かな暮らしを作っていくことができるのではないか、そういうように考えております。

私の話は実例で裏付けしないとうまくいかないんですが、今日は実例を飛ばして話してしまいましたので、そのへんは午後の討論にゆずることにします。どうもご静聴ありがとうございます。(拍手)

(うい) じゅん・東京大学助手

●図書館にある宇井純さんの書籍●

- 1 日本の水はよみがえるか 日本放送出版協会、1996 N
HKライブラリー 36
- 2 技術導入の社会に与えた負の衝撃 国際連合大学、1982
国連大学人間と社会の開発プログラム研究報告/国際連合大学
編 84
- 3 環境問題を考える 創価学会青年平和会議、創価学会学生平
和委員会編 潮出版社、1986
- 4 技術と産業公害 国際連合大学、1985 国連大学プロジ
ェクト「日本の経験」シリーズ/林武総編集
- 5 公害自主講座15年 亜紀書房、1991
- 6 谷中村から水俣・三里塚へ…エコロジーの源流 社会評論社、
1991 思想の海へ―解放と変革― 24(所蔵情報がありません)
- 7 公害原論 亜紀書房、1988
- 8 日本経済と水…慢性的死への警告 日本評論社、1975
(所蔵情報がありません)
- 9 公害原論 補巻一 亜紀書房、1979



小田実さんの講演について

吉田 永宏

小田実は、現代日本では数少ないアンガージュマン（社会参加）の作家である。千里市民講座で「わがへ朝鮮」との出会い」をテーマに語った時もそうであったし、現在でも無論そうである。若い世代の作家たちが現実社会と向き合うことを避ける傾向にあるだけに、現実と真正面から取り組む小田実の作家態度に対しまずわたしは拍手を送りたい。

「わがへ朝鮮」との出会い」は一九七六年十月八日に語られたものである。

冒頭部分で一九六九年の自らの滞米中の経験に触れつつ、日系米人（二世、三世）について語る。訪米中の佐

藤栄作首相に対するデモ行進に参加しているアジア系アメリカ人行動委員会なる組織のメンバーであるその日系米人は、父親によって「できるだけアメリカ人になれ」という教育」をされ、「日本人であることを忘れさせる」というように仕向けられる。成長した彼はアメリカ部隊の一員になり、日本人二世によるアメリカ合衆国軍隊の「日本人部隊」に加わってイタリア戦線でドイツ軍と戦った。その部隊は「死亡率が一番高かった」ことで有名となり、その結果、日本人の地位が上がったと言われるが、その後彼は「アメリカ合衆国の現状に絶望して左翼になった」、という。そして、夫妻（妻も日系米人）で

初めて日本を訪れて墓参りをする。「日本へ来ることによつて、彼は生まれて初めてほつとした。つまり、五十年間、自分は緊張のあげく生きてきた。たえず疎外されたり、差別されたりしているわけです。(中略)彼はアメリカ人なのです。アメリカで生まれているのですから、でも就職しようとしてもできないのです」と小田実話す。「アメリカ合衆国へ向かつて、一世の人は食えないから出かけて行つたのです」と指摘する。

小田実の舌は、わたしたちの胸をも鋭く刺し貫く。「(自分は)抑圧した国民だと言つても、それでどうなんだということが出てこないとだめですよ。(中略)私の国がこういうことをしたのだ。その通りだ。それでお前は どうするんだ。私はどうするんだというところまで議論踏み込まないとだめなんです」と。

小田実の語りの中に、「韓国の人達は全体的に緊急時の感覚で生きています」とあるが、この発言が一九七六年の時点のものであることをわれわれは承知しておかねばならない。「韓国民主化闘争」という語もしばしば用いられているが、これも朴正熙政権の下での韓国の社会情勢に即しての、それを背景としての発言であることを承知しておく必要がある。「ぼくはもう韓国へは行けないですけれども」の発言も、朴政権下の韓国へはの意で

あることに留意しておかねばなるまい。この講座の翌年に刊行された小田実の『私と朝鮮』(筑摩書房)がわたしの手許にあるが、これも合わせて歴史的証言と呼ぶべきものであろう。

わが〈朝鮮〉との出会い

好奇心のすすめ

小田 実

どうも遅くなりましたすみません。大阪で生まれて育ったのは二十年前、二十四歳位まで育って知っているつもりだったので、コロッと変わってしまったて、何が何だかわからなくなってしまうて……。(笑い)昔、千里山は、子供の時山の奥だったんですよ。来てびっくりしたんですよ。初めて来たんですよ。何が何だかわからないで……。やっぱり知ったかぶりするとだめですね。二十年たつとコロッと変わりますね。すべてが。それで迷いまして、すみません遅れまして、東京から来たものですから。

私と朝鮮というか、私と韓国という題なんですな。そ

れで少し自分の考えていることを述べたら参考になるかも知れません。私の話はあちこちとぶので適当にとつて考えてください。後でまとめて考えてください。うまく話せるかどうかかわからないですが、しかし、しようがないですね。もらった文献というかパンフレットを見たのですが、少し変わった話をしようと思うのです。私と朝鮮との出会いとか、私と韓国との出会いというのは、わりと本もあるし、在日朝鮮人の方がいろんな話をされていると思うのです。主として、人間の心の問題についてよく喋られていると思うのです。よくわからないのですが、読んでみるとそういう感じがするのです。でも少し

違う角度から話をしたらいいのではないかという気がします。

合衆国で「幽霊」にされる——不思議な査証

私の友達に、アメリカ合衆国の人間で二世の人がいるのです。非常に親しくしている人がいるのです。二世の人で私より年上で、もう五十五歳か六十歳位です。息子がいて、それが三世ですが、息子とか娘がいて、それで彼はニューヨークに住んでいて、いろんな活動をしているのです。ご承知でしょうけど日本人の二世というのは、私くらいの人間、それ以上の人間というのは、あまりいい印象を持っていません。日本の敗戦時、ベトナムの時にやって来て威張って帰って行ったという感じ、占領軍の一員として二世の人がやって来て威張って帰ったという、そういう感じを私は持っているのです。私とその人とどうして知り合ったかということをお話しします。

一九六九年に佐藤栄作さんがニクソンさんと話をするために出かけたのです。アメリカ合衆国へ出かけて、ワシントン、ホワイトハウスで話をしたのです。その時の一つの焦点は、ご承知でしょうけど、韓国問題で、韓国の未来と現在というのは、日米の安全にとって、韓国の

安全、即日本の安全であり、アメリカ合衆国の安全であると、そういうことと見なすという日米間の取り決めをしました。それに我々は拘束されているのです。一九六九年に佐藤栄作はそういうことをしに行つて、アメリカ合衆国の若い活動家の話しでは、その時取引に行つたという、取引とは *deal* と英語でいうのですが、*deal* に来たというのですが、その通りだと思つたのです。

私はその時、日米安全保障条約について話をしてくれということ、アメリカの若い活動家連中、あちこちの学生運動家達が招いたのです。アメリカ合衆国へ行くためには査証を取らなくてはだめですね。ところが査証をくれなくて、当然くれないうれでも、それで大騒ぎになつて、結局、最後に不思議な査証をくれたのです。これはひとつ国際政治の問題で、おもしろいから少し話しをしてみます。なかなかくれないうれから大騒ぎして、最後にもうやめようと思つたら、出発直前にビザが来ません。アメリカ合衆国を旅行なさるのだったら、普通ビザをお取りになると四年間くらい有効なのです。そして、六ヶ月くらい入れますよ。私の三週間だけ有効で、一回だけ入れるというビザが突然来たのです。そのビザを持ってサンフランシスコへ行つたら、私の旅券を見て「あなたはオダか」と言うから、「そうだ」と言っ

たら、「ちょっとこっちへ来てくれ」と言つて、空港の入港管理を司る係官が、「私達は、あなたを入国させるかどうかを決める権利がない」と言うのです。「あなたはワシントンへ行つて入国管理局長に会え。あなたの入国は、入国管理局長が決めるのだ。あなたはワシントンへ行つてくれ」と。私は幸いなことに、ワシントンで講演することになつていたのでちょうどよかつたのですけれど、ワシントンまで行つたのです。そこで入国管理局長に会つて、いろんな話し合いの結果、結局、紙切れ一枚くれて、何月何日どこそこ、何月何日どこそこという講演旅行の日程通り書いて、暴力活動を刺激しないこととか。僕はそこで暴力活動を刺激しようと思つてないから、そういうふうに取り引が成つたのです。その話がおもしろいのですよ。その後、局長に何つて、ちょうどニクソンの時ですね、「それでは私はアメリカ合衆国にいますね」と言つたら、「ノー」と言うのですよ。「あなたはアメリカ合衆国に存在しない」と言うのです。「そんなバカなことがあるものか、私は今ここにいないか。ここはアメリカ合衆国だから、結果的に論理的に私はアメリカ合衆国にいるだろう」と言つと、「いや、そういう論理は通用しない」と言うのです。「あなたはここにいないけどアメリカ合衆国にいない」ということを言う。

「つまり、俺は幽霊か」「そうだ」と言うのですよ。国家というのは、そういうように勝手なことを決めることができますね。大変おもしろいと思うのです。私がここにいるという常識から言えば、ここにいるということ、ここにいられると記録に残つて困るわけですね。私の旅券を見ますと、普通スタンプを押すのですが、何もスタンプはないのですよ。行くのもスタンプなしで入つて、出る時もスタンプなしで出たのですね。つまり、私はそこにいたという記録に残らないわけですね。私は、あの時殺されたつて、それは幽霊が殺されたことになるのでしようね。私が殺されたら、今度は人間に一躍復活するでしょうけどね。そういうように国家というものはいろんなことをやるなとつぶさに痛感したのです。

話はちよつととびましたが、ワシントンへ行つたら、佐藤栄作が取引しているのですね。それでデモ行進とかいろんなことを行なつて、そのなかに日本人の二世、三世が組織したデモ、アジア系アメリカ人行動委員会というものをつくつたのです。つくつたのも五十三歳くらいのおばちゃんであり、おっちゃんである人達が中心になつて、息子達と一緒になつてつくつたのです。アジア系アメリカ人行動委員会という、つまり日本人二世、三世が大体中心で、それに朝鮮人二世、三世も入っています

けど、フィリピン二世、三世と日本人が大体中心ですね。日本人が圧倒的に数が多いですからね。で、日本人二世、三世が中心になってアモ行進をしたのですね。私も一緒にアモ行進したから、その人達と知り合ったのです。韓国の問題で、彼らは今、アメリカ合衆国でいろんなことを朝鮮人と一緒になってやっています。私は今、その話をしようと思ったのではなくて実は彼としみじみと話をしたのです。この間、アメリカ合衆国で、またビザの問題ですったもんだいろんなことがあって、また出かけたのです。今度はまたいろんな問題があって、そのことを言っているときりがないのでやめます。

日本にきてはじめてぼっとした日系人

とにかく、出かけてその人の家に泊まっていたのです。その人は、去年はじめて日本へやって来たのです。生まれてはじめて日本へ来たのです。彼の経歴は、アメリカ合衆国の西部に生まれて、私は夫妻を知っているのです。夫の父親はできるだけアメリカ人になれという教育をしたのですね。結局、できるだけ日本人であることを忘れさせるということを生懸命教育してですね、キリスト教徒になってそれをやったわけです。奥さんの父親の方ができるだけ日本人であることを残そうとしたのですね。

民族主義者として生かそうとしたのです。夫妻とも、奥さんの方の家系はだいたい左傾して、アメリカ共産党に入ったりいろんなことがあったのです。夫の方は、高等学校の音楽の教師なのです。ご承知でしょうけど日本人部隊というのがありました。彼はアメリカ部隊の一員になって、日本人の二世が入って日本人部隊をつくって、今の上院議員のダニエル・井上とか全部二世部隊の出身者ですね。そういう連中だから、アメリカ合衆国の軍隊になって、イタリア戦線でドイツと戦ったのですね。日本へ持ってくるわけにはいかないから、確かに死亡率が一番高かったというので有名ですよ。つまり、百人当りの死亡率が一番勇敢だったかどうか、一番高かったのです。その結果、日本人の地位が上がったと言われているのだけ。そういう部隊に参加して、その後アメリカ合衆国の現状に絶望して左翼になって、僕は偉いと思うし、成人教育の一環として大変おもしろいと思うのは、今、彼は何をしているかという、毎週一回マルクス・レーニン主義の塾を開いて勉強しています。五十、六十くらいの日本人二世が集まって勉強しているという不思議な光景がある。何の勉強をしているかと言えば、アメリカ讚美じゃなくて、毛沢東主義の研究をしているのです。一週間に一回こんなことに集まってやっているのです。

それは大変おもしろいと思うのです。息子も娘もまたそういうようにやっている。話がそれましたけれど、その夫妻が日本へやって来たのです。去年、東京へ来て、それから田舎へ行つて墓参り。何しに来たのかというと、墓参りに来たと言ふのです。墓参りという日本語はチャンと喋れるのですね。墓参りという二世、三世の日本語は完璧な日本語の片言を喋ります。お父さん、お母さんに習つたのですから、完璧な日本語の片言というか、例えば、アメリカ合衆国の人間が日本語を習つた場合の発音はちよつとおかしいでしょうけど、彼らの発音は完全な日本語の発音で、しかも文法は習つてないから片言です。たいへんおもしろいですね。

僕は、いつか日本人三世の演説を聞いていたら、ワーと英語で喋つていて、そのうちに曾我五郎・十郎というのだけが入ってくるわけですね。曾我五郎・十郎というのがいかにか革命的価値があるかということ、それを彼は説いたのですが、僕はさっぱりわからなかつた。ただ、その曾我五郎・十郎という発音だけは完全に日本式発音であつたことだけいまだに覚えています。

で、墓参りに来たといつて彼が寄つたのです。それと一緒に墓参りしたのです。そういうことがあつて、いろんな人に会つたりして今年また再開して、いろんなよも

やま話をしていたのです。はじめて来たのですから、日本はどうだと聞いたらこう言つたですね。五十年生きていますのです。アメリカ合衆国の人間としてね。で、彼は生まれてはじめてほつとしたりと言つてました。日本へ来ることによつて、彼は生まれてはじめてほつとした。つまり、五十年間、自分は緊張のあげく生きて来た。たえず疎外されたり、差別されたりしているわけです。差別が少なくなつてきたのは事実です。事実だけれども依然としてそれはあります。例えば、第二次大戦後、彼は音楽の教師の資格を取つて、日本人部隊で死にかけたのですからね。勲章をもらつたのですよ。それで彼はアメリカ人なのですよ。アメリカで生まれているのですから。でも就職しようとしてもできないのです。それは延々としてそういう時代があつて、まあ、奥さんはね、アメリカ合衆国は見かけは女を大事にする社会だから、わりと女に対してはソフトなのです。柔らかいですからあまり感じないだろうけど、五十年間、ものすごく緊張して生きて来た。日本社会はいろいろ問題はあるけれど、自分は日本社会について生まれてはじめてほつとした、ということをつくづくと言つていた。それはもちろん活動的な人間で、強い人間なのです。その人がそういうことを言うということは、いろいろな問題があるな

と感じたのです。それは、私は自分の立場として言えば、例えば、私がアメリカ社会のなかで五十年間生きたとしたら、生まれ故郷はそこなのです。生まれ故郷がそこなのにもかかわらず、自分がそこで生きて来るには緊張の極致であって、今の問題ですれば日本の社会へ帰って来たのかただ来たのかわからないが、自分がほっとしたと言ったことは、実は日本にいる在日朝鮮人の多くの問題だろうとまず第一に思うのです。それは、この話をしたのは、実は日本人というのは同じような状況におかれるだろうということ。もうひとつは、アメリカ合衆国へ向って、一世の人は食えないから出かけていったのです。もちろん、日本が植民地化されたわけではないが、苦闘のあげくそこで暮らして来て、英語を喋って、日本語は喋れないわけですが、そういうなかで生きて来たことが、ずいぶん強いものとしてあるという気がしたので。それが、いろんな人が在日朝鮮人の体験について語り、いろんなことがなされたと思うのですが、私がいちいち言うことはないと思うのです。そういうように日本人だからというのじゃなくて、日本人もそういう状況におかれたらどうなるかについていうこと、私達、考えることはそこから出てくると思うのです。そして五十年間、自分の国として生きて来たなかで疎外された体験をずっ

と持ってきた時に一体どうなるかということを少し考えたらいいと私は思います。ただ、そういう話はこれくらいにして別のことを話したいと思います。

一歩先を考える朝鮮人

私と私の朝鮮の出会いとか、そういう言い方は講座の題名を聞かされた時に、それは非常にいいことだと思のですよ。と同時に、将来への展望を少し考えてもいいという気がするのです。出会いというのは過去ですからね。私と韓国との出会い、朝鮮との出会いというのは過去でしょう。私はこういう時に朝鮮人と出会った。いろんな文献を見ても、朝鮮人の何とかさんに出会って、何とかんとか書いてあります。それでは将来どうするのか、現在どうするのかという話は書いてないですよ。これは朝鮮人が差別されてきたのを悲しく思ったとか、あるいは堂々と生きてきたのを私は感動したとか、そういうことはたくさん書いてあります。

今、ここにこられている方はそういう意識を持っておられる方ですね。そういう人達はたくさんいると思うのです。現実として、例えば私の知り合いの朝鮮人がアパートを借りようとしたら朝鮮人には貸さないと言ったりして、現実ですごくありますよ。いまだに就職差別はあ

るし、だから私は今そういう話を一番初めに別のかたち
でしたのです。ただそういうことを繰り返して繰り返して
言うのは大切なことですが、それをもう少し将来とか
現在の問題とかに結びつけないとどうもいけないのじゃ
ないかという気がするのです。というのは、朝鮮人の方
はもう一歩先を考えているのですが、日本人はそれに対
応していないという気がして仕方がないのです。朝鮮人
のそういうことは何かというと、大きな政治問題として
南北統一ということを彼らは一生懸命考えますね。方法
はないと考えます。それについて私達は、就職差別の問
題とか日常生活の差別とか過去の問題とその問題に結び
つきをつくっていないという気がして仕方がないのです。

私はいろんな運動をしてきたのですが、運動をしている
人達、例えば韓国の問題を一生懸命やっている人達の方
でも、韓国の民主化闘争の問題については関心はありま
すけれども、それでは韓国人自身が、北朝鮮の人達が望
んでいる南北統一の問題についてどうするか、どう考え
るかということになると、考えは非常に貧しくなって、
いや考えたことないですね、ということにいつもなっ
てしまうのですね。問題を少し先のこととして考えたい
うことが私達にとって必要だろうということになると考
えます。僕は、こういう話を前の講師の方がされたか知

りませんけれども、レジメみたいなを見ると、最近の
政治の話なんかあまりされてなかったみたいな気がする
のです。私の朝鮮体験を話しをすれば、それは大阪に生
まれたから否が応でも、大阪の天王寺区に育ったんです
けれども、隣りは生野区ですね、昔からいえば鶴橋とい
うところもあるし、私の家のすぐ傍なのです。だから、
やたらにそういうことを話すと時りがいいし、そういう
ノスタルジアみたいなことになってしまおうとよくないし、
あえて違う話をしたほうがいいのじゃないかと思うので
す。

好奇心、人間にある時は平等

私が今考えていることは、あえて言いますけれども人
間は普遍的立場ということを考えたいと思うのです。
普遍的立場で我々ものを見たらいいと思います。

例えば、人間全部平等であるということを否定しよう
としようまいと、人間は全部平等でないという説を立て
ることもできるし、平等であるという説を立てることも
できる。私達はどちらを信じるか、どちらにかけるとい
うことがあると思います。人間は生まれながらにして
罪があるものだと考えることができるし、そうじゃない
んだということでも考えることもできる。いろんな意味の

考え方があると思います。だから、ある場合には、どちらか究極的には選択しなきゃいけないと思うのです。人間は普遍的に平等であるという考えというのを私は考えたいと思うのです。そうしたら、何故平等でないかを逆に考えることをすればいいと思うのです。そうしないと何が何だかわからなくなってしまう^{おそれ}、強いと思うのです。そういうことをまず念頭に置いて話をしたいと思います。

何が取っ掛かりになるか知らないですけども、もう少し朝鮮の問題について私は興味があるのです。私はもっと好奇心を持つたらどうかと思うのです。難しいことを言うよりも僕はたえず好奇心を持ち、何でも本に書いてやろうと思っています。だから岡山の朝鮮人に限らず、日本人でもどこか行くと、「あつ、これどうなっているのだろう」と非常に知りたいと思うのです。好奇心というものは非常に大事だと思うのです。好奇心が人間にある時は平等になると思うのです。上から見たら見えないですからね。やはり人からものを聞こうと思つたら平等の立場に立たないと、本当に知りたいという気持がないとそれは平等になれないですよ。私はわりと自慢するわけじゃないけれど、何だか自慢話するみたいでいやですけども、いろんな所へ行って、いろんな人の話、聞き

出すのうまいですけどね。どうしてうまいかというと簡単ですね。私、小説書いているのです。だから好奇心がものすごくあります。まあ、小説に使ってやろうというさもしい根性じゃないけれども人の話は聞きたいです。一番話の継ぎを担うのは、男の場合仕事ですね。職業のこと、自分がやっぱり打ち込んでやっているわけですから仕事のことを聞くと生き々となりますね。女の人は何かというと、やっぱり子供のことを聞くと生き々してきますね。(笑い) 大体そうですね。そこでやっぱりわかると思うのです。いろんな問題が出てきて僕は知りたいたいという気が非常にするのです。これは一体どうなっているのかという感じがしますね。それがひとつ大事だつて気がします。あまり難しいことを言うためになつてしまふのです。

「奈良」は朝鮮語で「国」

言葉のイメージがちがう朝鮮と日本

私、朝鮮のこと非常に興味あるのです。これ一体どんななっているのかって気がするのです。顔も皆同じでしょう。

それから金達寿さんが『日本の中の朝鮮文化』という本をお書きになってこのへん全部出てくるでしょう。お

読みになった方ありますか。失礼ですけどもお読みに
なった方手を上げて下さい。ああ、このくらいですか。
おもしろいからお読みになって下さい。金達寿さん著で
『日本の中の朝鮮文化』講談社から出ています。そのう
ち近畿編というのがありまして、つまり大阪・奈良が出
てくる本、それをお買いになったらいいと思います。一
巻・二巻……ずっとやっておられますから、いまだにや
っておられます、もう何巻出ているのかな、もう七巻
出ているのかも知れません。要するに奈良のこと書いて
あるのと、大阪のこと書いてあるのがあります。残念な
がら別々です。まあ、二冊買って読んだら、興味が出て
くると思います。大阪に百落って地名があるでしょう。
奈良って言葉自体が朝鮮語の国ということですね。つま
り奈良って言葉自体が朝鮮語ですね。いろんな地名が大
体朝鮮語ですね。だから、金達寿さん書いているけれど
も、大阪の地名なんか書いてるときりないです。全部
そうですねということになります。だから、そうした興味
を持つていうことが一番大事じゃないかと思うの
です。このへん千里山のこと書いてあったかどうか忘れ
ましたけれども、大阪市内なんかやたらにあります。そ
うしたら、これどんなにしてこうなったかということ
がありますね。そうしたら、そこでちよつと興味を持つつ

てということが一番必要ですね。これどこでどうなっ
たのかと考えることが一番いいんじゃないかと思うのです。
若返りの第一歩ですね。美容体操するより僕はいいと思
うのです。一生懸命考えて、これはどうなっているのか
と考える。たいへんおもしろいですよ。言葉自体そう
ですよ。言葉だけ考えたって、日本語と朝鮮語は一体ど
うなっているかということがありますね。そのようなこと
を少しずつ考えていかれたらいいと思うのです。

その著者の金達寿さんと私知り合いなのです。金達寿
さんは日本文化について非常に造詣が深いです。植民地
化されたから、日本で教育を受けさせられたわけです。だ
から日本のことよくご存知です。私よりよく知っておら
れますよ、彼は。同時に、朝鮮のことよく知っておられ
ますからね。そうすると、例えばここにこういうものが
あるとしますね。僕は考えて、僕はこれについて日本人
はこういうイメージがあるとします。まあ、詩のイメー
ジでも何でもいいからこうあるとします。そうしたら、
朝鮮人の場合は、金達寿さんの場合はこれを知っている
わけです。彼は植民地化教育を受けさせられたから日本人
の見方をよく知っています。と同時に、彼は朝鮮文化を
背負っています。たいへんおもしろいと思うのは、金達
寿さんの顔見て私喋っていますと、彼の背後にわーっと



朝鮮文化が見えてくるのです。喋っている時に、そうした眼で見えるでしょう。ただの赤い、白いという言葉ひとつに朝鮮のイメージと日本のイメージが違うのです。同じような言葉喋っているのに、また中国文化の圧倒的な影響を我々受けているのに、漢字をどっちも使っています。韓国の新聞を見たことがありますか。北朝鮮の新聞はハンダ、朝鮮の文字になっていきますから全然読めないでしょう。韓国の新聞だところ漢字だけ浮き上がっているのをたどると、否定か肯定かということとはわからないけれど、大体何言っているかはわかる。そういうように同じこと出ているのにおもしろいですね。例えば、ベトナムというのは今ローマ字になっていきますけれど、あれ漢字なのです。字音の部分は各国違いますが、朝鮮、日本、中国、ベトナムというのは漢字の部分は同じなのです。言葉の系統は違いますよ。あまり乱暴な意見を言うと誤解されるといけないけれども、同じ言葉だとは言っていないですよ。ただ圧倒的に中国文化圏の影響を受けたから漢字の部分だけが一緒なのです。タイ語にも入っています。ずっとね。漢字の部分だけローマ字化されて、もとは漢字だったわけですね。それで似てくるわけです。僕はかつてベトナムのハノイへ行つてある革命家と喋っていたら、日本の革命家の名前を知っていますと言うのです。で、漢字で書きますと言うから、それじゃ書いて下さいと言うと、綺麗に達筆で吉田松陰つて



書いてあったからびつくりしました。吉田松陰というのは革命家だそうですね。だからそういう視点を持ったほうがいいですね。

忘れてはいけない第三世界の日本だったこと

明治維新は革命だと思いません。だから明治革命と呼んではいけません。その明治維新というのは、その時代のアジアにひとつの衝撃を与えたわけですね。今頃、第三世界という言葉よく言われますね。第三世界は、あつちのアジアだとかアフリカだとかという考え方を、もつとてつとり早く言いますと、どんなものだったかと一番理解するのは簡単ですよ。明治維新ですよ。明治維新がそうだといいことを言っているのじゃなくて、その明治維新を起こした時の日本というのが、実は第三世界の日本だったということを忘れてはいけないのですよ。我々は、いつの間にか百年も昔から先進国のような顔をして暮らしてきて、それで碌なことないのですよ。考えてみたら百年前というのは我々だって完全に第三世界だったのです。例えば、ロンドンへ伊藤博文とか出かけました。学んだ時に、日本という名前、ジャパンですけれど、そんなもの誰が知っていたでしょう。知らないでしょう。誰も。アフリカの果てから誰かやって来て、僕が紹介しよ

うとしますね。その国の名前たいていの皆さん知らないですよ。そういうような時代だったのですね日本は。だから第三世界というのは遅れている国だと言わないで明治を見て下さい。我々そうだったのですから、そんな中からいろんなものが出てきて、これ以上やるつもりはないので、ここでやめますけれども、あまり遠いものだと考えないことです。我々は地理的にいろんなものを見ると同時に、歴史的に遡って見ることもできると思います。

他の国の言葉で考えてみる

とにかく、いろんな関係が我々と朝鮮の間にあるということに対して好奇心を生き生きと働かしたらいと思っています。するとそこでこれは一体どうなっているのかということが出てくると思うのです。例えば、いま在日朝鮮人は旅行の自由がないのです。我々は観光旅行でパリでもどこでも行くのに、隣りの金さんはなかなか行かないです。どうしてかと言うと、お金の問題が一つあるけれども、同時に行けないように日本の政府は制度をつくってしまったのです。何も日本が社会主義政権でないからというのじゃなくて、日本の保主政権というのはいかにバカげた反動政権であるかというその一言ですね。つまり彼を正当な外国人として見なしていない、というこ

とがすぐわかります。出るのは簡単だけれども帰ってこないというシステム・組織をつくってしまっただけです。そういうこといろいろ出てきます。だから生き生きといろんなものに対して好奇心を持っていただいて、その中で少し朝鮮の問題と日本の問題というのを考えたほうがいいのじゃないかという気がします。

学生の集会なんかに行きますと、在日朝鮮人が出てくるだけでもアウトになってしまつて、私達がもう三十二年間植民地化したからもうだめだというような話になって、わが内にある朝鮮を語つてそれで終わりなのです。聞いた連中は、はあーということになって、それで帰つてしまうからだめなのです。本屋でも大体そういう本ばかりですね。だからもう少し生き生きとした好奇心を持つていただきたいという気がするのです。それには、やっぱり人間同士だということを一度考えたほうがいいと思います。そして、そこでいろんな問題が出て来ます。例えば、金達寿さんが日本文化を何故知っているのか。何故やたらに知っているのか。植民地化したからです。日本語を強制して日本文化を強制したからです。そういうことがわかつてくるわけです。

例えば、私達なんで中学校で英語教育をやっているかという、私、英語の教師ですからいつも学期のはじめ

に集めて、なんで英語をやっているのかという大激論をすることにしてはいるのです。するとまあ、いろんな答がくるのだけれども、中学校の義務教育に外国語教育をすることに私は賛成なのです。別に語学教師として言うのじゃなくて、やったほうがいいですね。それは何故かと言いますと、その国の言葉が上手くなるかと言いますと、どうせ上手くならないです。その国の言葉が上手くなることよりか思考の幅が広がることですね。人間の思考の幅が広くなります。自国語ばかりで考えないで、他の国の言葉でものを考える。なかなかできないです、そんなことは。ただ外の国の言葉の筋道、もともと考えることの道筋、やり方を少しは獲得することができると思っています。例えば、明治時代以来の私達がしゃべっている日本語は、明治時代とあきらかに違いますよ。それは、明治維新をやつて西洋文明を入れたから、外来語とかいうことじゃなくて、日本の言葉の構造そのもの、我々のものごとの考え方、筋道の中にあきらかに西洋的なものが入っています。それは否が応でも広がったのです。だから僕は外国語とは、そういうように非常に大事だと思つている。余裕のある人はやつたらいいです。ところが、それじゃ何故英語ばかりかという問題が出てくるわけです。僕は外国語教育に賛成だから朝鮮語を中学の時に

やったらいいと思います。私はいま、朝鮮語を一生懸命勉強するのだけれども、歳をとっているからすぐ忘れてだめですね。中学時代にやっておけばよかったと思います。あるいはベトナム語でもいいですよ。で、何故英語かということ一度考えてみたらいいと思うのです。それは非常に簡単ですね。イギリス帝国主義が全世界を制覇していたから、この日本の果てまで英語教育になったわけですね。そして英語が難無く通じることになってしまったことを忘れてはいけないと思います。そういうことを少し根源に至るまで好奇心を持ったほうがいいと思います。そうして朝鮮の問題でも好奇心を持つことがいいと思います。隣りの国だし、日本の中の朝鮮文化みためにこんなにたくさん入って来ていることをまず私達が考える。私自身そうですが、大体大阪生れであることが、かつて朝鮮から渡って来た可能性が非常に強いですね。大阪で育たれた方、ひとつ可能性としてそういうことを考えてみたらおもしろいと思います。

怒る日本人、朝鮮人、歌の上手な在日朝鮮人

この八月に韓国問題研究国際会議というのを、私事務局長で半年位準備してやったわけです。その時たいへんおもしろかったのは、韓国の民主化闘争を非常に強力に

展開している韓民党という団体の人達と、韓国青年同盟という人達と主にやって、まあ三ヶ月位毎日顔を合わせただけです。在日朝鮮人と言いたいのですけれども政治のややこしいことがあって、それはまた後で説明します。在日韓国人と毎日顔を合わせて一緒に仕事をしたわけです。考え方の違いなんかが出てきて二日に一度位喧嘩したりしながら、いろんなことがあって、ワイワイ言いながらとにかくその会議をしたのです。私は成功だと思えますけれども、そこでいろんなことがわかったのですね。どういことがわかったかと言いますと、まず日本人も朝鮮人もよく怒る国民だということです。やっぱり緊張する民族ですね。僕はアジアのあちこちへ行っているけど、やっぱり南方系の人はおっとりしていますね。タイとかマレーシアとか、タイはだめかな、マレーシアの人は悠然と構えているところがあって、で、中国人は悠然と構えているわけですね。日本人と朝鮮人というのはすぐ喧嘩しますね。カッカします。怒り方見ていると非常におもしろいですね。日本人の怒り方見ていると、大体内面にこもって、こめかみのあたりがピクピクツツと震えます。朝鮮人はどうなるかと言いますと、すぐカーンとなつて色をなしますね。色をなすという表現はあたっていいかな。すぐ赤くなります。「また赤くなりよつた」と言

って私はいつもからかっていたのですけれどもね。それほどどこから出てくるのか考えますと非常にもしろいですね。

僕は若者と非常に付き合いが多くて、予備校の教師だから、この間もコンパをしたのですけれども、日本人の若者が集まって歌えと言ったら歌えないですね。下手だし一緒に共通する歌がないしゼロですね。全共闘のワーツといった時は歌がありますね。華やかな歌がありますよ。政治運動とはそういうものが必要ですね。僕が教えているのは予備校の生徒だから、全く非政治的な人ばかりです。例えば全共闘が暴れるとそういう連中まで生き生きしてくるね。現在、白けた、白けたと言って生き生きし



ないのは政治運動がないからです。どこかで暴れていたほうがいいのじゃないですか人間は。そうすると高揚してきて非政治的な受験ばかりやっている人達まで、ちよっとこの大学いかんのじゃないかと大問題言いますよ。そういうのは僕の所へ遊びに来る。未だに非政治的な、全共闘と関係のない奴ですが、その時代を懐かしがっていますね。そういうのがあって、歌でも共通した歌があります。現在ないです。全然バラバラですね。年々歳々十八、九の若者相手に暮らしてきたからよくわかります。客観的に見れるので、ここにいられている方の息子さん、そんなに大きくないでしょう。それで大体見ていたら歌わないですね。それに歌うと下手で見られないですね。



聴いてられないし……。朝鮮の若者、青年同盟とか付き合ひ多いけれど、これはまた歌、上手いですね。すごく在日朝鮮人という日本人化されているというけれどやっぱり上手いですね。こう非常に高揚して歌う。そして内面そのものを外面に出そうとして、それが出てくる。歌自身生き々したのが多いですね。日本の歌はなんとなく湿っぽいばかりですね。それから現在の中に主張することがないのかな、主張がないですね。私は若い世代の歌として現在の世代をよく表わしていると思うのは、「戦争を知らない子供たち」という歌があるでしょう。聴いたことがあるでしょう。子供さん達が歌っているでしょう。あれこそなんとなくインチキな歌だと思えますですね。私は戦争を知らないんだってことを言っているだけです。それでどうなんだってことを言わない歌ですね。不思議な歌ですね聴いていて。戦争を知らないから私は知らない。大人の言うことなんか聞かばかばかしい。反戦運動なんかあほらしいというひとつの主張でしょう。戦争を知らないからけしからん。私は戦争を知らなきゃいけないというのもひとつの主張ですね。あれ、反戦運動やるのか、どっちでもいいのか、何かあるようで主張がないのです。あれ、左翼にでも右翼にでもなれる歌ですね。そう言っているだけだから。僕はたいへんおもし

ろいと思うのです。

私はどうするんだと問いかけ

あっちこっちと話がとぶけど、日本人の論議でひとつおもしろいことがあります。こういう集会でも、後で質問する時、チャンと言つて下さいね。質問は質問でも、主張を述べない人たくさんいます。何とかかんとか並べて、日本の客観的情勢はこうです、で先生どう思いますか、と言うからあなたどう思いますかかっていつも聞くのです。まず自分の意見言わないとだめですね。

例えば、英語教えている時、いろんなことがわかるのですけれども、日本の問題書けと言うのです。英語でね。まずいろんな問題あげさすでしょう、そうしたらこう書きますね。例えば、インフレの問題があると言うでしょう。で、書けと言つたら、英作やから英語で書きます。彼、無茶苦茶英語で書くのですけれども、インフレの問題と書くでしょう。僕は見て、この間アメリカの大統領選挙でカーターとフォードがやり合いましたでしょう。その時の報道に上手くまとめてあるわけです。やっぱりこういう問題が討議されたというので、アメリカの雑誌見ていたらインフレを軽減することが書いてあるのです。それについて彼は論及したと書いてあるのです。インフ

レを軽減するとなると、カーターとフォードのやり方は違うでしょう。それでどうするのだから書いてあるのです。ただインフレの問題がありますという、僕は福田赳夫もありますと言ったらそれで終わりでしょう。僕は福田赳夫と握手できますよ。ロッキードスキャンダルというのがありますよと言ったらそれはたいへんな問題ですね。日本では、と言ったら三木さんと皆ニコニコ。そうでしょう。皆そう言っているもの。ロッキードスキャンダルをどうするかって問題で大喧嘩になるわけです。そこから日本の学生はインフレの問題がありますよと言ってくれる。あたりまえのことで、それでおまえどうするのかと言いますと、そういう態度は非常におもしろくないですね。僕は日本人の見解でよく言われるのはワーワーと言いついて私はこうなんだと言いますね。そしたらそれでどうなんだというのが欠けていますね。英語の見解から、私はこんなに支持して、こんなに貧乏して困っているんだと言って、あんたそれでどうなんだって言いますね。残酷無惨に言いますね。だからそこどころ日本の社会つておもしろいとこだという気がしません。

例えば、この間朝鮮人差別という問題があつて、若い奴で朝鮮人差別と書いたのがあるのです。それは差別の

よつてきたる原因を延々と述べているのですね。それは確かにその論理は当たっているわけです。例えば、朴政権は滅茶苦茶で、北は官僚主義の国で碌なことはないと日本は繁栄しているから中国に対する差別感はないでしょう。日本は中国は大きくなって偉くなったという意識がどこかにあるから、昔のチャンコロみたいなことはもうない。それに対して朝鮮には依然としてあるのは、朝鮮が小さな国でだめなんだという話で言うのですね。まあ、それはわかつた。で、君はどうなんだと聞いたのですね。いいと思つていいのか悪いと思つていいのか説明は皆わかつた。で、一体おまえはどう思つていいのかと言うと彼びつくりして、またどうのこうのと言うから、客観的情勢の説明は結構だ、いいのか悪いのかどう思つていいのか、それしかないと思つて。我々の世代の若い人達、私も含めて客観的情勢の説明ばかりやっていますね。だから戦争は知らないのだと言つていただけですよ。だけど戦争を知らないからどうするのだという主張があると思つて。す。

日本の歌が墮落してきた世相に対して一生懸命考えたら、私の友達の永六輔さんも墮落してきたのじゃないかと考えます。計量方法とかなんとか言つてるのは墮落したと思わないけれども、歌はどうもいけない。私はマ

マよという歌がありますね。あれは主張していますね。「こんにちは赤ちゃん、私はママよ」と言っているでしょう。ところがだん々歌を作っていて、「京都三条に女がひとり」とか言った歌がある。あれは女がひとりいるからどうだつてことは言わないですね。俺は惚れたから行くとか、強姦するからとか何も言わないんだもの。あれはいると存在だけ言っているのだからだめです。やっぱり私は惚れたから行きますとか言わなきゃだめですよ。そういうところがたいへん大事だと思うのですね。この中に朝鮮の方いらつしやるかもわからないけれど、私達として、日本人として抑圧した国民に属しているわけですね。私は抑圧した国民だと言ってもそれでどうなんだということが出てこないとだめですよ。私の国は無茶苦茶やっていますよ。それを分析していてもしょうがない。最後のところはそれでどうするんだということしかないでしょう。私の国がこういうことをしたのだ。その通りだ。それでおまえはどうするんだ。私はどうするんだというところまで議論踏み込まないんだめなんです。ところが集会なんかやってもそうならないですね。朝鮮人が来て言う、こう、ふわーと黙ってしまつて、そして誰かがいかに我々は悪いことをしたかつて言うでしょう。するとそりゃたいへんでしたね

終わりですね。いまの存在を嘆いてみてもしようがないですね。それでどうするんだという大問題にかえります。ここに来られている方は中産階級でしょう。僕もそうだけれど、中産階級だからどうだつてことが出てきますね。するとスラムにはなんとか問題がありますが、山谷に入つたら、あるいは釜ヶ崎には何とかがとすぐ若者は言うけど、結構だと。それでおまえは中産階級だろう、インテリだろう、大学生だろう、それでおまえはどうするんだと、それしかないでしょうということに僕は繰り返して言うし、自分に対する問なのです。内容で言つてもなくてもしょうがないし、それはどちらにもあるわけですからそれでどうなんだということを私達の一番になると思うし、そういう感じを私はまず持つたらいいのじゃないかと言うのです。それでないと一歩も進まないです。いろいろ話ごとびますけれども、朝鮮人の怒り方と日本人の怒り方が違つて感じがしたのです。で、歌もずいぶん違つて感じがして、いつか司馬遼太郎氏と話している時、僕は「朝鮮人の歌はこんなに素晴らしいのに、何故日本人の歌はあんなちっぽけな、アホみたいな歌になるのかな」と言つて話したら、モンゴル人が日本人みたいところがあつて四畳半の歌みたいだ、と言つて歌つてくれたのです。確かにお座敷で聴いているよう



な歌ですね。どうしてそうなるのかたいへんおもしろい問題だけれども、あれほどワーと出てくるのに、我々は どうしてあんなように出ないのかということ興味あると思うのですね。ところが同時に、韓国の流行歌なんか聴いていると、日本の流行歌の引き写しみたいなのです。ずつと流行歌はもの悲しいものばかりです。韓国の流行歌、お聴きになったことないですか。僕は大好きなんですよ。そういうのあっちこっち行つてその国の人々が歌っているレコード買ったたりしているのです。僕はもう韓国へは行けないですけれども、それは昔の話です。だから普通に人間生きていますので、そのところ皆少し考えたらいいと思います。でなければ、もうなんか怖



くて寄りつけないでしょう。むこうも困るし、こっちも困る。事実、一緒に何もできないですから。だからそういうところをまず一緒に考えたいと思います。そしていرونなどころに違いがあるし、よく怒るし、と同時にわかることがあると思うのです。そういうことが第一歩ですね。人間は普遍である、平等であることを考えて、その上で違いはどこから出てくるのか、その違いは国民性によるのだろうか、国民性というのは曖昧模糊としてあまり使いたくない言葉だけれども、その社会がずつと長い間培ってきた、歴史が培ってきたものによってつくられたものか、あるいは制度によってつくられたものか、また歴史の中のある特殊条件によってつくられたものか

つていうことが出てくるわけです。その特殊条件の中に、日本が朝鮮を侵略した、あるいは植民地化した、そして現在も経済侵略をしていることが入ってくるわけです。そういうように私達考えなきゃいけないと思うのです。そうして私達、朝鮮に対していろんな興味を持つて考えていくとおもしろいと思うのです。

「武」の日本人、「文」の朝鮮人

私は、この間金史良の小説を読んだのです。私は在日朝鮮人作家の小説は友人としてよく読むのですけれども、金史良はもう死んでいます。

(金史良と黒板に書く。)このくらいの漢字は書けるのです。私は漢字書けないので、学校で教えている時にいつも間違った漢字を書くので、皆笑うのです。漢字をちゃんと書かないかで人間を差別してはいけませんね。(笑い) つか、私の書いた文章が立教大学かどこか大学入試問題で出たのですね。僕は予備校の寮の監督していた。受けて帰って来た奴が僕の顔を見て、「あつ、先生、来た来た。これ先生に聞いたらわかる」と言うのです。「何だ」と聞くと、僕の文章に設問がついているのです。読んでいたら、「これどうですか」と聞かれても答えられない。しかも傑作なことに書取りができない。

何故できないかと言うと簡単です。字引き引いて書いたのだから。「じゃ、俺この試験受けて落っこちるよ」と大笑いになったのですね。そういうような問題ばかり出していますね。こんなアホなことやめればいいのになって、気が僕にはあります。

で、その金史良という人はどんな人かって言いますと、もう死んでいるのですが、昔、芥川賞ももらった『光の中に』という小説書いたのです。日本の侵略している時です。植民地化している時です。昭和十何年という日中戦争している時代の朝鮮人の苦しみを上手く書いた人です。抵抗した人ですけどね。その人を論ずるつもりは全然なくて、たまたまその作品をこの間、寝ころんで読んでいたら、ああ、なるほどなあと思ったのです。たいへんおもしろかったのは、秀才の坊ちゃんが出て、その少年と母親が暮らしていて、そして悲劇が起こって、ちょっとこうお涙頂戴みたいな大衆小説なんだけれども。その中に、少年にお母さんが何になるのだということと言うのです。そしたら子供がすぐ答えたのです。思想家になると言うのですよ。思想家にだって……。日本の子供、答えないですよ、思想家になるなんて、答えないです。そして何でなるのかとお母さんが聞いたら、その答が傑作ですね。思想家は全てのものに勝つと言うのです。全

てのものに打ち勝つ力を持つのは思想家である。だから私はそれになりたいと言うのです。これはたいへんおもしろいと思うのです。日本の子供はそんなこと答えるはずありません。我々の中に思想の力を信じてないところがありますね。よく文武両道と言いますけれども、日本の社会をずっと見ていますと、徹底して文を信じていない社会ですね。いつも武だけ考えていますよ、この社会は。武の中には、何も武力だけじゃないですよ。金力だとか力ですね。それだけ考えている社会だって気がしますね。これは何も西洋の社会と比較していうのじゃなくて、例えば朝鮮の社会と、中国の社会と、あるいはインドの社会と比べてみるとそれははっきりしてくるのです。日本人論は大体インチキだけど、日本が特殊だと思うのは、ちよつとそういうところがありますね。つまり武を徹底して重視している社会ですね。文が勝つと思っていないでしょう。例えば、学生運動の人達がワーツとピラ撒くの、僕はあんな難解な無茶苦茶なピラよく撒くなと思うのです。あれ文信じてないからですね。言葉信じてないから、つまり誰も読まなくていいのですよ。紙屑といっしょです。で、どこかで言葉を信じている自分はインチキだと思ひ、どこかで武力闘争しなきゃいけないとすくなるのですね。どこかで武力闘争しなきゃいけないと

いう気持の逆には、やつぱり三菱が勝つのじゃないかと思うのですね。あの巨大な企業が勝つのじゃないかと思うから、結局四年生になったら転向してさつさと三菱に入つて行きますね。今までゲバ棒ふつた奴は四年生になったら行つちゃうでしょう。僕は言葉信じたら、文を信じたら、もうちよつとピラの書き方というのを考えたらいいと思います。十何年付き合つて見た結論は、連綿として信じていない社会だと思います。インテリの見解でだめな原因だと思ひるのは、大阪には文筆業というインテリは少ないけれど、東京の新宿なんか行くと、よくインテリなんか来るバーがあるわけです。そのバーへ来てワーツと議論するでしょう。僕は見てたいへんおもしろいと思ひのは、日本のインテリの特徴というのは、酒飲んだら談論風発するのは当然で、その特色は何かというとすぐ喧嘩すること、すぐ怒ることですね。文壇に出てくる人、商業雑誌によく書いたりする人見ますよ。名前は言わないほうがいいでしょう。すぐ怒る。すぐ喧嘩する。そしてすぐ泣くね。これはたいへんおもしろいですよ。で、喧嘩する時にどうするか、すぐ、「おつ、来るか」と腕捲りますよ。たいしたことない細い腕をね。どこかの大学の先生か、評論家ですからね。「おつ、来るか」と言つて、すぐ「外に出ろ」なんて言いますね。

僕は日本以外でこのような光景は見たことありませんね。そりゃ、喧嘩はいつもやっていますよ。ところが、インテリの喧嘩ですぐに、「おつ、来るか」となるのは日本だけです。これはおもしろいと思います。他の社会だったら、こんな喧嘩やったらインテリの資格なくなるよ。朝鮮、中国、ベトナムみんなそうです。あるいは、インド、アメリカ、フランスとどこでもいいけどインテリの資格なくなってしまうですね。腕振るったらおしまいです。つまり論議に負けてしまったのだから、インテリの資格は全部なくなるってことですね。文で敗北したってことでしよう完全に。そしてすぐ泣くのです。「俺の氣持わかつてくれよ」と言つて泣くわけですね。僕は泣いたつてしようがないと思いますがね。インテリの資格全部放棄したわけですね。インテリの資格って何かといいますと言葉しかありません。腕振り捲くつたつて負けますよ。僕はそう思う主義ですね。だから、いつか大学生の全共闘が暴れた頃、たいへんおもしろかつたのは、一生懸命武道の稽古しているのですけれども、皆ひ弱い身体で、そんなのやつたつて警察機動隊にいっぺんに蹴飛ばされてしまいますよ。そんなことする暇あつたらもつと他のこと考えたらどうかつて言つたことあるのですけれども……。そんな練習したつて、おそらく現実に警察機

動隊と渡り合つたことのない人の抽象論だと思う。俺、何度もデモしたから。朝から晩まで給料貰つて喧嘩の稽古やつているのには負けるの当り前ですよ。そりゃそうでしょう。あの機動隊ワーツと来るでしょう。あれ、前みたら恐いですよ。どうしてかつて言いますと大きな奴ばかりですね。私自身体大きいですけど、もつと大きいのですから。で、後ろ見たらいいですね。大体弱い奴が控えていますから。眼鏡かけた奴とか、眼鏡しないと思ふけれど、ちよつと中年でよぼよぼした奴とか、それ見ていると真剣にこれは人間だと思ふね。これは大丈夫だつて気がしてきてね。前見ていると巨人みたいなのが出てくるし、それに蹴飛ばされたらおしまいですよ。だから後ろの奴に一生懸命呼びかけたらいと思ひます。前のと喧嘩したつて負けるに決まっていますよ。そして、日本の喧嘩というのは、大体ワーツと行つてボカツつて負けるわけです。それで挫折して泣くわけです。そういうことばかりやつているでしょう。日本の社会とていうのはやつぱりいろんな歴史的な事情があつて、文を持たない国ですね。

毛沢東がこの間死んだけれども、毛沢東は文化大革命で武道をずいぶん戒めるでしょう。文、文、文といふことをさかんに言います。結果的に革命とクーデターの違



いというのは、クーデターは武だけでやるし、革命は文をやりませう。ただし血を流すことはいくらでもやりませう。毛沢東はそんなセンチメンタリストじゃないと思いますね。彼はしよっちゅう言ってますように、「鉄砲から政権が生まれる」とよくいわれているが、また「鉄砲から政権は生まれない」と盛んに言ってますよ。革命はカクテルパーティーじゃないと言ってますから、結果的に血を流すことがあり、結果的に武力闘争になっても、根本的には文であるということがないとそれは革命じゃないんです。それはもう警察機動隊が勝つのに決まっていますのだから、そういうことをやればそれはゴリラの喧嘩です。やはり思想の力というのを非常に強く感じ、思想

はあらゆるものに打ち勝つのだというのが毛沢東思想ですね。僕は毛沢東支持者じゃないけれどそこところは信じていますよ。

朝鮮人に学ぶ思想の力

それは朝鮮の人達が、さつき子供が、「私は思想家になるのだ」ということを子供の時に言うこと自体、やっぱり思想の力を信じているわけですね。それ信じてないといけないです。例えば、現実に韓国の民主化闘争としてやられているでしょう。やはり切り替えしようと思ったら思想の力を信じるか否かってことですね。現実から言ったら皆、朴にやられているわけですね。そしてこの



政権はやっぱり間違いであるという思想の力を彼等は信じているわけですね。そうとらなないといけないのじゃないかということをまず考えたいと思います。思想の力をやっぱり信じることをまず第一に彼等は考えていることを、我々は考えるべきですね。人に学ぶことはやはり必要だと思えますね。好奇心は、何か自分に得になるものを取ろうとしているでしょう。私は非常にさもしいのですよ。私は得になるものを取りたいから、いろいろと出かけて行って、人と話をして聞こうと思うのです。それはやはり得になります。自分がないものを獲得したらいと思うのです。朝鮮と日本の関係において、僕はやっぱり朝鮮の人のほうがはるかにいろんなものを持っていると思います。そりゃ、みんな平等だから日本人も持っていますよ。でも思想の力を強く考えている態度は日本人にないものですね。非常に残念なことに私にないものです。で、その思想というもののひとつは先ほどの普遍的なものですね。思想は普遍化しないとだめですね。自分がこう思っている、思っていただけではだめでしよう。それを言葉にして相手にわからせるように普遍化する努力が働きますね。そうしないと、思想という名前がつく以上、自分の思いというものの、感情というものを普遍化して、そしてそこではじめて普遍的なものになる

と思うのです。日本の特色は、はじめから自分は特殊だと決めつけていますね。「俺の気持は俺しかわからない」すぐ言うでしょう。そして最後は泣くわけですね。「おまえにはどうせわかっていない」という話になるわけですね。そういうことでは何もできないですよ。だから朝鮮の人にこれだけ似てて、怒ったりすることは同じだと先ほど僕は言いましたけれど、普遍化しようとする努力を彼等は持つていると思うのです。それがたいへんなことだという気がしますね。で、我々はそれを獲得したほうがいいのじゃないかと思うのです。そういうなかで彼らが我々とこんなにならなくて、こんなに近いところにならなくてどうして違っているかを考えると同時に、彼らは何を持っているかを少しお考えになつたらいいと思います。例えば、金芝河の思想でも、あるいは韓国民主化闘争でもよく出てくるでしょう。あの中にある普遍的なものに対して、信頼して、そして闘おうとする姿勢があると思うのです。これは非常に重大なことではないかと思うのです。それをはじめから特殊化するようではだめなのです。

日本の中ってたいへんおもしろいですね。アメリカ合衆国の人が日本語を習っていて、演説大会に出て賞を貰った方の演説をたまたまラジオで聞いていておもしろか

ったですね。要するに、自分を普通の眼で見てもほしいと
まず言つて、彼女が日本人の友達と一緒に歌舞伎を見に
行つて、そして彼女泣いたわけです。そしたら友達のお
ばさん達が「アメリカの人もわかるのですね。やっぱり
泣くのですね」と言つたのです。わかりますよ、そ
んなものは。人間の気持は同じですよ。ただ、日本人に
は歌舞伎というのは日本人にしかわからないという奇妙
な信念がありますね。日本のことは日本人にしかわから
ない。そういうことが私達の社会の中に伝統としてあり
ます。つまり日本のものは全部特殊であるという考え方
があります。そしてそれを普遍化しようとする努力をし
ない。やっぱり私達にとつて普遍化しようとする努力が
必要だと思つたのです。ヨーロッパとかいわないで、とな
りの国の人達が我々と一緒になつて日本の中にワンサと
いるわけです。そういう人達からやっぱり取つたらいい
と思う。食欲に取つて、豊かになつたほうがいいと思ひ
ます。お互いに。私はそう考えます。

平時の日本人、緊急時の朝鮮人

もうひとつおもしろかつたのは、その韓国問題研究国
際会議の中で、韓国民主化闘争の人達と喧嘩しながら毎
日付き合つてわかつたことです。どこで意見の食い違い

が出てくるかということで、今言つたことが出てきたの
ですね。つまり、思想を考へるかどうかということ。現
在に、原則に基づいて物事を考へていく態度が我々には
ないです。中国の場合は、もつと強くなるでしょうし、
そういう意味で我々は考へていかなくはと思つたので
す。

もうひとつは、こういう違いがあつたのです。今度は
ちよつと歴史的な問題ではなくて、現在の政治情勢の問
題になつてきます。私達は平時の感覚で生きています。

平時というのは平穩無事の平時。で、韓国人達は全体
的に緊急時の感覚で生きています。そこで食い違いがも
のすごく出たと思つたのです。日本人側と韓国人側のいつ
も喧嘩していたひとつの考への違いは、平時の感覚
と緊急時の感覚という問題だと思つたのです。我々の歴史
というのは、ある特殊な状況を除けば、大体平時が多い
ですね。今まさに我々は平穩無事の時代に生きています
でしょう。平時の特色は予定がたてられることです。明日
何時に何するということ。人間の存在自体が全部緊急
時でいつ死ぬかわからないでしょう。でも明日三時に
会いましょうと約束する時に、もし生きていたらなんて
言わないですね。平時の感覚で生きているから、そんな
ところで感じないですむわけです。韓国人は、在日朝鮮

人も全部含めて、さつき言ったアメリカ人の二世・三世も問題になるけれど、緊急時の感じがします。我々にとって何でもないことが、たいへんなことになることがあります。そこから辺においても食い違いが生じている。彼等は緊急時の感覚で生きている。

例えば、韓国民主化闘争を考えてみた場合、ああいう政権の下で生きていること自体、緊急時にならざるを得ないと思うのです。緊急時の感覚の特色は、こと細かな事より、原則に従ってでつかい事を考えたほうがいいのじゃないかということです。こと細かな現状から全部出発したら身動きとれないです。現実から全部出発したら現実から離れちゃいけないのだけれども、現実べつたりだと何もできない。朴政権の現実がチャンとあり、その現実にあさわしい行動をしたら何もできないですね。そこがなかなか難しいところなのです。

例えば、天皇在位五十年があるでしょう。天皇在位五十年に対して、東京都知事の美濃部さんは反対で、「私は出席しない」とおっしゃった。それに対して、大阪府の黒田さんは出ると言ったのでしよう。私、黒田さんよく知っているのだけど、おもしろいと思うのです。その中間に神奈川県長洲さんでしよう。出席しないけれどもその理由が美濃部さんみたいにすっきりしてないでし

よう。美濃部さんは、「私の歴史的感覚、体験から言って反対する」と言って非常にすっきりしている。ひとりだけなのです。こんなこと言ったの。「忙しい」からとか「身体の具合が悪いから」とか、それに黒田さんのように出るといふ人。そうなるとこのところに難しい問題が出てくるわけですよ。地域の問題というのに入ってくるわけですね。つまり完全に現実には密着している日本人の、多数決とったことないけれども、県民感覚というのをここで言うと、やっぱり天皇が大事だと思っている人多いかも知れませんよ。例えば、埼玉県の知事はそういうのですね。県民の感覚から出発すると、出てくる声というのは「出席したほうがいい」となるでしょうと。

そこで、それを越える何ものが要るといふことが時々ありますね。そうしないと草の根民主主義といわれるのが草の根保守主義になりますよ。つまり我々の生活自体が平時の感覚で生きている以上はと、全て何事も平穩無事な事を起こさないですませましようといふことではない。そこから出てくるのは、何もしたらいかんということでしょう。僕は、平時の感覚の雑誌が一番おもしろいと思うのは『暮らしの手帖』という雑誌があるでしょう。あれ、ある程度の役割りを果たしたと思うけれども、本当に墮落したと思っっているのです。松田道雄さんがあそ



ここに投稿して、いつかたいへんおもしろく読んだのですけれども、この雑誌を読むと家庭の主婦は皆、賢くなる。電気ストーブはいいのを買えるし、無駄な金を使わなくていいのが買える。で、子供も賢くなる。それでどうするのだろう、と書いてありました。僕はそれを読んで成程と思いましたね。僕読んでいて墮落してきたなと思うのは、あそこに投書欄があるでしょう。『サンデー毎日』『週刊朝日』全部それ載せましたね。要するに、家庭の主婦が投書するのは結構だけれども、全員がお惚気です。家の主人はぐうたらで、朝寝坊してけしからん、鼻ちようちん出して寝るとか、おならをプーとすとか、そういう話ばかりでしょう（笑）。ほんとうで



すよ。全部そうですよ。それしかないもの、話題は。それじゃそのおならをプーとする亭主がぐうたらだったら別れたらいいじゃないかと、いや、それでもいいところがあつてという話になってそれで終わりでしょう。全員そうですよ。書いてあるのは、『週刊朝日』見てもそういう欄あるでしょう。今頃夫は突然読書に目覚めて本を買って来たけれども、グーと寝てしまったとか、そんな話ばかり書いてあるでしょう。もう結構だと言うのですよ。そんな話いくら書いたってしかたないでしょう。平時だからそれしかないもの。だから、それにべったりしてたら何もできないですよ。韓国を抑圧し滅茶苦茶やつているほうがいいということになるでしょう。最後は。

別に、鼻ちようちん出すことがそこに結び付くとは思わないけれどもね。だからそれを乗り越える何ものかが要る。美濃部さんが偉いと思うのはそこを越えているから。あの人しようがない人だとは思うけれども、そこだけは偉いと思うね。率直に尊敬するね。黒田さんとか皆、そんなのぶっつけたらいいと思いますよ。そんな国民感覚、府民感覚でやっていたら何もできないですよ。どうせ平時の感覚だもの。つまり、天皇の下で弾圧もされずに何となくふんわかふんわか生きていたら、天皇もいいものじゃないかということになるでしょう。核もへちまもあるものかということになるでしょう。そこで美濃部さんは、体験から言つて許しがたいって言つたわけでしょう。それはたいへんいいことだよ。越えてますよ。つまり東京都民の感覚なんか聞いたことがない。彼は自分で言つたのだもの。自分に率直に言つたのですね。それは彼のひとつの信念として、思想として語つたわけですね。原理原則として彼は語つたわけですよ。まあ、そういうことは緊急時のほうから出てくると思うのです。で、僕は韓国の人達、あるいは朝鮮の人達から学ぶものがあるとするれば、そういうものをひとつ考えたらどうかと思うのです。緊急時の問題だということ。そこで生きているのだ、あるいは我々がいかに平時の感覚で生きているか

を知りますね。そこから僕は考えてみると、日本歴史の見方として、動乱の時代を主に考えるか、それとも平穩無事の時代を主に考えるかがあるでしょう。例えば、応仁の乱がありますね。その乱のほうから主に考える歴史があつてもいいと思うのですよ。今は平穩無事の時代から考えているでしょう。乱のほうが異常で、平穩無事の時代が正常だという感覚をあまりに我々持ちすぎていると思うのです。で、そういうことを少し我々として考えたいと思います。

革命的情熱

それからもうひとつ、韓国民主化闘争の人達とやつていてわかつたことは、さっきの原理原則から見ますけれども、彼らは革命的情熱というのを持っていますね。我々はそれはありません。それは何かと言いますと、現実から言つてそれは絶望ですよ。そうすると将来にかけるだけの情熱を持たないとそれはできません。現状から言つて、そんなことは無茶ですね。だから前方にでつかい目標を掲げて、それにくつついて現状をけなさない、きかない。そういうのを持っていますね。日本の運動は、それが非常に欠けている運動ですね。左翼の運動見て、旧左翼と言われている人達も、新左翼と言われている人

達も革命的情熱がなかなかないですね。僕はいつも革命をやるという人達に一番初めに質問をします。「あなたは革命をあなたが生きている間にやれますか」と聞くことにしているのです。僕は宮本顯治氏に会った時に、一番初めにそういう質問したら、彼びっくり仰天していたけれど、「私はやれると思います」と言ったから、私は買うことにしたのです。それをこう、言を左右する人は全部買わないと思いますね。そういうように賭けるものはない人はだめなのですよ。日本の場合は、非常に不思議なことにそれがありません。それでマルクスだのレーニンだのと言っているからおかしなことです。学生運動とか若者達のいろんな運動があるけれども、いつも聞くことにしているのです。「おまえ、それ本当にできると思っているのか」と。「それは難しいです」「それだったら、やめておけ」と言うのです。やめたらいいですよ。難しいとか言うのだったら。

今度は、逆に出てくることは、一度こう大きな原則をおいたら、自分は原則において曲げることないから、すごく柔軟になるのですね。日本の場合は建て前としてやっている場合が非常に多いから柔軟になれない。自分はマルクス・レーニン主義でも、賭けることになればここはもうどうにでもできます。が、自分は原則を守ること

がないのだから日本の場合これがないです。これがなかったら建て前としていろんなこと決めなきゃならない。その建て前が優等生みたいなことが出てくるのです。そういうのはやっぱり避けたほうがいいと思うのですね。もつと自由奔放にやるためには、ある場合には妥協したって何だかっていいと思うのですよ。第一に、そういうものをやるかやらないか大問題ですね。信じているか否か大問題ですね。そこに到達します。韓国の民主化闘争の人達はそれを信じています。信じざるを得ないもの。そのほかに何にもないもの。信じるでしょう、私達は民主化闘争を実現すると、民主化すると、南北統一という誰が考えても不可能なようなことを「私はやる」「私達にはそれしかないのだ」というところに熱中します。そこから話をする。そこから現在を見ようではないかというところに出てくると思うのです。そうしないとだめだと思ふのですね。やっぱり将来の運動というのは、将来に對してやっぱりだめじゃないかって気がします。だからまずそういうものをうち立てて、それに対して自分はどうするかという問題が出てくる。日本人の場合はそれが非常に足りない。だからうまく行かないことが非常に多く出てくると私は思いますね。だから、そこで原理原則を実際に考えて、そして大きな目標を立てれば、ある場

合は妥協することもできて、柔軟になれると思えますね。韓国の問題、朝鮮の問題を、もう少し大きな視野の中に入れて、自分の肥やしになるということでお考えになつたほうがいいんじゃないかと気がします。そうしないと優等生みたいな答ばかりしか出てこないですね。私達は侵略したと、その罪はどうするかの話ばかりしているわけです。その罪をどうするかは簡単ですね。将来に我々どうするかってことしかありません。それでないと出来ません。どう言つたって、後ろ向いて毎日拜んでたつてしようがないです。だから共通の目標を考えて、それについて一人々の目標を考えて、そして共通の目標に向かって進むよりしようがないです、というのが私の感じです。

南北の自主的平和統一

私は、いま一番朝鮮の方が願っている南北統一、自主的南北平和統一という問題について、もう少し日本人として考えていいと思うのです。朝鮮の方から言うと、朝鮮民族の悲願であるわけですね。事実として、その分裂に我々手を貸したわけですね。しかし、同時に日本人にとつてどう意味があるのか、それについても考える必要があると思うのです。それを我々は考えてないですよ。

私はその南北統一に対して非常に賛成なのです。一つは、政治的に非常にいいことだと思ふのです。アジアの情勢の中で、あるいは世界情勢の中で、南北がそうやって自主的に平和統一が成功すれば。その前に朴政権を打ち倒さなければできない。それを前提に言いますけれども、それができれば違ったアジアの政治のありようというものができるわけです。例えば、ソビエトと、中国と、日本と、アメリカ合衆国がアジアを牛耳っている形ではなくて、また日本も、ソビエトとか、中国とか、アメリカ合衆国に囲まれてニツチもサツチもいなくなつてくる事実と違う形のありようを南北平和統一ができれば、それはできるだろうと私は考えていますね。

それから戦争を防止する大きな意味ですね。ご承知のように、戦争があそこで起こるだろうという予測が何度もたてられているし、この間の板門店の事件を見てもわかりますね。緊張緩和は、アメリカ軍が出て行つて、そして南北の自主的平和統一ができれば可能になつてくるし、日本の防衛問題もよくなるでしょう。軍事的関係を我々はよく考えてみたらいいですね。そうすれば全然違った方向にアジアの未来、日本の未来を考えるとできるだろう。今度は日本が韓国を経済侵略するという形でない日本を我々は構想することができるだろう。今度



は韓国経済が日本だけに依存するそんな変な形でない経済ができあがって、こちらですつきりする形ができあがってくるのではないかと思います。それからもうひとつ、いろんな意味があるだろうけれども、思想的に私達に対して重大な意味を孕むだろうと思うのです。つまり、異なった思想を持っている人達が、もし自主的に平和統一をすることが可能ならば、これは全人類にとって最初の第一歩だと思ふのです。そういうことは誰もやったことがない。つまり北の思想と南の思想は違うじゃないか。今の朴のことを言っているのではなくて、朴を打ち倒した後の場合でも、やっぱり違った形ができあがるのではないかと思うのです。その違った二つのものが自主的に統



一されることによつて、北の方は平等を達成しようとしていますね。つまり人間の暮らしの平等というものを北は実現する社会ですよ。それに対して、南は何も実現していないけれども、南のほうはただ必死に自由という問題を考えていますね。抑圧された人々の自由を必死に考えようとしていますね。経済的自由と精神的自由の問題、南においてキリスト教が非常に強い力を持っていますから、それを考えようとする人達の力は非常に強いです。そうすると、平等と自由が朝鮮の地にあつて、お互いがあるということ自体大きな問題です。それが結合することとは大へんなことですよ。僕は、自由と平等が結合して、それで自由と平等と独立ができましたなんて漫画みたい

なこと言うつもりは全然ないけれど、そうではなくて、おそろくいろんな矛盾があると思うのです。その互いの対立した矛盾というものを平和的、自主的に解決することによって、違う道ができて行くだろうと期待したいのですよ。やっぱり人間というものはお互いに挑戦し合わないだめだと思うのですよ。平等な立場で挑戦するところが一番必要だと思うのです。

僕はアメリカ合衆国が一番生き生きしている時代というのは、やっぱり挑戦し合っている時代だと思うのです。どういう挑戦し合っている時代かという点、アメリカ合衆国の人々の考え方の中に二つの対立したものがあると思うのですね。それは一つは何かという点、あの人達は非常に現実的な考え方をする人でしょう。と同時にそれを超越して、ものすごく専権主義というのかな、例えば人権というものはあるものだと怒鳴るような思想ですね。人権はあるのかなのか実は論証不可能ですね、考えてみたら。人間は平等であることも論証はできませんよ。と同時に平等でないという論証もできません。どちらに賭けるかということになりますと、一番初めに言いましたように、これは天から与えられた俺の信念だと言うより仕方ないでしょう。そういうものを持って、それと先ほど言った現実的な支配力というのが挑戦し合って、ぶつか

り合う時にアメリカの思想というのは一番いい時期だと私は思うのです。アメリカが一番混乱している時期が一番いい時期だと思うのです。だから、アメリカがベトナム戦争でワーツと混乱した時代が最近のアメリカでは一番いい時代ですね。いまはもう墮落していますよ。治まってしまうばもうだめですね。私はそういう感じですが。だからお互いに自由と平等といろんな矛盾したものを持っていきますよ。それが互いに矛盾しながら喧嘩しながら、対立しながら、同時に共存している状態がもしできれば、これは非常に素晴らしいことだと私は思います。日本の社会でもこういうことがもつとあつたらいいと思います。それにはまず、平等な場を作る必要があると思います。平等な場において我々がそれをやることができれば非常にいいのじゃないかと私は思うのです。そういうことを考えて、南北の自主的平和統一をひとつ考えていただきたいと思ひます。

経済侵略のかたち

今度は、韓国に対する経済侵略の問題が非常に言われているので我々全部の問題なので最後に申し上げておきたいと思うのです。こういうことだけ注意していただきたいと思うのです。それは何かと言いますと、そういう

ところへ進出していく時の日本の形があるということ
です。これをちよつと考えていただきたいと思うのです。
日本は「西洋に追いつけ、追い越せ」でずっときた社会
だから、一番日本の主流になる人達というのはいつでも
西洋思考型なのです。例えば、三井物産でも三菱でもい
いけど、一番できる人は大体欧米へ行くでしょう。ニュ
ーヨーク支店とかロンドンへ行くと偉くなるわけです。
そして、それがインドネシアなどに派遣されたりすると
あまり偉くないわけです。外務省がそうです。そういう
型が日本の社会にあると思うのです。そうするとどうな
るかと言いますと、日本の企業の場合でも、そういうこ
とが行なわれて、一番初めにアジアの方へ進出して行く
企業というのは名もない企業です。それからインチキ企
業ですね。それから変な奴が出て来ます。小佐野(賢
治)だとか兎玉(誉士夫)だとか田中清玄だとか、笹川
良一だとか矢次(一夫)とかそういう人達がまず出ます。
そういう時はどうなっているのか私達はまず知らないで
す。必ず先にそういう人達が進出します。それがまず行
なわれているということに注意していただきましょう。
そういう場合、つまり早い話、華北に対して矢次という
のがまず行って、それから兎玉が出て行くわけですね。
それからインドネシアの場合も大体田中清玄というよう

な人が出て行くでしょう。フィリピン、アラブの場合も
そうですね。現にいま南太平洋は誰が出て行っているか
というと、笹川良一ですね。皆、右翼みたいな奴ばかり
です。いわゆるエスタブリッシュメントといわれる人達、
東大出て出世する人達というのは欧米ばかりです。そう
いう人達がつくりあげる三菱とかいうような所は大体欧
米を見ているわけです。初めに企業として進出して行く
人達は、日本から見ると札付きの変な人達。そういう人
達が出て行って、そして結託して小さな企業が出て行く
わけです。そして連中が現地の政權と大体手を組む形を
つくりあげると、そこへ必ず顔を出すのが岸信介ですね。
一番初めに地慣らししたところへ必ず顔を出します。見
ていたらおもしろいですね。岸信介が現われて大体地慣
らしが完了したところへ乗り込んでくるのが三菱です。
韓国の場合でも、三菱が本格的にやりだしたのはここ数
年です。僕はいつも笑い話に言うのだけれども、三菱が
乗り出した時は全てが始まり、全てが終わるわけですね。
韓国の経済侵略もここ数年間で非常に激しくなっていま
すね。大体本格的に三菱がやりだしてからです。最近、
インドネシアへも三菱が乗り出して来ました。だからこ
のようにして、日本で一番の基幹産業は一番後から乗り
込むわけです。つまり非常に安全なわけですね。今まで

に欧米思考型だったことと、非常に安全であるということ。例えば、非常におもしろいのは、石油ショックが起った時、皆あわてふためいたわけ、そんな時にサウジアラビアの王様とかと顔をつないでいるのが田中清玄でしょう。そこで適当にコミッションとつたでしょうね。おそらく誰かに会わせてやるということ。インドネシアも然り、フィリピンも然り、全部そうですよ。それから大企業が乗り込むわけですね。そして大企業が引き継ぐ、これが今までの大体の型ですね。現に、南太平洋にパプア・ニューギニアというのがあります。日本軍が非常に苦しんだところです。そのの総理大臣の名前がマイケル・ソマーリ。笹川良一が十年も手なずけることをやっています。私達が知らない間に全部やっています。で、最近になって三井、三菱が乗り込んで行っではじめましたね。で、笹川良一さんがあのトンガの相撲取り連れて来た。ものすごく頭がいいと思うのです。最初、トンガのお嬢さん達連れて来たでしょう。皆、黒い、黒いお嬢さん来た、来たといワイイ言った。そう言ってるうちに相撲だ、相撲だ、番付け出来ました、と言っているうちに食い込んで行くわけですね。相撲というのは日本の右翼の温床みたいなところだから、そこでくっつくでしょう。全部そこでこういうようにして話が進行して行くこ

とが現に行なわれていることです。パプア・ニューギニアも三井、三菱が全部進出することが行なわれています。そういう型が我々の中にあることを忘れてはいけません。思うのです。アフリカもそうです。いま、三井とか三菱が進出していますけれども、一番最初のパイオニアみたいな役割りを果たしたのが名もない企業であり、そこで一獲千金を夢見る人達がやるわけですね。後ででっかいのが乗り込んで来るわけです。開拓して失敗したところへは行かないけれど、成功したところへ乗り込んで行くという型ではじまっておることをこれから注意してもらったらいと思うのです。我々の方は、これに対してどういう手段をするかという問題はぜひお考え下さい。我々自身が三菱の一環であることも事実です。日本の企業の特徴について喋ったらいいのだが、時間もあまりないので今度の機会にしたいと思います。日本の企業の特徴はものすごくあって、それがひとついまの経済侵略に絡んでいることは事実としてあります。だからここで質問でも受けた時に機会があれば話したいと思えます。大体これで私の下手糞な話は終わります。

“法人資本主義”——日本の経済、国づくり

結論として言えば、好奇心を持っていただきたい。そ

していろんなものを取り入れることが必要だと思うのです。例えば、今までの日本と朝鮮の関係において、接近方法で欠けていたものが幾つかあると思うのです。ひとつは、個人的体験について語り合うことが非常に大切であったわけですね。在日朝鮮人の問題についてはそればかりでなく、先ほど言った金達寿さんのような本を読んでもっと日常的に見て下さい。それは非常におもしろいと思うのですよ。それから、歴史的な方法でいろんなものを見て下さい。そして今度は文化的な方法。例えば、こういうことだったら朝鮮人はどういうふうに考えるだろうかということをお考えになつていただきたいと思います。先ほど歌の違いだとかと話をしましたね。それから、も



うひとつは南北統一という大きな政治問題について、我々にとつてどういう意味があるのかということを考えていたいただきたいと思ひます。いろんなことを考えたほうがいいのです。

こういう話をしていたら限りがないのですけれども、日本の場合、いまの経済機構の問題といたつたらいろんな本があるからそれを読んでもらつたらいいと思うので僕は別の話をしようと思ひます。

僕はたいへんおもしろいと思うのは僕は若い奴を教えているでしょう、そうすると若い奴は将来サラリーマン以外に考えられないつていうこと、それがまず第一。そして会社が永遠に存在しているものだという認識にとら



われていますね。会社以外の就職の可能性を考えたことがないですね。何か言うと「何と言っても就職しなければなりませんからね」と言いますね全部。そして、どうして会社だけが全日本を覆ってしまったのか、と感じが私はしますね。だから会社というものを中心にしてこの日本の資本主義が動いて来たと言えますね。ことに戦後はそうですね。まあ、僕が名付けて「法人資本主義」と呼んだのですね。これを経済学者も使い出して驚いたけれども、「法人資本主義」というのと「企業グループ」というのがあるでしょう。企業集団、これはやっぱり今日の日本を動かしていますね。大きな話をしますと大体そういう形で動いてくるのです。で、資本主義の発達の歴史とは、いろんな資本主義の発展段階でブルジョアジ¹が出てくるのですけれども、それはいろんなものを収奪して、資本をまず獲得して、それが出て来てできあがるわけです。その収奪の過程とは、イギリスの産業革命の中で農民を収奪して出て来たとかいろいろ言われるけれども、もうひとつの収奪の原因はインドを侵略したことです。お子さんの世界史の教科書を見なさい。おもしろいですよ。産業革命とはどうして起こったかを書いてあるでしょう。たいてい農民のエンクロージユア運動だとかゴチャゴチャ書いてあって、それによって産業革

命が起こったと書いてあります。インドを侵略し、収奪したことによって起こったと決して書いてないです。どだいものすごくおもしろい本だと思えますね。我々の教科書は。お子様にそういう質問してごらんください。そして農民のエンクロージユア運動とかと答えるよ。そんなアホかということですよ。まずインドを侵略し、収奪したことです。そこでまず原始的蓄積を行なって金持ちをつくりあげたわけですね。今までの貴族政権に対して、金持ちができあがってそれでブルジョアが興起して貴族と対立して、そしてフランス革命が起こって王様の首までチョン切ったということは皆さん知っていることですね。つまりこういうことだったと思うのです。

金持ち、A、B、C、Dがありますね。これ自分が金儲けするために会社をつくって運営したとします。そこで資金をA、B、C、Dと出したとしますね。これが会社です。会社に利益が上がると取り分がありますね。そこで金持ちにそれぞれもどってきますね。近代企業というのは、ここにいろいろ出てくると思うけれども、根本的にはこういうことと同じですね。そこで労働者は何かと言うと、ここにE、F、G、Hがあつて、この連中は何も出すものがない。お金がないから肉体を売るわけですね。労働力を売るわけです。そして儲かった分のわけ

まえを少し貰うわけですね。あくまでも出発点は金持ちのほうですね。これが資本主義の形です。

日本の場合は、どうも違うのじゃないかと気がするのです。何故かと言いますと、日本の歴史を喋ると限りがないですけれども、先ほど言った第三世界の国であったということをおい出して下さい。第三世界の特徵は、先進国に追いつけ、追い越せでしょう。そこで一番初めにするのは何かというとまず政府をつくります。他に何もなくても政府だけ存在しますよ。国家というのは妙なもの、ある日国家つくったってしょうがないでしょう。

例えば、国家をつくるということをお考えになつたことありますか。「千里山国」をどうやってつくるかという、まずどこかに事務所設けて政府をつくらないといけないでしょう。お互いに承認し合うって奇妙なことから始まるわけだけれども、「千里国」と「豊中国」と互いに国家として認め合う。その国家を作る場合にいろんなものがあるのです。まず政府をつくる。法律をつくる。法律をつくったって誰も守らなければ困るから、そこで軍隊と警察をつくるわけです。ひとつは国民に法律を強制させるため。もうひとつは外敵に入つてこられ困るから軍隊と警察を一緒につくる。これをつくらないとだめですね。その次につくるのが工業です。近代

国家だから、工業をつくらないとだめですね。

実利の日本の大学、"スクール"は

日本の国は、江藤淳がNHKでやっているでしょう。あんなくだらないもの見ているわけだけども。あれに出てくることで触れられてないことたくさんあります。僕は明治の奴等は偉い悪い奴だと本当に思うのです。伊藤博文にしろ、何にしろ。それは何故かと言いますと、人間を養成しないとだめでしょう。日本は特殊であることをあまり言いたくないけれど、考えてみるとここにいらつしゃる人のご主人、皆、会社に勤めていらつしゃるでしょう。文科系の方で、技術者は別です。サラリーマンの方で「大学どこ出ましたか」と言うとならば経済学部でしょう。政経でもいいけれど、大体法経出ているでしょう。で、「お子さんどこへ行きますか」と聞くと、早稲田の政経とか、関大の法学部、経済学部行くとか、将来サラリーマンになるために大体そうでしょう。例えば、関大の日本文学科へ行きたいと言ったら、大体の親は反対するでしょう。「それやったら食われへんのとちがうか、せいせい高校の教師やで、予備校の教師が関の山やで」って感じで（笑い）。大体皆、反対するでしょう。小説家になりたいと言ったらもつてのほかやつてことにな

るでしょうね。いま、日本の場合全部それでしよう。我々全世界そうだと思つていよう。全世界そうだと思つているとおかしな話で、例えば、アメリカ外務省の役人つかまえて「おまえ大学で何してたんだ」と言いますと、「イングリッシユ」と言います。イングリッシユつてよく考えたら国文科ですね。彼から言うとは、日本の国文科出て、例えば三菱に勤めている人ないでしょう。「おまえ何やったか」と聞いて、「フィロソフィ」つて奴がいるよ。ゼネラルエレクトロニクにいるよ。例えば、東芝に「私哲学やりました」と言う奴いないでしょう。大体、全員が政経だと言いますよ。それが全世界そうだと思つたら大間違いなのです。逆なのです。日本だけ特殊なのです。何故そうなったのか興味あるでしょう。何でも好奇心持つたらいいですよ。何故そうなったかということ、いっぺんも皆考えていないですね。大学へ行きたいという予備校生でも皆わからないですね。

何故そうなったかと言うと簡単ですよ。追い越せ、追い抜きの第三世界の唯一の国だったことです。百年前に革命して独立した国は我国一つしかありません。そこでやったことは西洋に追い越せ、追い抜けます。てっとり早く西洋をものにするということでしょうか。近代化をまずものにするということ念頭において下さい。

そこから出て来たのですよ。学生が全部政経ということ、理科系もそうでしょう。

理科系は皆、工学部受けるでしょう。物理学やると言つたら反対するでしょう。そんなもの湯川秀樹じゃあるまいし、できないということにたいていなるでしょう。工学部へ行きなさい。船舶工学でもやりなさい。船舶も今頃だめだから飛行機のほうがいいという話になるのじゃない？ 日本の大学の特徴は全部実利と結びついているでしょう。日本の大学は、全部煎じ詰めて言えば実利しかないです。

日本の大学生は勉強しなさいです。これは世界に惨たる事実です。タクシーの運転手が喋っていたよ。「日本つておもしろい国ですねお客さん。大学生になると皆遊びますね。高校生つていうのは勉強するの、あれどうしてですか」と言っていたよ。考えたらおかしな話で、他の国は、大体、大学生になったら勉強するよ。高校生は皆遊んでいるよ。日本は高校生は必死になって勉強して、大学生になったら、のほほんと遊ぶでしょう。不思議な現象ですね。不思議なことはたくさんありますよ。不思議なことは、不思議なこととして考えたらいいですよ。そうすると、何故こんなになつたかということが絡んでくるでしょう。

西洋の大学の起源と日本の大学の起源というのは違うのです。西洋の大学は自然発生的にできた大学です。先程の資本主義も同じです。歴史の過程で、日本は追い越せ、追い抜けたからずいぶん無理してきているわけですから、そこで違ってくるわけです。西洋の大学の場合は伝統があるのです。西洋の学問の伝統は何かというと、日常生活とかけ離れたものをやっているということです。英語で学校のこと「スクール」と言うでしょう。「スクール」の語源は何かと言うと、「スコール」と言うのです。これは何かと言うと「暇」と言うことです。で、「スクール」とは何かと言うと、「暇つぶし」と言うことです。学校は暇つぶしするところですよ。学者は英語で「スカラール」と言うでしょう。つまり暇つぶしする人。これが語源です。これは絶対そうなのです。つまりレジヤ―って言うことです。何故かと言うと奴隷制社会ですから、働くのは皆奴隷がやっていたわけです。市民は遊んでいたのです。朝から晩まで遊んでいると生活の心配がないでしょう。生活の心配がないから、世界は何で成っているのかとか、万物は流れるなどくだらないことを考えるわけですね。学問の名前、皆ギリシヤから来たのだから、それは哲学になったりするのである。そういうことをぶらぶらと説いて回ったのがソクラテスですよ。ソ

クラテスを理解するのに、京都大学教授の田中美知太郎先生の本なんか読んだらだめですよ。一番の方法は、右翼の男で赤尾敏というのがおるでしょう。一生懸命演説している男、あれだと思ふね僕は。東京銀座へ行ったら毎日やっていますよ。僕も時々やるけど、その隣りでしんきくさくさしてしようがない。誰も聞かないのに一生懸命やるから。僕は赤尾敏みたいな人だったと思うのです。強烈なこと一生懸命言つてたわけですね。そう理解したらいと思ひます。大学教授に理解できる存在じゃないと思ひます。とにかくそういう連中がやったわけですね。すると、そこでは労働と関係なくて、頭の中で世界の根本になるものを考える。それが学問であるというように出てきます。それがずっと学問の原動なのです。ずっとね。それは何かと言うと、物理学、哲学、数学こういうものが学問なわけです。すると法律とか経済なんていうのは学問と違うわけです。経済というのは英語で「エコノミスト」と言ひます。その語源は家ですよ。家政から出た言葉で、家政なんて学問じゃないです。その伝統がずっとあるわけで、近代社会になるとそういうことでは非常に困るので、はじめて法律だとか経済とかが必要になつてくるわけです。産業革命したり、機関車作つたりしないといけないから。そうすると、そこで考え方が変

るわけで、そういうものが学問として見なされるわけです。ところがヨーロッパではなかなか見なさないです。そういうものは必要なだけどもなかなか見なさない。総合大学といって、工学部とかそういうものを一番に学問として認める学校を作ったのはどこかって言うと、アメリカ合衆国です。これは想像できるでしょう。二番目にそれを取り入れたのが日本です。ヨーロッパより先なのです。で、取り入れた原理は何かというと追い越せ、追い抜けないのです。そこで考えたのは、哲学なんかやってもしょうがない、ということでしょう。ぱっとやるためにはまず何が必要かって言うと、政府をつくることですね。明治の元勳達が一番最初につくったのが東京帝国大学の法科大学です。法学なんていうのは学問じゃないわけです。つまり人間がつくった法律だからそれは法律の続きでしょう。それをまず真ん中に据えて、哲学とか物理学なんてどうだっていいのですよ。これはいへん頭いいですよ。これのピラミッドの頂点のトップを東大の法学部として政府の一番トップを埋めました。その次に法政、早稲田、関大等法律学校がやたらにできました。

その頃、福沢諭吉の弟子がロンドンだったかに留学していて、イギリスの詩を研究していたのです。すると福

沢諭吉は激怒して、そんな暇つぶしするな、軍艦を作る術を学べ、と言ったそうです。これは端的に現わしていますよ。日本は哲学などやっている暇はないのだ。すぐにパツパとやるためには法律等をやらないといけないのだ、ということになりますね。そこまではまだ我々想像がつくけれども、明治の元勳は抜けて偉い奴、悪い奴だったと思うのは、その次につくったのが、東京帝国大学の工科大学。その時、産業も何も無いが、まず人材を作らなきゃいけないということで工科大学つくったのです。その時、医学部とか理学部とか何もつくらないです。まず軍艦を作る技術ということで工学部をつくったわけです。だから技術者だったら工学部だという伝統ができたわけですね。われわれに。で、今度は工業がないでしょう。だから工業を人為的につくらないといけない。急速につくらないといけないので、政府が創設する企業、政府と結託する工業ができます。例えば、八幡製鉄、新日本製鉄の前身は政府がつくったのですよ。あるいは三菱の前身の岩崎弥太郎が政府と結託しているのですよ。日本の産業というのは、全部大企業ですよ。日本の大企業というのは、初めから政商です。ヨーロッパの場合は、貴族階級と喧嘩しながら、王様を倒してつくったわけです。ところが日本の場合は、初めから政府と結

託して政商つていうのができたわけです。だから、ロッキードスキヤンダルもそのへんに元があるのかな。初めから政治とべつたりです。

政商の日本企業

それから、「死の商人」という言葉がありますけれども、私、日本の企業というのは「死の商人」じゃないと思いますよ。というのは、三菱は兵器産業だけれども、「死の商人」の定義は二つあるのです。一つは武器を作ることでしょう。もう一つは敵、味方がまわす売ることでしょう。日本の産業は敵に売ったこと一度もないです。いつも全部味方にしか売らないでしょう。で、味方というのは企業でしょう。つまり日本の政府にしか売らないでしょう。政府の方針に従っているからです。僕は三菱の幹部と喋って驚いたことに「私はいつでも平和を寄付してきました」と言うのですね。「日中戦争はどうだ」と言う。「あれは東洋平和のために戦いました」と言います。それはそうです。政府がそう言ったのだから。戦争を言う時に、必ず平和のために、と言うでしょう。だから「私達企業は終始一貫平和を求めました」と公言したものだ。それは何故かと言うと政府といつもくっついてい

るからでしょう。政府の方針以外のことは絶対に何も

しない。政商というのは始めから終りまでそうです。日本の企業は、全部政商です。

何故そう言ったかと言いますと、政府があつて、政策という形で企業をつくる。例えば、八幡製鉄のようにつくります。そこへ大勢働きに来るでしょう。それが経営者になったり、工員になったりして、会社というのは何かと言うと、もちろん金儲けの好きな奴もいるけど、皆食うための手段ですよ。意識として当然出て来ますよ。敗戦前というのは、要するにまだ三菱とか岩崎が儲けたりにしていますから、ここに例えば三井本家というのがあります。そして企業がある。こういう形があつて金儲けした企業が、ボカツと三井へ持つてくる。ところが財閥解体が行われたのです。で、三井がスーとなくなつて、巨大なアパートが一つ残つたわけです。今までの持主は三井の本家ですが、この持主がなくなつたわけです。誰の持主かわからないけれど皆住んでいるわけです。働いているわけです。社長は追放になつてわからなくなつてい

る。そういう連中というのは今まで部長で社長になつたという人です。で、社長の家は大きいのに、工員の家は小さくて日当たりが悪い。が、出て来る出入口は同じなのです。三菱マンとして出て来るわけですね。中に入

つたら差別されているのに、外から見たら全部三菱マン

ですから、意欲が出て来る。それが日本の企業なのです。おもしろいところなのです。これは人間の意識の問題ですね。

ここで金儲けしたらどうなるかというところ、それで食べるでしょう。ところが、このやり方だと全部還元するわけです。だから少ししか残らないので、あまり食えないでしょう。ところが全体に分配して分け合うより、全体としてどんどん増えているわけです。だから、日本みたいな貧乏国が、どうしてアメリカ合衆国の大企業に対抗できるかというところ、アメリカ合衆国は利益を分配しちゃうから少なくなる。ところが日本は還元するので雪だるまみたいに増えてくるわけです。中にいる奴はストライキもしない。何故かというところ、ストライキしたらこの家潰れるから、ここで三菱マンの意識が出てきます。そうすると、儲けた利益が雪だるまみたいに増えてきます。一人一人分配したら少ないけれど、しかし全体として持つていけば大きいのです。伊藤忠なんか、オイルショックのあと土地買ったでしょう。そして土地ころがしをして儲ける。これがずっと伸びてきて、資本主義の中心になってくる。そこで働いている奴はどうかというところ、これは工具も何もわからなくなる。定年退職で放り出されるのは皆同じこと。三菱を定年したということに対して社

会は認めてくれる。

こういうような、もとの財閥系がばらばらに存在して、これは連携したほうがいいというので連携したのが企業グループです。住友グループとか三菱グループとか、もと財閥系が連携したものです。ところがふらふらしている奴がいて、これはなかなかいいというのでこのグループへ来るわけ。ここへ入れてくれと言ってくるわけ。これは大体、三菱銀行などのメインバンクを中心にして、今度はアパート同志で手をつくすわけです。三菱がほかの三菱のなんとか会社の株を持つわけです。そうすると、これで安全なのです。大企業は全部。だから会社の社長自身は○・何パーセントしか株を持っていないわけです。アメリカの経営者と全然違ってきます。メインバンクの三菱銀行とか住友銀行、これ自体が持ちますでしょう。そうすると企業グループというのが全部連携できて、日本を覆っている。これは地理的に覆うばかりじゃなくて、政治、経済もです。三菱グループ、住友グループ、安宅グループとかがあります。これらがみんな動いているわけです。日本の企業の特徴というのは、責任がないのです。お互いに全部がどこで政策提携しているとかいうわけじゃないから、自由方針なのです。ある程度スポイルします。だめだったら切り捨てるわけです。現在の価値

の多様性に順応しているわけです。われわれの価値がい
ろいろとわかれていくから、それでこういうようにして
動いているわけです。

アメリカ合衆国で他国籍企業が問題になっております。
あちこちにたこの足みたいのばしている他国籍企業で
すね。これが全世界を制覇している。その日本版のよ
うな企業グループが日本中を制覇している。その企業グ
ループが韓国へ足を伸ばす。はじめに出て来る兎玉とか
いう時にはたいしたことなくて、小さな企業です。その
うちに、これがばーつと出るといことは、日本全体に
連関してくるわけです。そうすると、そこで僕らの問題
が出てくると思います。その一環の中にわれわれ入っ
ています。勤めようと勤めまいと入っています。それを
忘れてはいけないと思います。そういうことを少し分析
してみたいです。それでどうするかは、お一人ずつお考
え下さい。では終わります。

(拍手)
(おだ まこと・作家)

●図書館にある小田実さんの書籍●

1 戦争か、平和か…「9月11日」以後の世界を考える 大月書店

2002 (Sono-sorno sosyo)

- 2 「弔辞」集成…鎮魂の賦 小田実他著 新装改訂版 青銅社、1986
- 3 90年代―これは「人間の国」かなど 筑摩書房、2002
(小田実評論撰/小田実著 4)
- 4 80年代―「われわれ」の哲学など 筑摩書房、2001
(小田実評論撰/小田実著 3)
- 5 小田実「タダの人」の思想と文学/黒古一夫著 勉誠出版、2002 (遊学叢書 22)
- 6 小田実全小説 第三書館、1993
- 7 小田実評論撰 2 筑摩書房、2001
- 8 織田作之助全集/小田実解説 5 講談社、1970
- 9 定本織田作之助全集/小田実解説 第5巻 第3版 文泉堂出版、1976 (日本文学全集・選集叢刊 第6次)
- 10 D(ディー) 中央公論社、1985
- 11 「鎖国」の文学 講談社、1975
- 12 方島 講談社、1973
- 13 平和をつくる原理 小田実著 講談社、1966
- 14 日本を考える 河出書房新社、1963
- 15 小田実小説世界を歩く 漱石からジョン・オカダまで 河出書房新社、1980
- 16 人びとはみんな同行者 人びとのなかで自分をつかむ 青春出版社、1978
- 17 タコを揚げる…ある私小説 筑摩書房、1978
- 18 地図をつくる旅 文藝春秋、1976
- 19 泥の世界 河出書房新社、1965
- 20 戦後を拓く思想 講談社、1965
- 21 アメリカ 長篇小説 河出書房新社、1962
- 22 何でも見てやろう 河出書房新社、1961
- 23 わが人生の時 河出書房、1956

- 24 小田実評論撰／小田実著 1 筑摩書房、2000
- 25 川端康成文学賞全作品 2 新潮社、1999
- 26 現代日本文学大系 84 筑摩書房、1972
- 27 レクイエム57 弔辞大全 青銅社、1982
- 28 世界カクコト辞典 文芸春秋新社、1965
- 29 天下大乱を生きたる 潮出版社、1977
- 30 小田実全小説 別巻 第三書館、1992
- 31 小田実全小説〔9〕 第三書館、1992
- 32 小田実全小説〔1〕 第三書館、1992
- 33 海冥・太平洋戦争にかかわる十六の短篇 講談社、1981
- 34 小田実・武田泰淳 ほるぶ出版、1983 (日本の原爆文学 8)
- 35 文学 日本文芸家協会編 1997 講談社、1997
- 36 われわれの旅・NY・ベルリン・神戸・涪州島 岩波書店、1996 (シリーズ旅の本箱)
- 37 でもくられていあ…「人間は殺されてはならない」・「人間の国」
「人間の文明」の構築へ 筑摩書房、1996
- 38 被災の思想難死の思想 小田実著 朝日新聞社、1996
- 39 激動の世界で私が考えて来たこと 近代文芸社、1996
- 40 長崎にて…未来にかかわる 筑摩書房、1983
- 41 小田実全小説〔10〕 第三書館、1995
- 42 思想 鶴見俊輔著 2 筑摩書房、1975 (鶴見俊輔著作集／鶴見俊輔著 3)
- 43 思想 鶴見俊輔著 1 筑摩書房、1975 (鶴見俊輔著作集／鶴見俊輔著 2)
- 44 日本の知識人 筑摩書房、1969 (筑摩叢書 155)
- 45 小田実全小説〔8〕 第三書館、1995
- 46 「ベ平連」・回顧録でない回顧 小田実著 第三書館、1999
- 47 義務としての旅 岩波書店、1967 (岩波新書 青655)
- 48 国家と幻想 文学的立場編 政法大学出版局、1968
- 49 現代人論 小田実編 筑摩書房、1969 (戦後日本思想大系 16)
- 50 アメリカ感情旅行 安岡章太郎〔著〕 講談社、1971 (安岡章太郎全集／安岡章太郎〔著〕 7)
- 51 月報 河出書房新社 1970 (小田実全仕事)
- 52 評論4 十年が経った、そして… 河出書房新社、1971 (小田実全仕事 10)
- 53 評論3 人間から人間へ 河出書房新社、1970 (小田実全仕事 9)
- 54 評論2 歩き、話し、考え、書き… 河出書房新社、1970 (小田実全仕事 8)
- 55 評論1 ここから出発して… 河出書房新社、1970 (小田実全仕事 7)
- 56 何でも見てやろう 終結のなかの発端 河出書房新社、1971 (小田実全仕事 6)
- 57 円いひびびい 河出書房新社、1978 (小田実全仕事 5の2)
- 58 冷え物 羽なければ 河出書房新社、1975 (小田実全仕事 5の1)
- 59 現代史 全 河出書房新社、1971 (小田実全仕事 4)
- 60 大地と星輝く天の子 ある登攀 折れた剣 河出書房新社、1971 (小田実全仕事 3)
- 61 アメリカ 泥の世界 河出書房新社、1970 (小田実全仕事 2)
- 62 明後日の手記 わが人生の時 河出書房新社、1970 (小田実全仕事 1)
- 63 小田実 講談社、1974 (現代の文学 29)

- 64 花田清輝・杉浦明平・開高健・小田実集 筑摩書房、1972 (現代日本文学大系 84)
- 65 小田実・柴田翔集 筑摩書房、1979 (筑摩現代文学大系 89)
- 66 新しい世界の文学 猪野謙二「ほか」編 岩波書店、1976 (岩波講座文学／猪野謙二「ほか」編 8表現の方法―5)
- 67 小田実の反戦読本／小田実著 第三書館編集部編・注 第三書館、1982
- 68 市民運動とは何か ベ平連の思想 徳間書店、1968
- 69 小田実全小説〔7〕第三書館、1994
- 70 状況と原理 筑摩書房、1982
- 71 小田実全小説〔11〕第三書館、1993
- 72 「難死」の思想 岩波書店、1991 (同時代ライブラリー 89) (所蔵情報がありません)
- 73 批判と夢と参加 市民・文学・世界 小田実文集 筑摩書房、1989
- 74 大岡昇平の世界 大江健三郎「ほか」著 岩波書店、1989
- 75 西ベルリンで見たこと日本で考えたこと 毎日新聞社、1988
- 76 「虚業」の大阪が「虚像」の日本をつくった 経林書房、1988 (所蔵情報がありません)
- 77 中国体感大観 筑摩書房、1987
- 78 壁を破る 世界のなかの体験と思想 中央公論社、1964
- 79 終結のなかの発端 世界を歩く 河出書房新社、1969
- 80 レバノン侵略とイスラエル 国際民衆法廷・東京1983 三友社出版、1985
- 81 ソンミンミライ第四地区における虐殺とその波紋 小田実訳 草思社、1976

- 82 毛沢東 岩波書店、1984 (20世紀思想家文庫 15)
- 83 「ベトナム以後」を歩く 岩波書店、1984 (岩波新書黄版 253)
- 84 基底にあるもの 筑摩書房、1980
- 85 天下大乱を行く イラン・アラブ1979〜1980 集英社、1980
- 86 死者にこだわる 筑摩書房、1979 (所蔵情報がありません)
- 87 世界が語りかける 1977-1979 集英社、1979
- 88 世界カタコト辞典 文芸春秋、1979 (文春文庫)
- 89 旅は道連れ、世は情け 旅人の記録 角川書店、1978
- 90 世直しの倫理と論理 下 岩波書店、1979 (岩波新書C 46)
- 91 私と天皇 筑摩書房、1980
- 92 地図をつくる旅 文芸春秋、1977
- 93 状況から 岩波書店、1975
- 94 世直しの倫理と論理 上 岩波書店、1979 (岩波新書C 45)
- 95 「生きつづける」ということ 筑摩書房、1979



近代日本文学史を考える（一）

—— 文芸編集者の回想を手がかりに

吉田 永宏

はじめに

近代・現代の文学界に於いて、文芸雑誌の編集者、新聞社の文化部・文芸担当記者、出版社の文芸出版担当編集者の果たした役割は極めて大きなものである。これら文芸編集者——就中その組織或いは集団の中心的存在であった者——を、わたしはへ文壇・文学界の現場監督、梶取り役と位置付け、潜かにそう呼んでいる。

無論、文芸編集者の全てがそのような大きな存在であったわけでは決していない。例えば、松本清張の短編小説「証明」（『オール読物』一九六九年九月号）には、女主

人公の夫・信夫（作家志望の青年で、ために会社づとめを辞めてしまった人物）が原稿を持ち込む相手としての編集者について、次のように描かれている。へ彼は三つの文芸雑誌の編集部に原稿を持ちこんだり、持ち回ったりしたが、いい返事を聞かされなかった。彼の作品は著にも棒にもかからぬというのではなく、水準近くまで行っていたから、どこの編集部でも預かってくれて叮嚀に読んでくれた。しかし、一週間か十日して速達をもらい、編集部に出頭してみると、待たされている応接間に彼の原稿を抱えた若い部員が入ってきて、必ず不満を述べるのだった。／信夫は編集部員の指摘した作品の欠点——

心理描写の不自然さや、プロットの平凡さ、文章の拙劣さを承認することもあったが、ほとんどは承服しかねた。しかし、それで論争すると、相手が機嫌を悪くして、雑誌社への出入りも止りそうなので、止むなく、というよりも卑屈に賛成して書直しのため原稿を持ち帰った。さして有能でもない信夫は編集者の意に迎えられるために、非常な苦勞をする。へ彼はいわれた欠陥の書直しを試みるが、相手の意見に従いかねるときなど、ひどく苦しんだ。自分ではこれでいいと思っているのだからその手直しはかえって改悪になる。こうなると編集者と絶縁しても良心を守るか、自分を空しゅうして縁をつなぎ、やがて文壇に出る機会を狙うかしなかつた。信夫は後者を択んだ。彼には編集者と正面から対決する勇氣はとてもなかつた。彼の書直しの部分は、ただ編集者の意に沿うようにのみ心がけられ、自分が書いているような気が少しもしなかつた。だが、書直しして持つて行つても合格するわけではなかつた。その書直しの部分の欠点がさらに指摘された。三度も四度もそういう作業をさせられた。しまいには、訂正が重なつたため全体の筋が不自然になり、調子も崩れて、どうにも收拾がつかなくなつて没にされた。信夫の友人たちは編集者の意見をではなく、信夫の意見を支持してくれるのではあるが、それ

は現実には意味をなさない。へ友人たちがどのような小説を支持しようが、編集者の承認を得なければ雑誌には一行も活字となつて現われないのである。彼の作品の運命は、彼よりも年下の一人の青年や一人の女編集者の評価に握られていた。彼らのいい草によると、「凡作を掲載することは作者の爲にもならず、雑誌の爲にもならない」のだった。当然のことながら信夫はそのような編集者の「能力」に対して批判を持つてゐる。へ一編集者に果して文学に対する正当な鑑賞力があるだろうか。少くとも文学作品を評価するからには、それだけの理解力と感受性がなければならぬ。もし、ここに偶然に職場的な配置で文芸雑誌の編集部に、文学には鈍感で無知な男や女が籍を置くとする。そして、「新人」の作品を検閲するとしたら、その結果はまことに恐るべきことになる。(略)もし、ここに新しい思想をもつた難解な小説、型破りのスタイルをもつた傑作が現われた場合、従来の小説に馴らされた彼ら常識人がよくそれを理解することができようか。まず、その原稿は厩籠に投棄されることは間違いない。「新人」の作品を採否する編集者は、評論家なみの資格を持つていなければなるまい——。その編集者も、社によつては他の部署に移つたり、地位が上がつたりして、彼の原稿の欠点を応接室で指摘する

相手は次第に若くなる。へそれに最近になるほど彼らはサラリーマン化し、文学も小説も分らず、しかも分つたような顔をして無知な指摘をした。以前には理解力がな
いと思つていた編集者のほうがはるかに鑑賞力があるこ
とが分つた。／信夫は、しかし、原稿を雑誌社に運ぶの
をやめなかつた。彼は、若い編集者の説に相変らず逆ら
うことなく、辛抱して書直しをした。彼のほうが採点者
よりも文学歴では何倍も長いのに。

長ながと紹介をしたが、無論これは松本清張の小説の
中での記述であつて、自らの能力を過信するのあまり作
家志望の夢を捨て切れず、拳句は妻との家庭生活を破滅
へと導くに至る一人の青年の悲劇の道程での記述に過ぎ
ない。わざわざわたしがこの記述を持ち出したのは、編
集者が文学界で占める位置の重要さを強調したいための
ものである。前掲「証明」の中にも書かれていた無能力
なサラリーマン化した若い編集者はいざ知らず、明治・
大正期に於ける『中央公論』の滝田樗陰や『新潮』の中
村武羅夫といった名編集者の果たした役割りの如何に大
きかつたかを強調したかつたからに他ならない。実例と
してのこの両者の存在感の大きさについてまず簡単に紹
介しておきたい。

杉森久英の記述（講談社『日本近代文学大事典』滝田

樗陰の項）によれば、『中央公論』は当初、宗教的、倫
理的色彩の強い、固苦しい雑誌で売れ行きが悪く、た
めに樗陰は時代の風潮に合わせるべく、文芸欄を拡充し、
小説を掲載するよう主張した。明治三十年代末の当時、
文壇ではちやうど自然主義文学の勃興期に当たり、人間
性の暗黒面、醜なる本性を追究する作品が多かつたので、
社主・麻田駒之助は文芸を好まず、従来の方針を維持し
ようとしたが、たまたま樗陰の熱心な主張を容れて小説
の掲載に踏み切つたところ売れ行きが良く、その都度発
行部数が伸びたので、次第に麻田は編集に口を出さなく
なつたという。殊に明治三十八年十一月の創刊二〇〇号
記念増大号は幸田露伴、泉鏡花、中村春雨、夏目漱石と
当代の人気作家を並べたために好評で、以後年四回の
「文芸付録」は文壇の桧舞台となり、へここに登場するか
どうか作家の文壇的地位を決定するといわれるほどに
なつたが、その採否はほとんど樗陰の意見によつたので、
彼は文壇作家の生殺与奪の権を握つたといつてよかつ
た（杉森久英）。樗陰は一方で新人の発掘にも力を注ぎ、
たとひ無名の作家であつても一度その才能を認めると、
たて続けに執筆の機会を与え、活躍の場を与えた。彼は
黒塗りの人力車を乗り回して作家を訪問するのを常とし
ていたが、無名作家の家の前に彼の人力車が駐まると、

幸運の訪れのように言われ、「滝田樗陰の人力車」という造語さえ生まれたという。夏目漱石、島崎藤村、徳田秋声、正宗白鳥、志賀直哉、武者小路実篤、芥川龍之介、永井荷風、谷崎潤一郎、佐藤春夫、広津和郎ら、明治末年代から大正期にかけて活躍した作家の大部分は、ほとんど樗陰によって発掘或いは育成されたと言ってもよい程である。へただし彼は愛憎の念が強く、自分の好尚に合わない作家は拒否したので、彼に認められなかったものは文壇に存在することを許されなかったといつてもいいすぎではない。そういう意味では、彼は文壇に独裁的な権力をふるったので、その横暴を憎むものもすくなくなかった。(杉森久英) という。

樗陰ほどではなかったにしても中村武羅夫の場合も名編集者の名をほしいままにした。小栗風葉の縁で新潮社社長・佐藤義亮に近づき『新潮』の編集を手伝うことになり、明治四十一年一月号から『新潮』に作家の訪問記「第一印象録」を連載(筆名・王春嶺)、夏目漱石、島村抱月、田山花袋、国木田独步、島崎藤村、正宗白鳥など当時の大家および新進作家を訪ねてその初対面の印象を書き続け、一年間にわたった。また、へ独歩の死を悼み、『新潮』(明治四十一年)七月号を追悼の「国木田独歩」号として独力で編集。名編集者として認められた。『新

潮』の文壇的な地位は、これを契機に確立したといつてもよい。大正のはじめごろから『新潮』編集の中心にあつて斬新な企画力で『新潮』を一流の文芸雑誌に押しあげた。(前掲『日本近代文学大事典』中村武羅夫の項・和田芳恵) という。心境小説(私小説)ばかりが幅をきかせている文学界の現情を嘆き、トルストイ「アンナ・カレーニナ」の如き本格小説(中村の造語)出でよと叫んだ「本格小説と心境小説」(『新小説』大正十三年一月、原題「文学者と社会意識——本格小説と心境小説と」)に於ける中村武羅夫などはまさに文芸誌編集長の面目躍如たるものがあつた。わたしの言う文壇の梶取り役、文学界の現場監督の意識が中村武羅夫自身に強く存在していたに相違あるまい。

まずは、すぐれた文芸編集者の回想録を取り上げ、そこに込められた文学史上の問題点を追体験的に考えてみたいというのが、ここでのわたしの意図である。

一 木村徳三「文芸編集者 その登音」

文芸編集者・木村徳三

木村徳三については、TBS・ブリタニカ刊『文芸編集者 その登音』(一九八二年六月二十一日)の奥付には、へ一九二一(明治四十四年)、京都に生れる。旧三高、



東京大学文学部仏文科卒業。改造社、養徳社を経て鎌倉文庫「人間」編集長。その後日本教育テレビ（現テレビ朝日）、博報堂嘱託、三笠書房副社長などを歴任。現在（株）アサ・フォーチュネット代表と、その略歴が簡単に記されている（ついでに言う、前掲の講談社版『日本近代文学大事典』の人名の部にも「木村徳三」の項目はなく、折角のすぐれた事典であるのに、とわたしは残念に思う）。

木村徳三が改造社に入社したのは昭和十二年六月、大学を卒業した翌年の春のことである。改造社が新萬葉集を刊行するに当たって編集員を公募したのに応じたものであった。なにしろ当時は二・二六事件がその前年に勃

発したような、不景気のどん底の就職難時代で、仏文出身の就職先などありつこないのが常識だったという。有名会社に入れたなどというのは異例のことで、前々年、前年とそれぞれ仏文科の先輩が一人ずつ改造社に入社したと聞き、大いに羨望した木村徳三は無理を承知で応募し、思いがけずも採用される。初めは出版部に配属され、翌昭和十三年、「文藝」主任（事実上の編集長）の小川五郎（筆名・高杉一郎）からの誘いを承諾して二月中旬から「文藝」編集部に移り、雑誌編集者生活が始まった。この書の「あとがき」に、長い間私は、編集者は表面に出るものではないと思いつめていた。あくまでも縁の下の力持ち。芝居の黒子役くろこやくといってもよい。編集者の

現役時代でも、また退いてからも、そう思い続けていた。確たる見解や理由があったわけではない。ただいつのまにか思い決めていただけである。」と記されてあるが、これがこの人の編集者時代を貫いていた基本姿勢であったのである。そして、同じ「あとがき」にある、へかつて『展望』編集長時代の臼井吉見氏から直接言われたことがある。——編集者というのは、明るみに出していないことをよく知っているし、たくさん経験しているから、そういう裏話を書き記しておくべきではないか。それにはなんらかの資料的価値があるはずだ。君はそれを書いておく、ほとんど義務がある、と。」との臼井吉見の言が、この書のモティーフであった。〈資料的価値〉という臼井の語は、まさにその通りのものとわたしも確信する。

一九八〇年の夏、木村徳三は、戦後文学の証人ということで『週刊読書人』から回顧談を求められ、敗戦直後の鎌倉文庫のことや、自身が編集長であった文芸雑誌『人間』についての回顧を、インタヴューアーの近藤信行を相手に語ったことがある。その後、TBSブリタニカ出版局長常田富之助が常務小野田勇の意を体して、編集者時代の全てを書きまとめるよう勧めに来た。へ縁の下の力持ちといっても、時間の限度がある。ことに近來

文壇内でも明治生れのひとの逝去を多く見るにつけ、終戦をさかいに前後十五年間、いわば日本の未曾有の激動期に、文芸雑誌の編集者だったひとは他にそういない。たとい単なる個人的な回想にとどまろうとも、元編集者として当時のことを書き残しておいてほしい」というのがその折の常田の言であったという。小野田は鎌倉文庫時代の、常田は『人間』編集長時代の共に苦勞をした木村の昔の後輩である。このやり取りが直接のモティーフとなった。

文芸編集者・木村徳三の最大の特性は作家たちに対しておもねることをしない点にある。著名な作家に対しては作品に対する正当な評価とは別に、書き手である当の作家の人格に対する眼差しは極めて厳しいものである。容赦のない人物評価と呼んでよい。

永井荷風に対してもその例外ではない。『人間』（敗戦直後に誕生したこの雑誌と木村徳三との関りについては後で詳述する）の編集に携わって間もない敗戦直後の十一月、鎌倉文庫（久米正雄を社長として川端康成など所謂鎌倉文士たちが創立した出版社。『人間』もここから出た）で刊行企画中であつた「現代文学選」の一冊に「つゆのあとさき」を貫きたいという交渉のために中山義秀に同道した木村徳三が熱海の旅館に滞在中の永井荷

風を訪問した。初対面の永井荷風の印象を木村徳三は次のように記している。

戦時中作品の発表を禁止されたあげく、麻布靈南坂の邸宅偏奇館を空爆で焼かれ、膨大な蔵書類を失なつた後も、再三焼け出されて軋々としたこの大作家は、旅館の応接室に、浴衣に丹前を重ねた姿を見せ、思いのほか愛想よく私たちを迎えた。しかし挨拶を交してすぐ、その愛想よさが全くのお座なりなことがわかつた。仮面以外の何物でもない愛想笑いなのである。目の前の私たちをまるで人間扱いしないような、無感情な笑みが前歯が欠けた口の周囲を歪めるにすぎない。およそ人にも物にも関心がない態度で、窓外へ目をやり、思い出したように茶をすすり、自分から話しかけることは全くなかつた。

二十分程で用件だけを取りつけた中山、木村の両人が腰を上げると、待ち構えていたかのように荷風はすつと部屋を出て行つた。旅館の玄関を出るや否や中山義秀が、「おーう、木村君、酒飲もうや」と大声で怒鳴つた。酒でも飲まねば気がおさまらない、そのような空気であつたことを記した上で、更に次のように筆を続ける。

「雨瀟々」を読んだ日の感動が忘れ難い私に、その作者の警咳に接することができたという感激はほとんどいつていいほどなかつた。すでに私が何年間の編集者生活を経て、いわゆる作家ずれしてしまつたせいだつたかもしれないが、何よりも意外だつたのは、荷風氏の表情に時どき卑しさが走ることだつた。それは、狷介やミザントロビーの色でなく、奇妙な卑しさであつた。私は失望すると同時に、この日の訪問を悔いる思いさえ残つた。

訪問の目的であつた「つゆのあとさき」の承諾は得られたし、「人間」への寄稿（「人間」第二号掲載の随筆「為永春水」がそれに当たる）も約束されるという「望外の喜び」（木村徳三「同書」）があつたにもかかわらずの印象であり、人格評価である。

志賀直哉の人間性をめぐつて

作家についての木村徳三の人格評価に通底するものとして、志賀直哉に対する感情をもう一つの例として掲げておく。

奇しくも木村が改造社に入社した年に「暗夜行路」の

終章が発表され、『改造』に足かけ十六年の長きにわたって断続的に発表されたこの長編小説もようやく完結をみた。一読者としての木村もまた世評通りに無上の感銘を受け、恍惚のあまり再読、三読したという。木村にとってそれは「志賀文学の『神話的』評価の再確認」でもあった。しかしその反面、小説の神様と称される志賀直哉の文学に対する反発が底流として木村徳三の内部にあったことは否めない。

心のどこかで反発するものがあることは否めなかった。与えられた神話的評価にこだわる心のしこりとでも言おうか。こういう志賀文学に対する満足と反発とが交錯する妙に屈折した感情——もしかしたらこれは私たちの世代に共通するものであったかもしれない、それが戦後の太宰治や織田作之助のヒステリックな志賀直哉弾劾につながるのではないかとも思われるのだが……。

志賀直哉に対するこのような或る種の偶像視とそれへの反動という両側面を併せ有つ木村徳三が、シヨッキン的な事態に直面することになる。

終戦の翌年の頃、伊豆山の山腹にあった志賀邸を木村

徳三が訪問した時のことである。そこへ広津和郎が一人の青年を従えて訪ねて来た。この青年は或る出版社の二代目で、亡父の後を継いで社長となったので、広津に伴われて志賀直哉への挨拶に来たのである。そこで事件が起きた。

志賀・広津両氏の間で陽気な世間ばなしがはずむうち、突然、志賀さんは顔を青年に向けて、「君の眼は、こうこう（と首を左右に振り）なってるので、どっちを見ればいいのか、わかりやしない」／と早口で怒鳴った。青年はそうひどくはないが斜視だったのである。／思わず私は眼を伏せた。青年の顔がまともに見られなかったからだ。だからそのときの青年の表情も、ちよつと黙ってしまった広津さんの表情も知らない。（そんな志賀さんの言葉に対してあのヒューマニストの広津さんがどんな顔で受けとめたか、観察しておかなかったことが悔まれるが）数瞬会話が途切れたあと、再びもとに戻り、やがて広津さんは笑顔を残して青年とともに帰っていった。私も早々に暇を告げた。／私にとつては大きなシヨックだった。眼から鱗が落ちたと形容すればいいのであろうか。志賀直哉というひとはこんなに無神経なひとだったのか、人前でひと

を傷つけることのできる粗い神経の持主だったのか……。私は気がつかなかったが、青年の態度に何か志賀さんの気に障るふしがあったのかもしれない。が、それにしても、あの青年は恐らくは物心ついて以来自分の眼を意識し続けてきたに違いない。それを、ひともあろうにご挨拶にまかり出た初対面の大文豪の口から人前で指摘された恥ずかしさ、屈辱感を生涯忘れられないだろう。それが察しられぬほど志賀直哉という日本最高の作家は、自分本位の、他人への思いやりに欠けたひとだったのか……。私は青年に同情するとともに、志賀さんに対して今まで敬愛していた度合いだけ腹を立てた。自分の作家洞察の浅さを舌打ちしながら、ほとんど志賀さんを憎みながら、駅への坂道を下った。「志賀さんはね、腕が毛むくじやらで、それを他人に見られることをとても厭がってるんですよ」と、いつだったか宇野浩二氏が洩らした、そんなつまらないことまで思い出したりもした。(中略)／私はことさらに、大津順吉や時任謙作の正体見たり、などと大仰なことを言うつもりは毛頭ない。また、志賀文学に対する評価を貶める意向もさらさらない。しかし、私の内部で一つの偶像が落ちた音をあの数瞬に鋭く聞いたことは確かだった。

人権意識の広がってきている現在とは異なつた敗戦直後のこととは言え、志賀直哉のこの言動はやはり許されないことであり、わたしなどにとつてもショックで残念なことである。常識のある大人のしてよいことではない。しかし、考えてみると志賀直哉のこの言動は単なる軽はずみと言つたレベルのものではなく、自身の好悪の感情がそのまま善悪の価値基準を意味したところの志賀直哉らしい、如何にも志賀直哉らしい言動のように見えるのである。このような一見些細な立居振る舞いにも如何にも「白樺」派らしい本性(属性と言つてもよい)が窺えるようにわたしには思えてならないのである。明治の近代日本を形成するに力あつた初代を継いだ二代目としての「白樺」の作家たちは、武者小路実篤と志賀直哉の兩人に典型的に見られるように、「自己」に対する絶対的な信念の持主であつた。へそこ退けそこ退けお馬が通るゝ式の、そしてそれをだれでもが認める筈だといった式の「自己」の絶対化である。後の世のわれわれから見れば自己過信と呼ぶしかない程馬鹿げたものとしか見えかねない程のそれはものであつた。しかし一面、その自己の絶対化があつたればこそ、それに支えられて武者小路実篤の「お目出たき人」も志賀直哉の「和解」も書かれたのである。

わたしは志賀直哉を近代日本の代表的作家の一人として推すに憚らないが、その作品世界、特に主人公の人間性を、現在のモラルや人間性で推し測つた場合、そこにある距離感是如何ともし得ないものと思える。「大津順吉」、「或る男、其姉の死」から「和解」に至る直哉と父・直温との所謂父子の相克対立の問題も、敢て単純化して言えば、所詮息子の側からの一方的な我儘とその貫徹の挫折としか思えない体のものである。「和解」に描かれている、京都に住む主人公の許を和解の意志を持った父が妹を伴って訪れたところ、主人公が妹とだけ会つて父を頑なに拒む件りなどは、主人公の側の一方的な我儘、勝手気ままな振る舞いとしか解釈し得まい。無論それを自意識、自我、個我的絶対化と呼ぶことは可能であり、文学作品としてはそのように読んできた。

志賀直哉に即して言えば、女中「C」との結婚問題もそうである。作品「大津順吉」の「第二」に於いては、この自家の女中の千代との事件を契機に「思想」への「義理立て」が崩れて行くという大きな意味合いを有するものとして描かれている事柄である。これは、紅野敏郎作製になる年譜（紅野敏郎編『鑑賞日本現代文学⑦志賀直哉』角川書店・昭和五十六年五月三十日）の明治四十年（一九〇七）二十四歳の条に、七月、（略）この頃

より家の女中（日記中のC）を思うようになる。八月、（略）女中「C」と結婚を約し、九月、一〇月にかけて、父、祖母らと争い、父と不和深まる。／一〇月、結局「C」との結婚実現せず。」と記されている通り、実際の体験である。志賀直哉は彼女をCとして自身日記に克明に記載している。例えば、明治四十年七月九日の条に「Cを思ふ」とあり、十五日の条には、夜遂にCを呼んで話した、Cは喜むでうけがった（うけがうは承諾するの意——吉田）、Cは余の心の友となつた」とある。八月二十二日には、此夜、Cと結婚を約す。（略）C氣を失ふ、八月二十四日には、Cとの事を祖母と母に話す、更に八月二十五日の条には、祖母、志賀家にない事だと反対する。（略）父は洋行後相当な人を探すつもりなりし故いけなしいふ。（略）此日余はCと夫婦になる」と記し、八月二十六日には、祖母は如何にしてCに暇やらんかと云ふ、余怒る、八月二十七日には、祖母Cに余の部屋へ出入を禁ず」というように事實は進行し、家庭内での衝突が連日のように記されている。この日記の記載事項と「大津順吉」の「第二」に於ける作品世界との対比を前掲書に於いて紅野敏郎が丹念に行ない詳細に論究しているが、作品に形象化されたものについての評価はさて措くとして、Cとの結婚が実現不可

能となつて以後、まるで憑き物の落ちたかのようにCについでの記事が日記に見られなくなったことがわたしにはやはり気になる。有り体に言つて、青年志賀直哉は家の權威、父の權威に対する反逆に女中Cとの「結婚」を利用したに過ぎないのではなかつたらうか。Cに対する愛の存在が真実であつたにせよ、戦術といつたレベルのものではなかつたにせよ、「家」という絶対的な權威に対する反抗という大主題のための意識せざる手段でしかなかつたとは断言し得よう。大主題の前には女中Cの人格・人間性といったものは全く意味を持たず、愛情などという本来ならば結婚の障壁を突き破る要素となるべきものの存在も何程の意味役割りをも持たなかつたと言ひ得よう。このCとの結婚問題もまた志賀直哉の属性ひいては『白樺』派の作家たちの属性に他ならなかつたとわたしを見る所以である。

例証に多くの字数を費してしまつたが、木村徳三の直接目の当たりにした志賀直哉の人間性を欠いた言動も、強烈なその個性の好悪のしからしむる所のものであつて、それ以上のものでもそれ以下のものでもない、恐らくは志賀自身にとつては極めて自然な行為であり、木村徳三やそれを通じてのわたしなどの受けとめたものとは凡そ大きく距つた、次元を異とする性質のものであつたに相

違ない。

横光利一と時代相

木村徳三が雑誌編集者になつた昭和十二年頃は、「文学の神様」と称された横光利一のまさに「文学の神様」時代の最盛期であつたという。「小説の鬼」と称された宇野浩二の場合は、己れの人生の全てを小説に奉仕するという、言わば大正時代の作家姿勢の極北を形容するものであり、それに反して横光利一のそれは、時代が求める新文学の象徴を意味する輝かしい尊称であつた、というのが木村徳三の評価である。へ戦前戦後にわたる私の長い雑誌編集者経歴の中でも、横光利一という名前ほど、雑誌の創作欄のトップにふさわしかつたものは他に例がない。当時の純文学作品の発表機関としては、総合雑誌の『改造』『中央公論』『日本評論』『文藝春秋』の四誌、それと文芸雑誌の『文藝』『新潮』『文学界』の三誌には限られていて、総合雑誌に載るのは一流作家の作品ないしは一流品と評価される作品であり、文芸雑誌は中堅・新進の発表機関であり、新人の登龍門であつた。毎月何編かの小説がそれぞれの雑誌の創作欄にならぶのだが、その組み合わせや目次の配列順序は、力量、盛名度、出来栄え、それに編集部志向などが反映するだけに、

それについて作家たちはたいへん敏感であった。その上で木村徳三は、〈新感覚以来横光、川端と絶えず併称されていても、川端康成の名は文芸雑誌ならともかく、総合雑誌では横光利一の輝きには到底及ばなかった〉と証言する。あれ程の絶対的にして緊密な人間関係を川端康成との間に有していた木村の現場にいてのそれは実感に基づくものでもあったろう。

場面は敗戦後の文学界に移る。二年ぶりに横光家を訪れた木村徳三は、余りにも戦前とは打って変わった空気に愕然とさせられた。横光家はまるで空家のように森閑として客もいなかったのである。かつて出入りしていた人びとも戦争にとられたり疎開先から帰っていなかったりで減ってしまったのは当然だとしても、変わりようがひどすぎた。その後も、木村がいつ訪問しても客はなかった。

戦争末期の横光さんの国粹主義的傾向に対する批判の集中的あらわれだった。戦前の文壇の第一人者だっただけに、殊更に戦後ジャーナリズムの風当りは激しかったのだ。大正末期以来横光氏が果たした大きな文学史的役割を無視し、その燦然たる業績を黙殺するばかりか、戦争中の作品傾向を^{ひんしやく}響響、^{ひんしやう}憫笑する作家・評

論家が横行し、少し前まで長篇「旅愁」に感激した読者もそれを口にしなくなっていた。変革期の非情があらためて痛感させられた。

横光利一現象とも呼ぶべき戦後のこの事態についての木村徳三の実感の伴ったこの証言は、近代文学史の上には是非とどめておかねばなるまい。

横光利一は時代を失い、失意の中で健康を損ねた。そういう折に、最後の力作とも言うべき「微笑」を木村徳三は受け取り、〈戦時中の横光文学の残照ともいふべき小説〉との感を持った。しかしこの「微笑」は、当時の占領下の検閲に通る筈がなく、原稿通りに発表することは到底不可能であると判断され、数カ所にわたって削除した上で、「人間」昭和二十三年新年号に掲載された。横光利一が胃潰瘍を直接の因としてその生涯を閉じたのは昭和二十二年十二月三十日のことである。広津和郎が独特の魅力ある話しぶりで横光利一について語ったことを「微笑」を一読して思い出したとして木村徳三が記している。広津和郎らしい鋭く的確な指摘である。次に引いておく。

「横光君のは、僕らと逆なんだよ。やつぱり新時代

といふのかね。飛行機に乗るだろう、僕らだと、飛び立つにつれて、僕らが地上から離れていくだろう。ところが横光君はそうじゃないんだ。横光君はそのままでね、空がぐらつと傾き、地面が縦になり横になつて遠ざかつてゆくんだよ。空や地面のほうが動き、変つていつて、横光君はちつとも動かないんだ。だから着陸は、空が斜めになりだし、地面のほうが近寄つてくる。子供の感覚じゃないかね、これは。だからね、横光君の書くものには、胎内回帰がある、少くともそれと無関係だと言えないのじゃないかね。大人になつていないんだよ、僕らのように。いや、なりたくないものが強硬にあるのかな、そんな気がするよ……」

木村徳三は「文芸編集者 その発音」の「鎌倉文庫

白木屋時代」の章で、敗戦後、自らが「新しい文芸雑誌——文学・思想・芸術を総合する一種の文化雑誌的な文芸雑誌の実現を意図したのは、この国の文学の現状に対する自分なりの批評から発生したものであつた」と断つた上で、そのきっかけの一つは「志賀作品を極上とする私小説が連綿として現代文学の厚い底流を占めていく現状を疑問視し不満の気持をもち続けていた」ことであつたとし、もう一つは、「横光利一氏の国粹主義偏向

であつた。新感覚派運動以後常に時代の先頭を切つて日本文学を推進してきた横光氏の、その到達点が、感覚的な非論理性の敗北であつたことである」と、述懐している。つまり、志賀・横光の両者は共に「文学の神様」と讃仰された近代文学の代表者であり、この二人の影響下に日本の現代文学が営まれていると言つても過言でないと思われただけに、「共通する思想性・社会性の貧困の充足こそが、今後の文学創造における最大の課題」だと考えたのである。

人間として見た林房雄

木村徳三は、戦争責任問題に伴い、文学者の自己確立が論究される中でその必要を事新しく感じたのは、へ一部文化人の戦後の姿勢だつた」として、その姿勢の典型例を幾つかのタイプに分類して示し、その一つに「戦争中の右翼主義には頬かぶりして通俗作家に変身したひと」といふのを挙げてゐる。この通俗作家が誰だれを指しているのか具体的な人名を示してはいないが、転向文学者の林房雄もその一人ではあろう。

木村徳三は戦争末期に、「右翼文学者の旗頭として軍部のおほえもめでたいという林氏にはぜひ近づきになつておくべきだ」との先輩編集者の忠告に従つて一度だけ

訪問している。ところが、へこちらが左傾出版社と目される改造社の社員だったせいか、林氏は終始傲岸な態度でそつぽを向いたまま、ろくに口もきかなかった」という。

敗戦の翌年の秋頃、木村は川端康成から「林君から原稿を預かったのですが、あなた読んでください」と四十枚程の原稿を渡され、読んでみるとそれは従前の林房雄の作品からは想像も出来ないような情事ものの通俗小説であった。翌日、川端に、「この小説を『人間』に載っけるのはまずいですよ」と言い、お返ししたいと返事する。



〔林房雄氏が今後文学活動をするためには、自らの戦争中の行動に関連して敗戦を迎えた心境なり感想をまず発表すべきではないか、それが文学者であることのモラルではなからうか、そういう意味の寄稿なら『人間』にぜひいただきたい、それが無理ならせめて敢えて通俗文学者に転身する心境を公にしてもいい、小説は『人間』に向かないとしても、そういうエッセイにはページを割きます……といった私の読後感を詳しく述べた。文学者の戦争責任について、私は深く考えたわけでなく、まとまった意見があったのではない。ただ戦争中の動向を頬かぶりしたまま、すべて棚上げして方向転換するというような、文学者としての姿勢が納得できなかったのである。〕

戦後の出発時に於ける林房雄の文学的姿勢についての木村徳三のこの感懐は正論である。へ才気煥発の左翼作家、出獄すると一転して転向作家、それから押しも押されもしない右翼文学者と常に時代の尖端にあって注目的になり、華々しく活躍してきた林氏にとって、敗戦後に通俗作家の道を選んだのは、思い余った処世法だったと憶測できる」というのも正鵠を射ていよう。「息子の青春」、「息子の縁談」といったシリーズのものや、「女

読むべからず春の夜話」一連のボルノまがいのもの等、通俗作家としての林房雄の戦後の活躍は、才気煥発そのものであった。

無論、林房雄の側の主張もある。「文学的回想」(『新潮』昭和二十八年十月〜二十九年十二月)に記されているその証言を以下に引いておこう。

へ久米正雄、川端康成、高見順の諸氏が出版社『鎌倉文庫』をつくったが、私は曲ったツムジのせいで、それにも参加しなかった。(略)幸いに、小林秀雄が『新夕刊』入りをすすめてくれたので、どうやら一家餓え死だけはまぬかれることになった。(略)それはそれでまた面白かったが、しかし、小説は書きたかった。発表機関がなければ、なおさら書きたい。雑誌『人間』は毎月堂々と発行されていたので、小説を書かせてくれないかと川端康成さんに頼んでみた。よろしいでしょうという返事だったので、さっそく書上げを持って行った。出来栄も悪くないと思つたし、金百円也の前借もさせてくれたので、発表は確実と思つて楽しみに待ったが、三ヵ月待つても雑誌にのらない。川端さんに催促してみても、返事は曖昧である。何かあるなど感じたが、川端さんは慎重だから、「原因は

ジャーナリスト会議ですよ」とは教えてくれなかった。それが解つたのは、ずっと後になって、『人間』に争議みたいなものが起り、同社の編集部がジャーナリスト会議の闘士諸君ににぎられていたことが、外部の者の目にも明らかになった時であった。闘士諸君は若い作家達の前で公言したそうである。「たとえ重役でも株主でも、反動的作家の作品は絶対に拒否してみせる」(中略)／ある日、横須賀の列車の中で、夏目伸六君に会った。漱石全集戦後版の発行元某書店から『小説と読物』という大衆雑誌が出ることになったが、それに小説を書かないかという。(略)／私は喜んで、『香妃の妹』を書いた。好評であった。(略)私は『小説と読物』の定連執筆者の一人になった。『妖魚』『失はれた都』『紅魚白魚』『白夫人の妖術』などは、みなこの雑誌に発表されたものだ。『鎌倉文庫』でにぎりつぶされた『旅路の終り』も、ここで陽の眼を見た。戦後文壇は全然問題にしなかったが、大衆雑誌の編集者が注目しはじめ、私はだんだん売れっ子になった。ジャーナリスト会議の勢力は戦後簇生した「中間雑誌」までは及ばなかったようである。／間もなく私はG項によって正式に追放されたが、GHQは政治論文以外の執筆は許した。私は意地になって小説を書きま

くった。この乱作時代は私の文学経歴にとつてはマイナスの方が多かつたと思うが、ジャーナリスト会議に対する鬱憤だけは晴らすことができた。／その頃の私の小説に、久米正雄が「中間小説」という名前をつけた。私は「中間ではなく中央小説だ」とやりかえしたが、「中間小説」の方はジャーナリズムの通用語になつて、私は中間小説の開祖または主唱者にされてしまつた。」

太宰治と織田作之助

改造社に入社したばかりの頃、木村徳三は太宰治の生活や動向の荒唐ぶりを先輩の話から知るに至るが、へつ天才の異常性だと受け取つた私はそれほど驚かなかつた」という。しかしその翌年『文藝』編集部に移り、編集者として作家たちに接する機会が多くなるにつれ、太宰治には会いたくないという気持ちの方が自分ながら意外な程濃厚に胸裏に広がっていることに気がつき驚く。太宰治の文学に深く魅せられながら、それと反比例して太宰の実像からは遠ざかつていたのである。木村は太宰の担当になることを避け続けた。

昭和十七年の十月頃、太宰治が『文藝』に四十枚程の短編小説「花火」を寄稿した。当時「日大生殺し」と呼

ばれて世間を騒がせた事件を素材にした作品で、放蕩無頼の大学生の息子を持って余し思い余つた父親が井ノ頭池で水死させる話である。結末の妹の逆説的な言葉の効果と共に、その小説作りの巧みさに木村徳三は舌を巻くが、検閲にかかつてこの作品は全篇削除の処分を受けてしまつた。へすでに戦時体制に入つていて、以前ほど思想関係の発禁や削除処分は減つていたが、減つたそのこと自体が検閲強化の現われであり、編集者は常時脅迫感と緊張の中で仕事をしてきた。「花火」も、校了間際まで編集全員が何度も検討した末に掲載に踏み切つたのが、検閲は通らなかつたのである。尊属殺人の点は無論のこと、妹の述懐も良風美俗に反するものでもつてのほかだという。情景描写が迫真的であればあるほど、結末の効果が鋭ければ鋭いほど、検閲官は許せなかつたらしい(傍点・吉田)。所謂「大東亜戦争」に突入しては一年を経過した時点で思想・表現に対する取締りが一層強まり、軍国主義モラル一本化への道に全てが通じるとの様相が明瞭に窺える事柄である。昭和十四年辺りにしてへ太宰氏のような反時代的な新進作家(木村)という雰囲気既に存在していたのだから当然のことでもあつたらう。

戦争が終わり、その年の秋、新雑誌『人間』の編集に

とりかかった木村徳三は、早速太宰治に小説の寄稿を手紙で願い、直ぐに原稿が送られて来た。しかしその作品は、戦後初の新雑誌として創作欄の充実を意図していた木村にとっては期待外れの短篇小説であった。へ独自の鋭い感性と話術に欠けた、不思議にダルな感觸の身辺小説（木村）で、少なからず落胆したという。「大丈夫かい、そんな強引なことをして」と久米正雄社長から注意されながらも、「太宰治はもつといい作品が書ける筈です。書けなければウソですし、書いて欲しいのです」と答え、木村は率直な読後感を伝えて、次の力作を期待したいとの願いを書き添え送り返した。その短篇は、その後かなりな部分が書き直され、「親友交歓」という題名で『新潮』昭和二十一年十二月号に発表された。返送の二ヵ月程後、次作「春の枯葉」が寄せられ、それは木村の願望と期待を十分に叶えてくれた佳作の戯曲作品であった。昭和二十一年九月号の『人間』に掲載された。

戦後文学の代表旗手として太宰治は華ばなしく世の注目を集めたが、しかしその太宰に対して木村徳三は次のような思いを記さざるを得なかった。へしかし「斜陽」以後の諸作は、世評に反して、私には戦前の小説のように純粋な感銘を受けることができなくなったのである。私自身の感受性の風化か、作者の成熟のせいか。かつて

は太宰氏の傷心の結晶が心に沁みわたったものだが、その結晶の透明度と硬さが濁り狂っているかに感じられてならなかった。時勢の異常な急変も無関係ではあるまい。太宰氏には解放の混沌よりも、閉塞の純一のほうが合っていたのではないかとさえ思われた。生命を賭けて青春を生きた作家が成熟を生きる苦悩のすさまじさばかりが、私の読後感に残るのだった。因みに木村徳三は東大仏文科で太宰治の二、三年後輩に当たり、『文藝』昭和十二年二月号に発表された太宰の「逆行」に、自身の将来の方向を決定づけられる程の大きなショックを与えられたとの経験を持つていた。左翼運動の末期に旧制高校時代を過ごして、その間にいつか、自分は滅び去る階級の間だといふ観念を植えつけられていた（まさにそれよりも早い大正十一年の「宣言一つ」に於ける有島武郎がその典型であったかの如く）木村徳三にとって、「逆行」は、これこそがそのような終末観念と不安との決定的表現であるとの意味で心を劇しく撃つたという。このような言わば劇的な太宰治体験を十余年も前に持った身であったればこそ、へ太宰氏には解放の混沌よりも、閉塞の純一のほうが合っていたのではないかととの受止め方が可能であったのだろう。

木村徳三が旧制三高での後輩に当たる織田作之助と直

接識¹したのは、その出世作「夫婦善哉」が第一回「文藝推薦」作品となった後のことである。「文藝推薦」は、全国の文学同人雑誌から各誌がその年度に掲載した小説中の自薦作品を集め、その中の最優秀作品を「文藝推薦」作品とするという趣旨で、『文藝』が昭和十五年に新人登場の場として設けたもので、宇野浩二、青野季吉、川端康成、武田麟太郎の四人が選考委員であり、『文藝』編集部の木村はその実務担当者であった。第一回の選考当日、風邪気味で臥せていた武田麟太郎は、迎えに来た木村の顔を見るなり、「今日はもう決まってるよ。織田作の小説だよ」と言い、「織田以外にないよ」と繰り返したという。へ選考は、北条誠の「春服」と織田作之



助の「夫婦善哉」が最後に残り、宇野・武田両氏が「夫婦善哉」を極力推した。川端氏は「春服」を推薦して、「夫婦善哉」は作者の「下向きの表情」が感心しないと言う。青野氏は、推薦なのだから二作にしてもいいだろう、が敢えて固執はしないという態度で、結局武田氏の予想どおり「夫婦善哉」が「文藝推薦」作品に決定した。と証言した上で、へそれにしても、この「夫婦善哉」が織田作之助の代表作としてばかりでなく、映画化されテレビ化されて今日のように有名になろうとは、武田さんははじめ選考委員たち、編集者たちの誰もが考えも及ばなかったことと言うまでもない。小説の運命の面白さでもあろうか。と木村徳三は感想を記している（「武



（関大図書館所蔵）

田麟太郎」の項)。

その木村徳三が、敗戦後『人間』(鎌倉文庫)の編集にとりかかると直ぐさま織田作之助(木村は「織田君」と呼ぶ)に小説を依頼した。へ打てば響くように早速送られてきたのが、二五〇枚あまりの「世相」だった。戦争中に鬱積していたものを一気に噴き上げたような多様な構想と筆致の小説であった。もとのかたちでは阿部定を描いた小説が作中に織り込まれてあったのだが、私が依頼した枚数をはるかに越えているので、少し減らしてもらえまいかといって送り返すと、すぐに書き改められてきた原稿では、その阿部定の小説のくだりが削られて、前後が訂正補筆されていたが、私は更に推敲を求めた。そして『人間』四月号(昭和二十一年)に掲載した。

木村徳三自身、この作品については、「世相」の評判は褒貶半ばしたとはいえ、多くの注目を集めたことは確かだった。毀誉褒貶相半ばするというのは成功のしるしと言えよう」と前置きした上で、へ戦後文学の代表的な収獲であった」と、高い評価を与えている。

その頃、木村が或る雑誌に匿名による作家短評を書き、「織田作之助の小説は、あるいはまともなお座敷には出せないと言えるかもしれない。だがここには本来的な小説の面白さ、書く愉しさと読む愉しさがいきいきと活き

ている。とにかくも、うまくて栄養たっぷりな食べものがいっぱいならんでいる闇市を思わせる……」といったこと」をそこに書きつらねたそうである。すると直ぐに大阪の織田から手紙が届き、「筆者は木村徳三以外にはないと思うが、違いますか」とあって、感謝の意が込められており、木村は織田の坎の良さに驚いたという。このエピソードを紹介した木村は、へやがてまたたく間に織田君は人気作家の坂道を全速力で駆け上がった」と記している。しかし、当時の織田作之助の様子について、木村徳三は強い危惧の念を持ったようである。

へ上京した彼と会うたびに、その疾走ぶりの荒っぽさが気になった。(略)いわゆる大阪人らしい、彼の小説の題名をもじっているなら俗臭(傍点ママ)に、私は自分が関西人であるだけに余計に辟易した。同時に、人気作家の浮き足立った前のめりが感じられてならなかった。

(略)／＼逝く前の織田君については私は書きづらい。蒼白の顔で自分の腕にヒロポンの注射を打っていたその姿に対して言葉がないからである。痛切な愛惜の言であり、流行児となった有能な作家への批判の言でもある。ただ、木村徳三は、作家としての資質の面からは織田作之助よりも武田麟太郎の方をはるかに高く評価していた。「夫婦善哉」などと比べるべくもないほどの、文学表

現の洗練を示した武田さんのあの小説づくりの巧さというものゝといった評言にもそれは現われている。その上で木村徳三は織田作之助について、次のように記したのである。へ敗戦直後のあの飢餓と不安と可能性のごったがえしの真ただ中に生き、束の間の強烈な光彩とともに逝った織田作之助氏は、世相に殉じた、と言うより、哀しいほど世相そのものの作家であつた。

(この項続く)

(よしだ ながひろ・文学部教授)



「うちのお父さんは優しい」

検証・金属バット殺人事件」



鳥越俊太郎・後藤和夫 著
明窓出版（本体一五〇〇円）
二〇〇〇年四月十五日刊

私は人を殺すということはどんなことであってもしてはいけないことだと思ふ。しかしこの本にでてくるわが子を金属バットで殴り殺した父親の気持ちも理解できる。人は極限状態に追い詰められたときどうしようもない突発的な行動をとってしまうことがある。

この父親はいわゆる東大で、七〇年安保闘争の時代を経てきている。父親

は議論に議論を重ねることによって自らの価値観を形成してきた。議論することによって物事を理論的に考え、結論を導き出してきた。そうすることによって世の中のすべてを解決できると信じていた。我が子の不登校や家庭内暴力でさえも。父親は自分の信じた考えを曲げず、また自分に正直でありたいのども感じた。だから息子にも正面から体当たりでぶつかっていき、問題を解決しようとしてきた。

一方、息子のほうはそんな父親をどのように見ていたのだろうか。私は息子と年齢が近いため想像することは難くない。この世代というのは年が経てば忘れていくのか、また時代が違うのか、非常に敏感で難しい年頃である。それは誰もが一度は通る道である。自分自身でさえ一体何に悩み、苦しんでいるのかも分からないものである。反抗するのが反抗する理由だったりもすると思う。そういったなかで父親が訳知り顔で議論を展開されても神経を逆撫でするだけではないだろうか。

一方で父親は自分なりに一生懸命に

息子のことを考え、専門家に聞いたり、様々なひとのアドバイスを実行したり、息子にへりくだったりしている。また父親はそれがきくと息子のためになると信じて疑わなかった。それはこの父親が自分たちはこのようにして様々な苦難を議論などで一つ一つ解決してきたという自負があったからだとも思う。

もちろん父親は精一杯に息子のことを考え、悩み、苦しみ、息子のために出来ることなら何だってしてやろうという気持ちがあったことは確かだと思ふ。

しかし、息子にとってはそれらの行為は自分の抱える不安や苦しみを解決するのになんの役にも立たないものだったと感じる。むしろ父親に様々なことをされることによって余計に自分の哀れさが際立ち悩みや、苦しみを深刻にさせていったのではないかと感じられる。その結果、ますます家庭内暴力をひどくさせ、父親への無理な要求を課していくことになったのではないだろうか。そうしてその欲求に父親が答えることに対して再び自己嫌悪に陥っ

たのではないだろうか。その悪循環の繰り返しが息子を殺すという最悪の結果をまねいたのではないだろうか。

本を読みきった後に私は題になって「うちのお父さんはやさしい」という言葉を自分なりに解釈してみた。この言葉は息子が小学生のころ自分の周りの友達と父親たちと比べて子供の言うことを聞いてくれたり、一緒に遊んだりしてくれたりに対して父親にはなかった言葉だった。本にもかかれていたがこのとき父親はともうれしい気持ちだったそうです。やはり息子から「優しい」といわれることは大変うれしいことだと感じます。しかし、後に父親が述べているようにそれは弱さの裏返しだったのかもしれない。

なんでも息子の言うことを聞いて物分りがよく、息子にとって最高の父親である一方、自分が築き上げてきた価値観を否定されるのが怖くてほんとに息子のことを考えたりはしなかったのかもしれない。息子に優しくすることによって自らの価値観が正しいと思

えるようになり、ある意味では心のよりどころだったのかもしれない。息子が家庭内暴力や不登校に走ったときでも自分のしつけが間違っていた。つまりそれは自分自身の価値観も否定されたように感じたのではないだろうか。最後まで自分の考えを曲げず息子に接してきたのはある意味では父親自身身が世の中に否定されるのを恐れていたのではないだろうか。

最後に私が一番心に残った言葉があります。それは「死者は寛容です。反論しないから。」です。この言葉に私は父親の深い反省と後悔から出た言葉だと思いました。被告人である父親の裁判での傍聴をもとに書かれた本では、当然ながら父親の言葉しか出てきません。もしかしたら父親は息子を殺してしまつたあとでさえも自分のしてきたことは間違いがなく最後まで自分自身の間違つてなかつたと思いたかつたのかもしれない。しかし、やはりそれは父親からの一方的な見方で息子はこの言い分に反論したいところがあるのだろうと父親自身認識しています。息



子を殺してしまつた後で、ようやく自分が息子の暴力や不登校の苦しみの中で見えなかつたものが見えてきたのかもかもしれません。自分の考えを改めて見直す機会を得たのかも知れません。しかしその引き金が愛する我が子を殺してしまつたということなのは大変悲しいことだと思えます。

(H・T・法三年生)



「ニュースの職人―

真実をどう伝えるか」



鳥越俊太郎 著
PHP新書 (本体六六〇円)
二〇〇一年十月二十九日刊

まず私がこの本を読もうとしたきっかけとしてニュースというものに大変な関心があったことが一つです。

私達が普段、新聞やテレビなどで見ているニュースの裏側は一体どういう仕組みになっているのかに関心がありました。また、そのニュースを伝える人、つまりジャーナリストや報道記者、新聞記者などにも私自身の進路の関係

上、非常に興味がありました。この本を読んでいくうちにそのような職業が一体どういうものだったのかということとがわかってきました。また、報道関係の華やかな世界しかみてない自分を恥じました。

この本の中で鳥越氏は報道記者の厳しさや、辛さ、やりがい、喜びなどを自分の経験をふまえて話しています。その中で私はいくつかの気になる点がありました。

まずマスコミといわれる世の中に對して影響力を与える機関は国などの公権力からは一切に独立したものでなければならぬことを強調されていたことです。

本の中で鳥越氏がアメリカのメーチン・マイヤーの言葉でこのような事を言っていたのが大変印象に残りました。「ニュースとは何かを決めるのが、出来事の渦中にあるインサイダーではなく、ジャーナリストというアウトサイダーである点が大切なのである」という言葉です。

私はいままでテレビのニュースや新

聞記事などはいくら憲法で表現の自由が守られているとはいえ、実際は公権力の支配の下に機能していると思えました。その一つの例として現在のイラク情勢や北朝鮮の拉致の問題についても一時期あれほど騒がれていた拉致問題がさらなる被害者リストが提出されてからは一向にそのニュースは伝えられなくなってきたような気がします。

これは私の考えることですが、今現在は国内の経済情勢、イラク問題など様々な問題が山積しています。小泉首相の支持率も首相になった当時のものとは比べ物にならないほど下がってきています。そのような政治情勢の中では少しでも支持率をあげようとしてマスコミも意図的に小泉首相に好意的な情報しか流していないのではないだろうか。わたしは常々ある程度の世論というのは公権力からの介入によって行われているのだらうと思っていました。またそのこともある程度はしかたのないことなのかと感じていました。

しかしジャーナリストというものはそういうものに屈してはいけな

うこと、秘密を守るのがインサイダーの商売ならそれを探り出すのがジャーナリストの商売と述べていました。私はそういったことを言わなくてもいいくらいにニュースに携わる人たちがもともとアウトサイダーの目から私たちにニュースを提供できるくらい自由な国になつたらしいのと感じました。それが当たり前になるくらいに。しかし鳥越氏は残念なことにメイヤーが言う「権力側の発想ではなく、しかも広報・宣伝の類いではなく、世論操作の一翼を担っていない」そんなジャーナリストがこのメディアに一体どのくらい存在しているのだろうかということを残念がっていました。

また、本物のジャーナリストが育たない土壌には、日本のテレビ業界には視聴率がすべてだという発想が根強くあるとも述べていました。

次に、私が印象に残ったものは報道の現場です。報道というのは昼夜を問わず忙しいものだということは漠然ながらも思っていました。しかし、この本を読むとただ単に忙しいという言葉

だけでは片付けられない仕事だというものだと感じました。体力的にはもちろん精神的にも非常に強くなければ出来ない仕事だということが分かりました。

早朝から真夜中までそれこそ四六時中ニュースのことを考えておかなくてはならず、また一歩間違えればストカにもなりうるような取材も敢行したりとニュースに人生を賭けた人でなければ出来ないようなことだらけでした。その最たるものはやはり戦争下での取材ではないでしょうか。危険を承知でそこにいく。自分の人生を賭けた取材に本当に自分の命をまをかけてしまう。なぜそこまでして？その答えとして鳥越氏は戦国時代の武士のように功名心だと述べていました。やはり人よりも好奇心が強く、真実を伝えたいという思いが彼を突き動かしたのではないかと感じました。

また、報道は技術ではなくハートだということも体験談の一つとして語られている浜田幸一氏のことでも述べられています。やはり最後には人とし

ての繋がりが、ハートの繋がりが大事だと述べていました。「報道業界」の第一人者であり、数々の苦難を乗り越えてきた鳥越氏の言葉は説得力があります。

最後に、私も報道関係の仕事につきたいと考えていましたが、それは目指す上でこの本を読めてよかったと思います。華やかな世界を想像していた私には大きなショックでした。

それは地味で泥臭いものでした。しかしそれとともに、さらなる意欲がわいてきました。辛いからこそやりがいがある。そのことがこの本を読んできくうちに文面には表れなくてもにじみ出ています。ある種の挑戦状のようなものとしてこの本を読みました。やる気があるなら来い。と、それならば受けて立とうと。いつか私がこの本を読んで感じたようなことを未来のジャーナリストを目指す人たちに伝えられるようなことをしたいなとも感じました。

(H・T 法三年生)

ように良い時を対象としているので、あれからもう三年も経つんだねえと感じる記事も在れば、あれはまだ三年しか経ってなかったのかと感じる記事もありと、結局なんだかんだ言いながら少しずつ変わっていく世の中を捉える上でテキストと言えらるだろう。

この本の中から思いつくままにいくつかを取上げてみれば、

ついこの間立ち上がった日本スポーツ仲裁機構（J S A A、設立は〇三年四月七日）など、この本にある「千葉すず選手オリンピック代表落選問題（P一三〇七）」を経なければ到底設立され得なかったモノであろうし、「大使館職員脱税問題（P一三六―一三八）」など今となつては「そういう事をするから害謀省なんて言われるんだ」とのイメージで捉えられるものだが、当時としてはまだ「外務省、お前もか」というイメージを残していたのではないか。「カネ、カネ、キンコ事件（P一九二から九五）」も、未だに累犯が跡を絶たないし、「あの統一協会が通信社を買収」という記事など、

言われてみなければ「そういやUPIって書かれている記事やUPI―SUNって書かれた写真見た記憶がないなあ」と思うことすらなくなっている。（これが時事通信と共同通信の比較という記事なら「ホント共同通信ばかりが目につく」とでもいえるところであるが）

「銀行の利子は法律違反」というのがイスラム法の立場という記事を見れば「日本銀行自体が限りなく金利ゼロにしている今の世の中、いっそ国内の銀行全部、貸出金利をゼロにすればどうなるだろう、」とも思うし、「エリザベス女王は株取引がお好き」なんて「そりゃ日本の皇族ではどうみても考えられない！」ような話もさらっと紹介されていたり、はたまたこれ以上無いベタ記事である人事欄から「高裁判事『依願退職』のワケ」として、東京高等裁判所の判事氏が定年を二年半残して退官した理由を同じ高裁判事である高木俊夫氏の名を出しながら追求したり、「サラリーマン川柳ベスト一〇発表」をみれば「ハイ！できまます上

司は言うがやるのオレ！」なんて句があつて、そりゃ今の生協そのまんまやん！とか思いつつ、自分にとつても心の中にある「上司な部分」と「部下な部分」の双方にグサツとくる一句だなアと反省したりと、いやはや読めば読むほど色々考えさせられる一冊である。

―社会学部以外の方も、一連の鳥越氏著作の入門編としていかがですか―

（高松塘 法五）



「シネマ」

MOVIES OF THE 90s



ジャーガン・ミュラー 著
タッシェン・ジャパン (本体四九〇〇円)
二〇〇三年一月三十一日刊

毎年日本のみならず、世界中で数えきれないほどの新しい映画が公開、制作されています。また新たな年代に突入したこともあり、前のディケード、言い換えれば二十世紀の最後のディケードで映画界が残したものの、特筆するべき作品はどんなものだったのかを振

り返ることの出来る時期になったと思われるので、あらためて一冊の本にまとめようと編集者が思い立ったことがこの本のきっかけなのだそうです。

この本の中で取り上げられている数多くの映画は、毎年開催されるアカデミー賞を主とした上に、世界三大映画祭のカンヌ映画祭や、ヴェネチア映画祭、ベルリン映画祭といった映画界で大変権威ある賞を受賞した作品、またそれ以外にも世界的な話題作・大ヒット作として名をはせたものばかりが選ばれています。

もちろん、これらの賞で惜しくも作品賞は逃したものの、単独で主要な部門を受賞することができて、今もなお活躍している監督(ステイブ・ソダーバーク氏など)と俳優達(ジャック・ニコルソンや、ニコラス・ケイジなど)・女優達(ジュリア・ロバーツや、ヘレン・ハントなど)をも注目し、その作品も同様に紹介されています。

だから、タイトルは聞いたことはあるけれどあまり映画は見ない初心者にととつきやすく、それらの俳優・女

優の出演シーンのカット写真(すべてカラーで)が多数掲載されていて、それぞれ、映画の内容を表情豊かに表すのに重きを置かれていることもあり、とても読みやすいのが特徴です。

それに加え、それぞれの作品ごとに、ストーリー説明も兼ねて、詳しい説明文(新しい映画の撮影の手法、シーンの必要性または背景)も載っているの、個人レベルの知識だけでは持ち得なかった専門的な情報を知ることができ、映画を日頃よく見る人たちにとっても、新たな情報や今まで抱いていた以上の映画に対する認識が深まるきっかけになることでしょう。

僕個人、この本を読んで、元々気に入っていた映画の解説がとくに興味を引きました。

『羊たちの沈黙』で最も大詰めの場面で、ジョディ・フォスター演じる女性FBI訓練生が猟奇殺人犯を追い詰めるシーン。それはたったの六秒間に、かなり多めの二〇カットを使い、犯人が暗視スコープを使用して見る手探りで犯人を探しているジョディの姿と、

ジョーディの暗闇しか見えない映像をめぐりまぐるしく入れ替わらせる所。今までのシーンの緊迫感を観客側に見せるためと思っていたけれど、犯人が起す拳銃の撃鉄の音が暗闇と沈黙だけの不利な状態にいたジョーディが勝機を掴む瞬間を、無音ながら最も効果的に見せられると技術的な才能に富む監督ならではの判断から使われたのです。こういった監督独特の手法は説明を読んではじめて知ることができました。

『ブライベート・ライアン』——これはあらゆる媒体が幾度も伝えてきたことだけれど、映画冒頭の終わりがないように思えるほど数分間続けられるリアルな戦闘シーン。ここでステイブ・スピルバーグ監督が伝えたかったことは、戦争に参加する戦闘員達は、意味のない「騒音や汚物、血、吐しゃ物、死のカオスを経験するだけだ。戦場での遂行の様子を描いたものの、それは無駄死にという結果しか残らない」。最近、米英のイラク戦争で世界情勢がどんどん不安定化に進んでいることもあり、戦争によってひきおこさ

れることをさらに考えるきっかけとなっています。戦場に赴いている人々はどうも抱えないのだろうか？ 結果的に殺人となる行為を行うのに躊躇は生じないのか？ また戦場のイラク市民も、戦争が終結したとしても、家族や同胞を殺されたことを忘れることは決してないはずだろう……。この戦争が例え米英の勝利を迎えても、正当化しうる部分などカケラとしてないと思う。僕は今だからこそ、戦争とは何かと考えさせるシーンの意味を常に忘れずにいたい。

上記以外にも、本当にたくさん世界の映画がこの本には掲載されています。そんな多種多様な内容の映画に対し、それぞれ見る側は感想を持ち、感動し、考えることがあるでしょう。そういういった映画のリストの一例として活用できる本でもあると僕は思います。

この本は、シリーズとしての第二弾『80s』、第三弾『70s』が刊行を予定されているので、そちらのほうも見てみてはいかがでしょう。オンタイム

で見られなかった映画との新たな出会いが生まれるでしょう……。

(S・T 法三)

編 集 後 記

○昨年、当生協は四十周年記念を行った。四十年の軌跡を『たかが生協 されど生協』と『小さな志 大いなる問いかけ 千里市民講座の軌跡』としてまとめ、生協関係者、大学関係者、他大学図書館、北摂地域の図書館等に配布した。

この千里市民講座は、当時「文化砂漠」の千里で一九七四年（昭和四九）六月七日、小山仁示（文）先生の第一声で幕をあげた。そして一九七八年からゼミナール形式がはじまり、一九九六年まで続いた。

この千里市民講座を記録として残そうと、吉田永宏（文）先生を委員長として、竹下賢（法）先生、芝井敬司（文）先生、楠貞義先生（経・組合長理事）、木原基彌氏（講座事務局・遊文舎代表）に編纂作業のご尽力をいただき、講座の小山先生、小川悟（文）先生、講座運営委員の方々にご協力を得て、記念誌としてまとまった。この中で、学生に読ませたい講義録を、記念誌に収録せずに「書評」誌でという強い要望が出された。

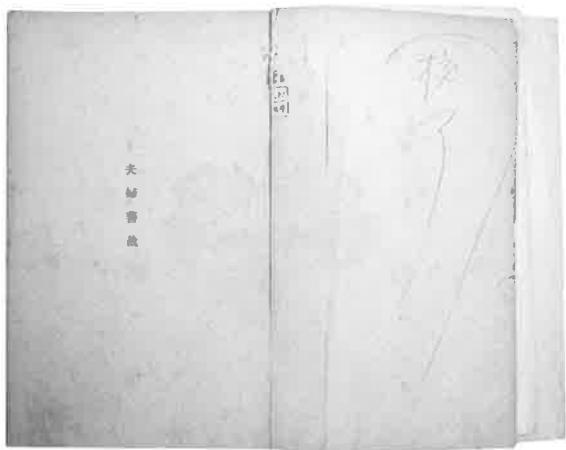
今回特集号として、宇井純さん、小田実さんの講義録に、小田康則先生（大阪電気通信大学）、吉田先生の解説文をそえて収録することができました。

吉田先生が述べられていますように、この講義録から「七〇年代に為された発言の歴史的証言の重さは減じていない」ことが理解できます。新鮮さを感じます。

○吉田先生にはさらに「近代日本文学史を考える」と題する連載原稿をお寄せいただきました。とりあげられていますひとつ、織田作之助『夫婦善哉』の初版本は大学図書館が所蔵しています。この装丁画が印象的でした。また、この校了本を裏表紙裏に載せました。

図書館所蔵の本の探訪として、元図書館勤務の仲井徳さんより「本のいろいろ」として今回より原稿を寄せていただきました。

このようにいろいろな出会いと協力をえました。○「ザ・スクープ」のキャスター鳥越俊太郎氏が社会学部の教授として、四月から講義が始まりました。著作を「読んで」として私たち学生の文を載せました。



(関大図書館所蔵)

第119号
書評

季刊 書評 2003年 5月 通卷119号

編集・発行 関西大学生協同組合・学生企画室内（書評）編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎06-6368-7530 or 6368-1121/内線71355)
頒 価 250円 e-mail:kucopor@sun-net.or.jp